

560-9



1200501511766

560

口
複
写

7. 14

21673

の



落語滑稽本集

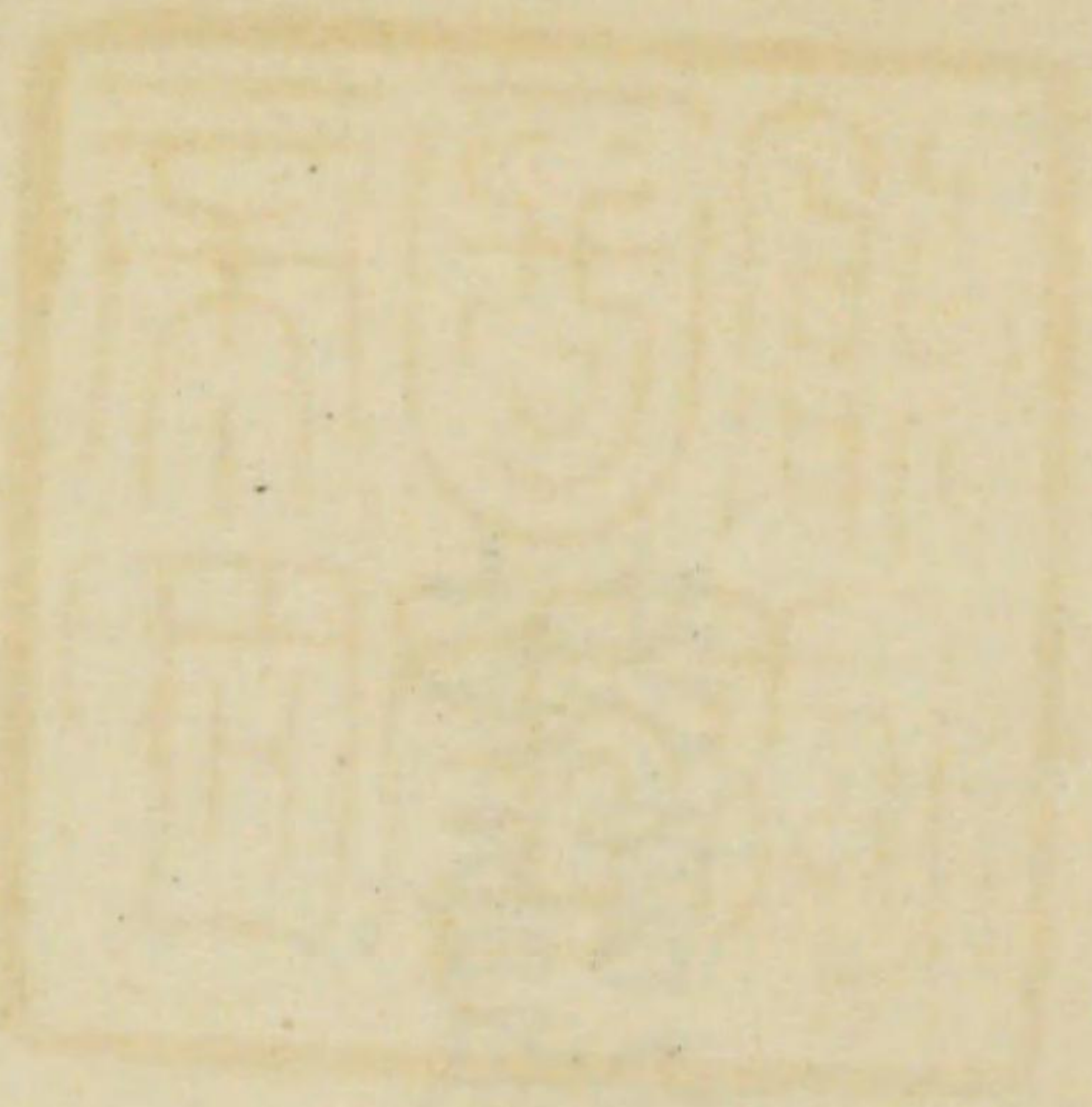
918.5
K42
(22)

旧題あり

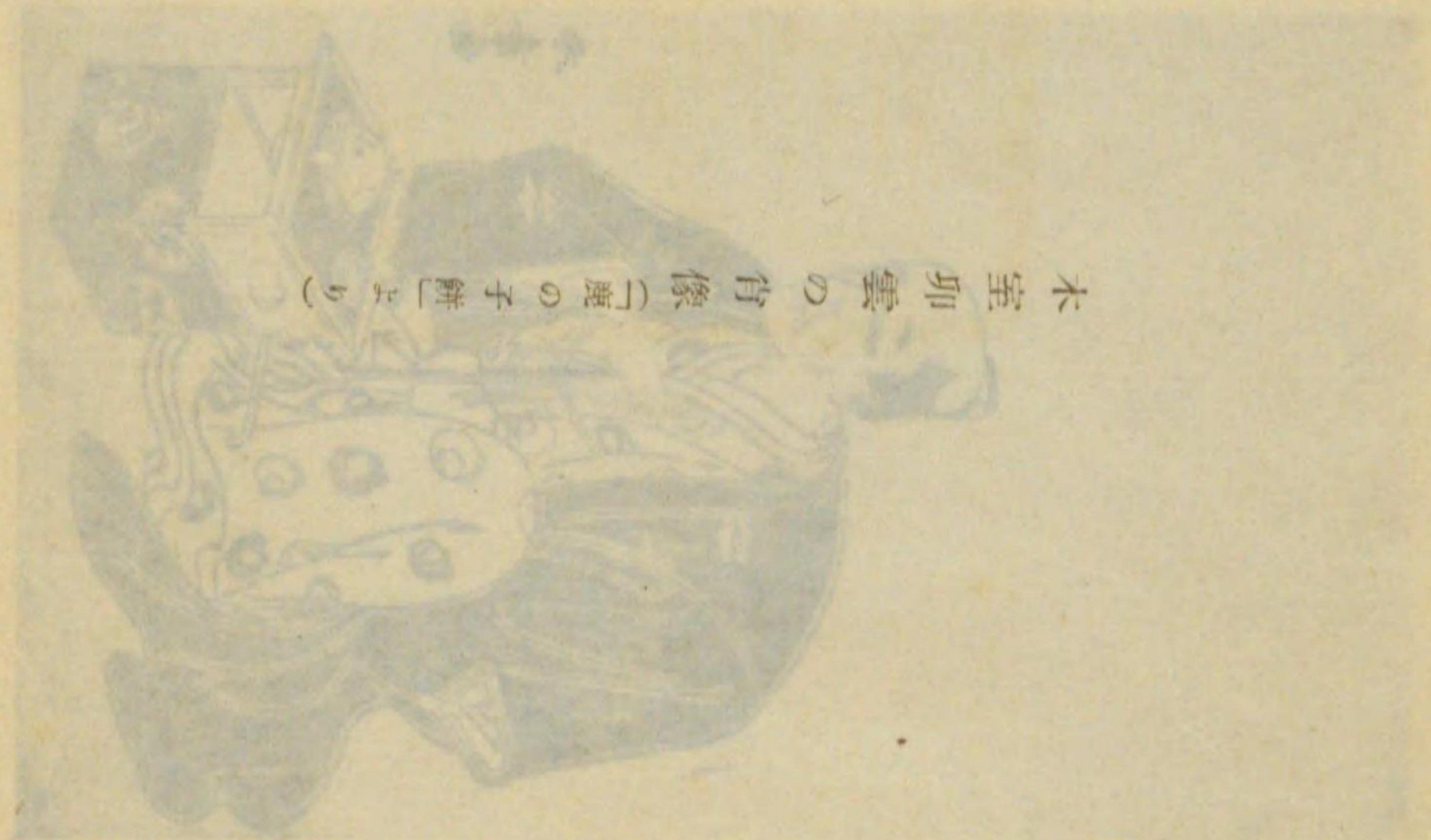


全

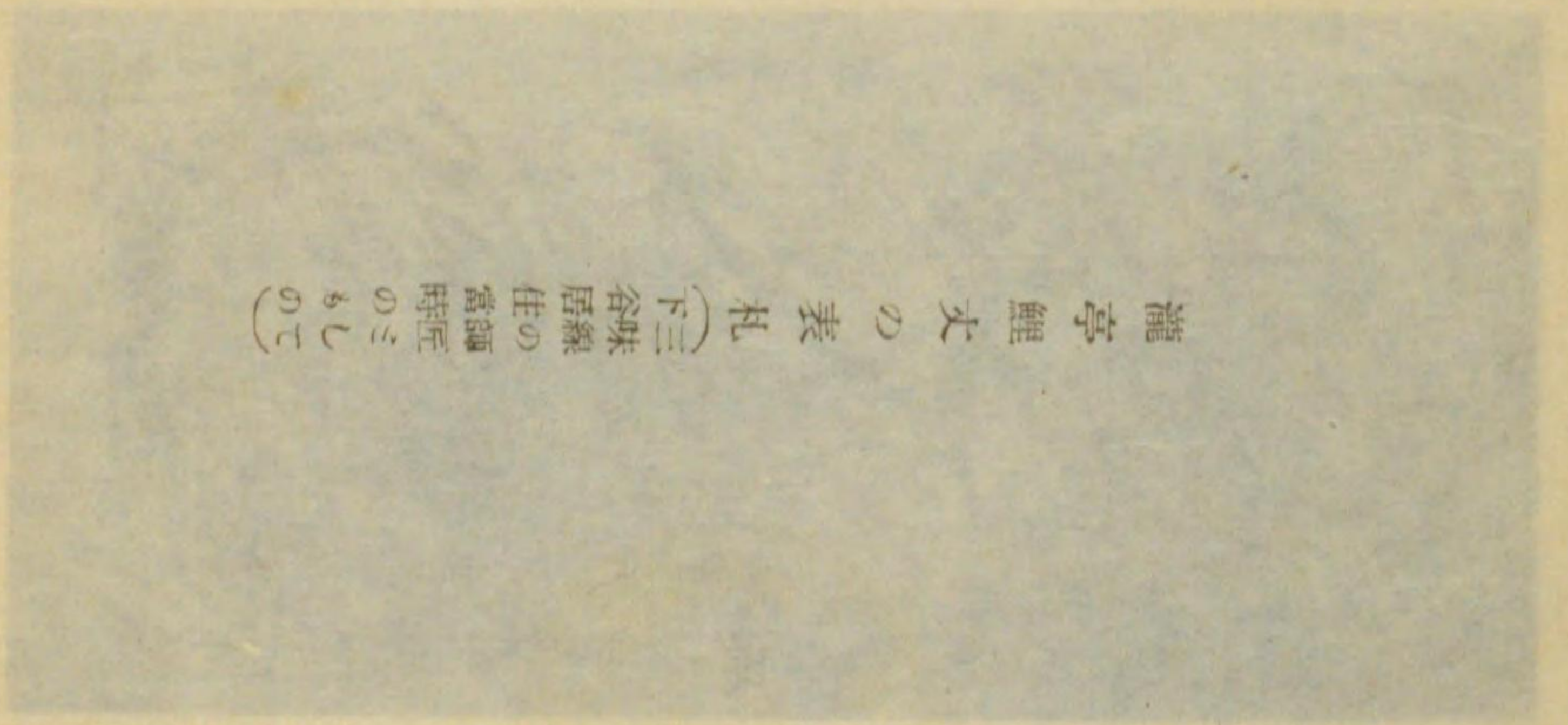




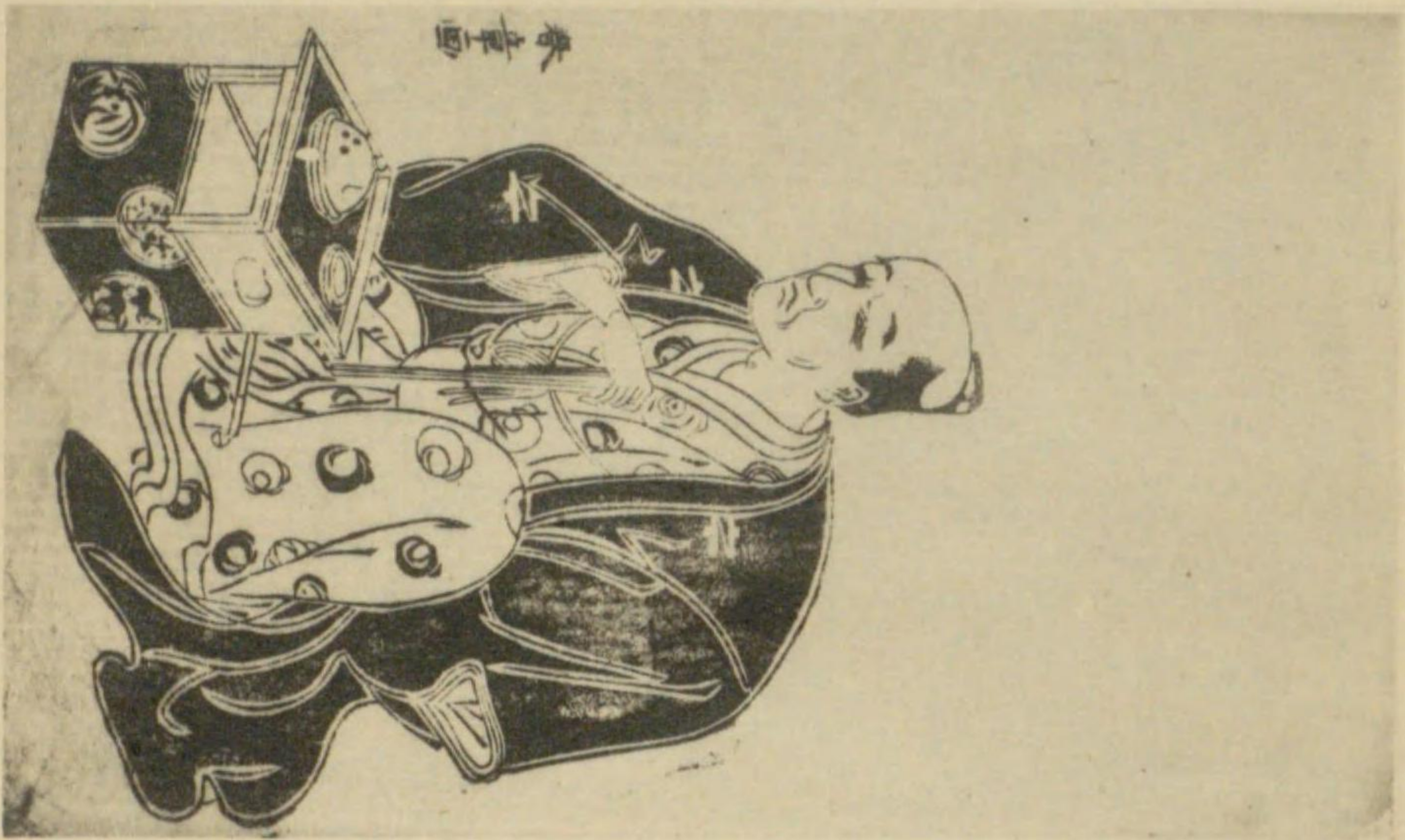
三味線大の表札



木室卯雲の肖像（題の子継より）



瀧亭鯉火の表札（三味線の住の富時のものとして）

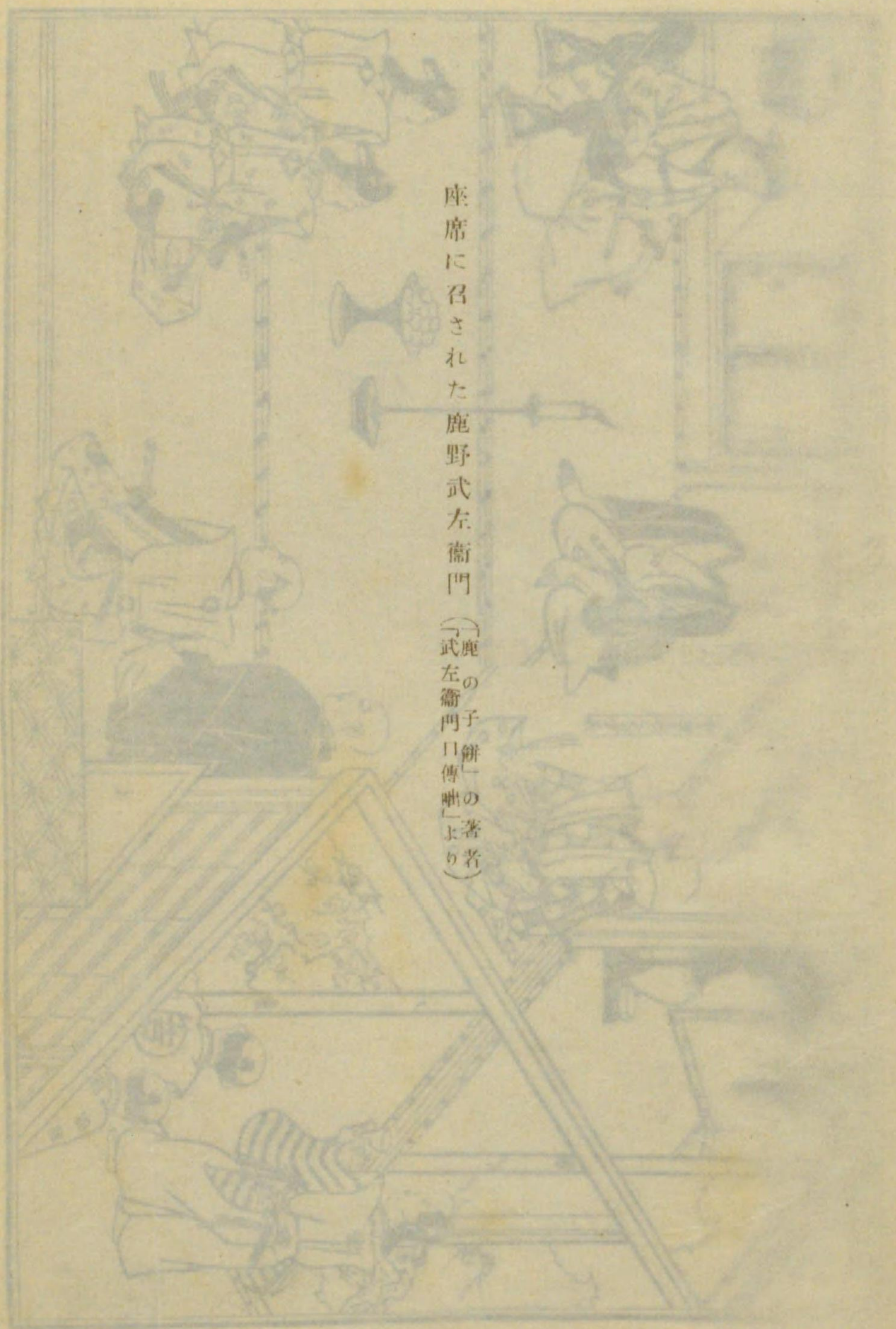


春草画

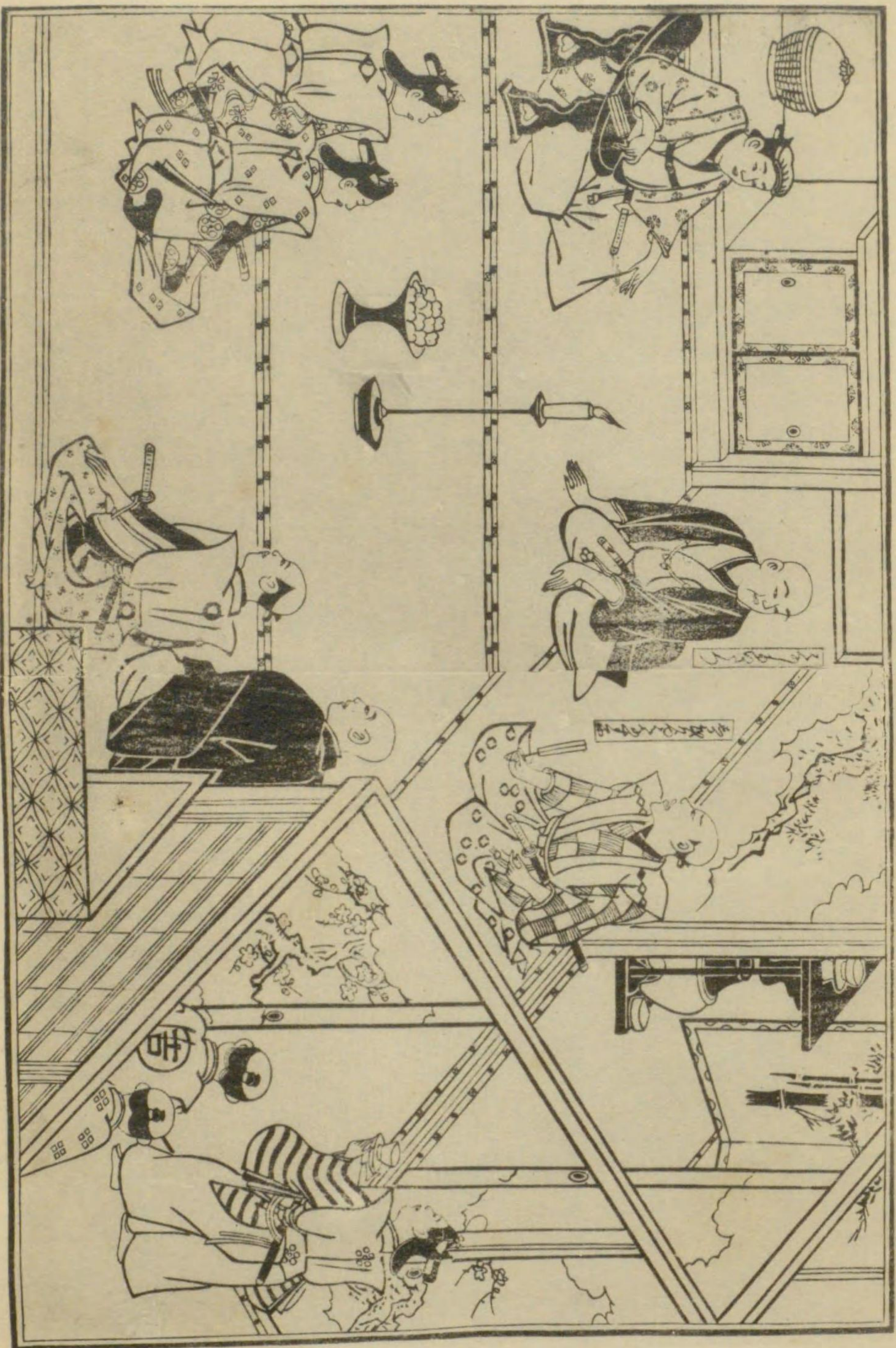


十三年眼書の竹葉(原の本朝とす)

(1) 1913年 竹葉の眼書 (原の本朝とす)



座席に召された鹿野武左衛門 (鹿の子餅の著者)
武左衛門口傳書より



酒席の行と止とありて廻裡九式講門
 (九式講門は酒席の行と止とありて廻裡の式あり)

560
9

代近 日本文學大系 第二十二卷 目次

花八 笑人……………瀧 亭 鯉 丈……………一—三七

妙竹 七 偏人……………梅 亭 金 鵝……………二九—四六

醒 睡 笑……………安 樂 庵 策 傳……………四七—七五

序……………四九

卷之一 名津希親方……………四八

謂被謂物之由來……………四一

落書……………四四

ふはとのる……………四三

鈍副子……………四六

祝ひ過ぐるも異なもの……………四七

目次 卷之二 賢だて……………五五

文字知り顔……………五二

不文字……………五三

自墮落……………五四

卷之三

一

目次

清僧……………五〇

卷之四

聞多批判……………五五

いやな批判……………五七〇

曾而那以合點……………五七五

唯 有……………五九

卷之五

妬心……………五九

上戸……………六三

人はそだち……………六三二

卷之六

兒の噂……………六四六

若道不知……………六六三

戀のみち……………六六四

悋氣……………六六七

昨日は今日の物語……………

作者未詳……………七七—八三六

詮ない祕密……………六七〇

推はちがうた……………六七二

うそつき……………六八五

卷之七

思ひの色を外にいふ……………六九一

廢忘……………七〇七

論……………七二一

舞……………七三三

卷之八

頓作……………七三六

かすり……………七五二

秀旬……………七五七

茶の湯……………七六三

祝濟多……………七六八

跋……………七七四

輕口露がはなし……………

露五郎兵衛……………八三七—八九三

目録……………八三〇

卷之一

第一 文盲なる人物の書付を批判する事……………八四七

第二 京の何がし丹波へ婿入する事……………八四七

第三 筆まめなる書付の事……………八四八

第四 本國寺大門にうゑ松の事……………八四八

第五 茶といふ言を利口に取りなほす事……………八四九

第六 重言くるしからずといふ事……………八四九

第七 大盡と大鼓のいはれの事……………八五〇

第八 目は慾のもとでといふ事……………八五〇

第九 涙は人も尋ぬるたね……………八五〇

第十 六波羅の勸進といふ事……………八五一

第十一 老いてもわかきにまけぬ事……………八五一

第十二 推量と違ふた事……………八五二

目次

第十三 人をけしてはまりのはやき事……………八五三

第十四 人はそだちの事……………八五三

第十五 恥をいはひなほす事……………八五三

第十六 小僧が利口で却つてめいわく……………八五三

第十七 悪性の名付親……………八五四

第十八 羨ましきは食物の火事……………八五四

第十九 親父がはたらき三國一……………八五五

第二十 苦身も品によるといふ事……………八五五

卷之二

第一 伊勢講の當番……………八五七

第二 蚤の式三ばん……………八五七

第三 藤の丸がかうやく……………八五八

第四 はなし鳥のさた……………八五八

第五 蛸やくしへの日參……………八五九

目次

第六	親も閉口	八五九
第七	佛前三具足	八六〇
第八	一家の内の物語	八六〇
第九	疱疹の養生	八六〇
第十	道化者のあいさつ	八六二
第十一	文盲の風呂入り	八六三
第十二	慾ふかき姥	八六三
第十三	舞まひと百姓と口論	八六三
第十四	坊主魚のねがひ	八六三
第十五	きれいずき	八六三
第十六	ひけふ者の喧嘩	八六四
卷之三		
第一	御霊大明神へ福を祈る事	八六五
第二	鹽打豆	八六六
第三	目くらの頓作	八六六
第四	賀茂川の大水	八六七
第五	おどけ言もときによる	八六七
第六	人より鳥がこはい	八六八
第七	百萬遍の萬日参り	八六八
第八	しはき坊主の若衆ぐるひ	八六八
第九	わたまし祝儀の使者	八六九
第十	とがのない盗人	八六九
第十一	魚がしやみせん引く事	八六九
第十二	せいじんの娘に意見する事	八七〇
第十三	東寺の塔にてばくちうち	八七一
第十四	淨土宗と法華宗との相住居の事	八七一
第十五	兒のつまみぐひ	八七二
第十六	慮外ちがひ	八七三
卷之四		
第一	始めてよばれし祇園會の客	八七三
第二	野郎の金剛念佛講	八七四
第三	人のうはき	八七四

第四	たき物の取りちがひ	八七五
第五	謹講の参會	八七五
第六	物のあはれは人の行末	八七六
第七	印刷屋のむすこ	八七七
第八	船のしかた	八七七
第九	文盲なる者の仔細を習ふ	八七六
第十	灸おろしのさた	八七八
第十一	新佛一體の望み	八七六
第十二	同じく不審	八七九
第十三	花見の提灯	八七九
第十四	りんきばなし	八八〇
第十五	同講のくはだて	八八〇
第十六	辻談義	八八一
第十七	順禮捨子の咄	八八一
第十八	水瓜のせんさく	八八一
卷之五		
第一	諺にもせよきびのよい事	八八三
第二	葬禮の七五三	八八四
第三	小法眼の二幅一對	八八四
第四	道頓堀にて巾著切とらへし事	八八五
第五	性わるくの坊主	八八五
第六	此の碁は手みせ禁	八八六
第七	伊勢ぬけ参り	八八七
第八	九品の淨土九々の算用	八八八
第九	常題目の地形	八八八
第十	えびす講の書狀	八八九
第十一	辯説の過ぎたる乞食	八八九
第十二	入院ぶるまひ	八八九
第十三	しらねば是非もなし江戸の島原京の島原	八九〇
第十四	慾のふかき長老	八九〇
第十五	後家の町役	八九一
第十六	小間物屋が覺帳	八九一

目次

第十七 十夜の長談義

八九三

江州土山のばくらう

八九三

鹿の巻筆

鹿野武左衛門 八九五—九四〇

序 八九七

目録 八九八

卷之一

ばんどう屋才介 九〇一

三人ろんぎ 九〇三

せりふの稽古 九〇六

田舎者の胴忘れ 九〇六

卷之二

筆屋のじゆりやう 九〇八

にせ八島 九〇九

二番目 九一一

夢中の人 九一三

火の見櫓見立 九一四

卷之三

太鼓櫓の樂書 九一七

淺草觀音梅の狂歌 九一七

堺町馬の顔見世 九一八

二くづし 九一九

正月は物いまひ 九一九

無筆の玄關帳 九二〇

夢想の讀みそこなひ 九二〇

野暮のかけまもち 九二三

吉原雜遊び 九二三

佛事のいんしん 九二三

吉原酒の行末 九三四

清經うたひの聞きなし 九三五

卷之四

功德の念佛 九三六

きかぬ奴の衆道 九三七

車善七の火事 九三七

代官の輕口 九三七

表具屋の掛物 九三八

初心の大黒舞 九三〇

看板の讀みちがひ 九三一

卷之五

新話笑眉

作者未詳 九四一—九七八

序 九四三

目録 九四四

卷之一

目次

一 椀飯振舞 九四七

二 章でしらする文字の作意 九四七

三 見立て影法師 九四七

目次

四 龍宮のあやつり	九四八
五 繪師の理くつ	九四八
六 祈禱者の龜相	九四九
七 下手の談義	九四九
八 水中のためし	九五〇
九 大悲の利生	九五〇
十 盲人の七日参り	九五二
十一 初心なきつね	九五三
十二 かはった相撲	九五三
卷之二	
一 釣舟のうらかた	九五四
二 かはった出来口	九五四
三 鷄鳥問答	九五五
四 春雨四天王	九五五
五 道中付の二度讀み	九五五
六 關守の藝所望	九五六
七 夜明のとりちがへ	九五七
八 身は寒けれど口は大名	九五七
九 川越の順禮	九五八
十 こまつた挨拶	九五九
十一 狐のしやれ	九五九
十二 日待の雑談	九六〇
卷之三	
一 新藤戸	九六一
二 松によする鯛	九六一
三 淺間が嶽	九六二
四 乞食張郎	九六二
五 文盲の柱曆	九六三
六 佛前の寶鏡	九六三
七 腹をかゝふる歸きのかご	九六三
八 律儀なうたひ嫌ひ	九六四
九 鐺のほめすごし	九六四
十二 一向宗の尤もな不審	九七二
卷之五	
一 日本人のはまり	九七三
二 僕が作意は御無心の種	九七三
三 料理人のとんさく	九七四
四 馬耳の東風	九七四
五 番太が料簡違ひ	九七五
六 かなの讀みちがひ	九七五
七 豆腐屋が聞き違ひ	九七五
八 云ひなし様でをかしい病氣	九七六
九 直をしてはまる商ひ	九七六
十 樵夫の名言	九七七
十一 比丘尼の心中	九七七
十二 五兵衛が安堵	九七七

十 盤上の出来口	九六五
十一 大學講釋	九六五
十二 片言の禁句	九六六
卷之四	
一 蜀江の翼	九六七
二 寸尺の取りちがへ	九六七
三 朋友の料簡違ひ	九六八
四 祕事はまつげ	九六八
五 年は經ぬれど新しい口	九六九
六 化性のはいかい口	九六九
七 客のはまり	九七〇
八 町代の律儀	九七〇
九 錢を趣向に狂歌の返答	九七〇
十 龜相のほめ過し	九七一
十一 野郎の心中	九七一
十二 一向宗の尤もな不審	九七二
卷之五	
一 日本人のはまり	九七三
二 僕が作意は御無心の種	九七三
三 料理人のとんさく	九七四
四 馬耳の東風	九七四
五 番太が料簡違ひ	九七五
六 かなの讀みちがひ	九七五
七 豆腐屋が聞き違ひ	九七五
八 云ひなし様でをかしい病氣	九七六
九 直をしてはまる商ひ	九七六
十 樵夫の名言	九七七
十一 比丘尼の心中	九七七
十二 五兵衛が安堵	九七七

目次

稿話 鹿の子餅

木室卯雲 九七九—一〇〇九

序 九八一

桃太郎 九八三

牛と馬 九八三

煙艸入 九八四

鞠 九八四

俄道心 九八五

盗人 九八五

提灯 九八五

浪人 九八六

馬鹿娘 九八六

葬 九八六

鼻捻り 九八六

鶉 九八七

御髭 九八七

劍術指南所 九六七

蜜柑 九八六

醫案 九八八

下女 九八九

初夢 九九〇

田舎者 九九〇

新五左殿 九九〇

雪隠 九九一

小便 九九一

悔み 九九二

尻 九九三

文盲 九九三

戀病 九九三

無筆 九九三

海鼠腸 九九四

牽頭持 九九四

名所知り 九九四

試合 九九五

上り兜 九九五

炮碌賣 九九六

料理指南所 九九六

翠玉 九九七

唐様 九九七

薪屋 九九八

物知り 九九八

尻端折り 九九八

座頭 九九八

雷 九九九

喜勢留 九九九

豆腐屋 一〇〇〇

角力場 一〇〇〇

十字 一〇〇一

將棊 一〇〇一

大石 一〇〇一

唐相撲 一〇〇一

菜うり 一〇〇一

芳町 一〇〇一

大錢 一〇〇一

借雪隠 一〇〇一

九郎助 一〇〇一

夜發蕎麥 一〇〇一

藥罐 一〇〇一

伊勢物語 一〇〇一

通小町 一〇〇一

朝鮮人 一〇〇一

比丘尼 一〇〇一

目次

押込	1006	野等息子	1007
小鼓	1007	糞	1008

壽々葉羅井

志 丈 1011-1035

序	1013	盗人	1019
女中の代参	1015	借錢乞	1019
あんけら	1015	浪人者	1010
開帳	1016	勘畧奉行	1010
赤貝	1016	どら息子	1010
女郎の癖	1016	雷ざらひ	1011
役者の女房	1017	桃太郎	1011
質屋の後家	1017	げぢく	1011
奴のなま酔ひ	1017	浪人の鍬刀	1011
兎相者	1018	大一座	1011
人相見	1018	煙管の鷹首	1011
女のはだか参り	1019	だららく指南所	1011

晦日	1013	論語	1018
きおひ	1013	紙帳	1018
いんぎん	1014	ばちびん	1018
貧乏人	1014	遠國者	1019
禿	1014	馬士	1019
干鯛	1015	鉢の木	1019
富士の裾野	1015	痘瘡	1010
竹田料理	1015	新宅	1010
刀のそり	1015	鯉の漉登り	1011
大食	1016	むらさき	1011
なががたな	1016	使	1011
かつば	1016	かけあらしひ	1011
開帳の上物	1017	時花うた	1011
物しり	1017	鬼むすめ	1011
はつ茸	1017	ねじやか	1011
浪人の自慢	1017	座頭	1011

目次

目次

どろばう……………一〇三
 地藏……………一〇四
 佛のむしん……………一〇五

落無事志有意

鳥亭焉馬……………一〇七—一〇八—一〇九

序……………一〇三
 歳旦若水……………一〇一
 春興神遊び……………一〇三
 歳暮年の市……………一〇四
 蓮牡丹……………一〇五
 直段……………一〇七
 以上……………一〇八
 竹光……………一〇九
 きん酒……………一〇九
 大鼓……………一〇九
 けいこ所……………一〇九
 蛇……………一〇九
 りちぎ者……………一〇一
 大屋……………一〇二
 湯どうふ……………一〇三
 名酒屋……………一〇三
 祭り……………一〇五
 女郎の鬘……………一〇五
 米……………一〇四
 白眼競……………一〇五
 柔術……………一〇五
 玉手宮……………一〇六
 十軒店……………一〇七
 釣り好き……………一〇七
 三人男……………一〇七
 俊寛……………一〇八
 伊勢参り……………一〇九
 百夜車……………一〇九
 稚名……………一〇九
 妙薬……………一〇九
 野狐……………一〇九
 雷の玉子……………一〇九
 文……………一〇九
 そゝか……………一〇九
 無筆……………一〇九
 孝行……………一〇九
 七十二候……………一〇九
 駕籠好き……………一〇九
 茶漬……………一〇九
 田舎者……………一〇九

目次

虎……………一〇六
 疊ざん……………一〇六
 ひろひ物……………一〇六
 勘畧の巻……………一〇六
 十露盤……………一〇六
 脇差……………一〇六
 みえ坊……………一〇六
 富士講……………一〇六
 はやり諷……………一〇六
 星……………一〇六
 化物……………一〇六
 にはか……………一〇六
 ほしいもの帳……………一〇五
 松魚……………一〇六
 唐女……………一〇六
 玉……………一〇六
 三人男……………一〇七
 俊寛……………一〇八
 伊勢参り……………一〇九
 百夜車……………一〇九
 稚名……………一〇九
 妙薬……………一〇九
 野狐……………一〇九
 雷の玉子……………一〇九
 文……………一〇九
 そゝか……………一〇九
 無筆……………一〇九
 孝行……………一〇九
 七十二候……………一〇九
 駕籠好き……………一〇九
 茶漬……………一〇九
 田舎者……………一〇九

目次

閑居……………	一〇九	家名……………	一〇〇
丁稚の無心……………	一〇六	閏七月……………	一〇一
高尾……………	一〇七	福鼠……………	一〇一
辻八卦……………	一〇〇	跋……………	一〇三

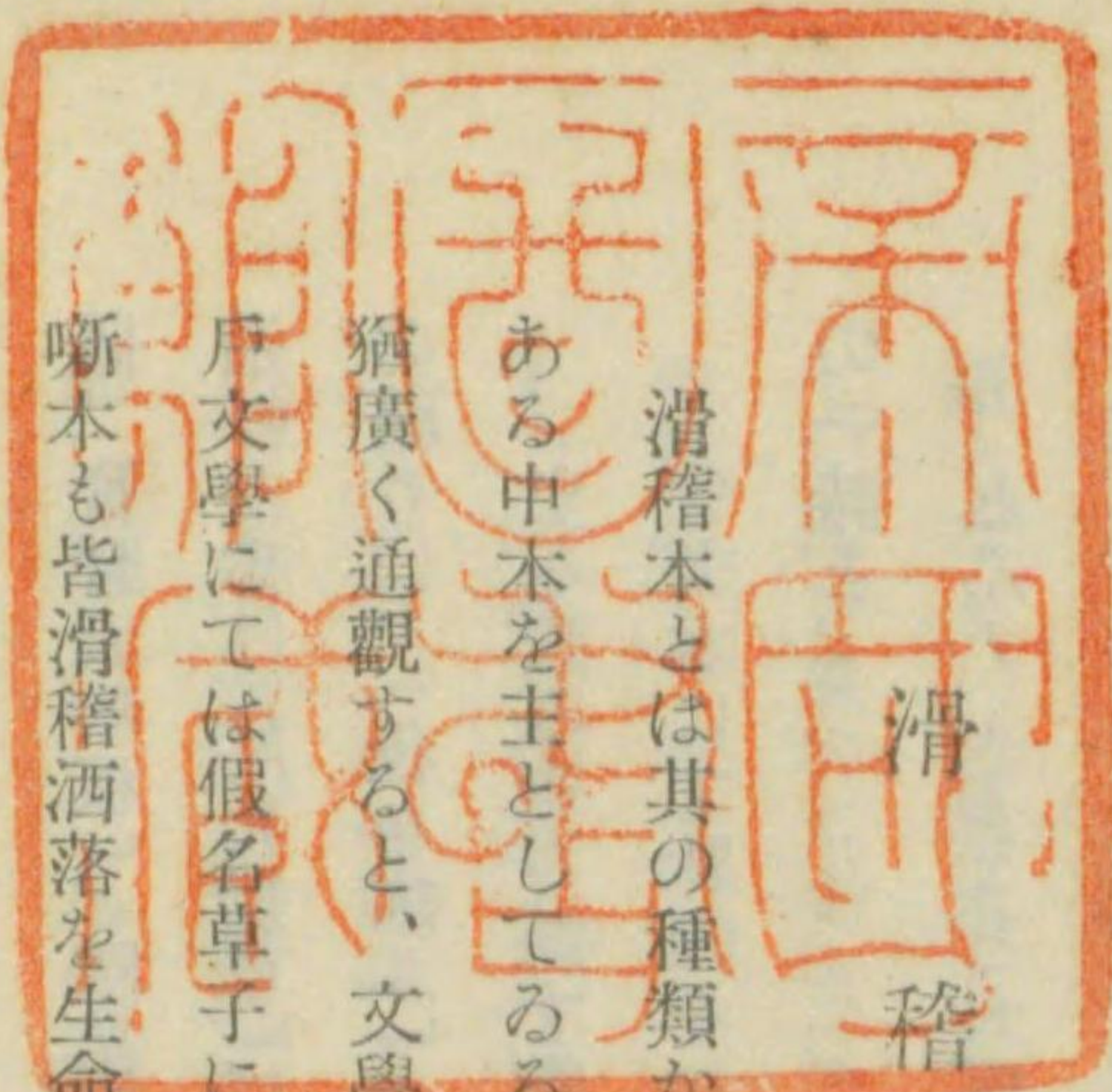
解題

文學博士 笹川種郎…卷頭一三五

目次終

解題

文學博士 笹川種郎



本

滑稽本とは其の種類から命けた名稱で、其の形から云ふと、半紙本と半紙半截の小本との間にある中本を主としてゐる。三馬の『浮世風呂』、一九の『膝栗毛』も、皆此の種類に屬するもので、猶廣く通觀すると、文學中、滑稽を描いたものは、實に夥しく、王朝文學の中にもこれあり、江戸文學にては假名草子にも、浮世草紙、八文字屋本中にもこれあり、黄表紙、洒落本は固より、嘶本も皆滑稽洒落を生命としてゐる。然しそれらは形の上から、其の發達の徑路から、其の特殊の性質から、各隸屬する範圍があつて、之れを滑稽本のうちには列しないのである。されば滑稽本と稱するものは、滑稽の裏に教訓を寓した靜觀房好阿の『當今下手談義』(五冊、寶曆二年板)、信更生の『都莊子』(四冊、同上)、伊藤單朴の『教訓雜長持』(五冊、同上)などを以て、其の初め

としてゐる。なほ好阿には、『教訓續下手談義』『當世兩面鏡』、單朴には『教俗錢湯新話』『教訓差出口』『楚古良探』等の著があり、教訓を寓した滑稽本は一時行はれたが、時代の反映は、色道談義となつて、止藏坊の『當世花街談義』(五冊、寶曆四年板)、柳堤居皆阿の『花菖蒲待乳問答』(五冊、寶曆五年板)、墮落助の『禁現大福帳』(五冊、同上)などを出すに至つた。寛延元年に畸人志道軒が書ける『元無草』は彼の辻講釋とともに、此の種のものに影響する所が多かつた。『元無草』の終りに、「我を諂ふ」と題して、

史を讀み軍を談す數十春 大慧閣の下名を得ること新し

曾夫木にて牀頭を扣くの日 白眼にて總て世上の人を看る

の一詩と、

とん／＼と大坂關ヶ原打ちをさめたる萬世の聲

の歌とを録したるがごとく、彼は陽形の本を以て机を叩きながら辻講釋をなし、「天とは二人とかく、夫婦和合のとき云々。」と云ひ、「善惡二つなし、我が棒は諸道の節を打破り、皮を剥ぎ、大元の味を叩き出し、諸人の口に膾炙するものなり。」と稱して、神儒佛にこじつけの色道論。片々たる小冊子『元無草』も、奇才風來山人の懐に入れば『根無草』となり、『風流志道軒傳』となり、『瘞

陰隱逸傳』『放屁論』『天狗髑髏鑿定緣起』『菩提樹の辨』『飛だ噂の評』『長枕褥合戦』等の奇文を作りて、滑稽の裏に不羈の氣象を現はした。狂歌壇の猛者と聞えた平秩東作も、『水濃往方』『當世阿多福假面』に、滑稽の才を瀝下してゐる。

江戸の太平に馴致されて、江戸人の輕妙機智は、文藝の上に遺憾なく其の特色を發揮し、黄表紙となり、洒落本となり、狂歌となり、川柳となり、上方に開いた文學の花も江戸の土に養はれて、江戸風のものとなり、八文字屋本の滑稽も江戸流の滑稽となつた。竹杖爲輕も、島田金谷も内新好も、喜三二も、芝全交も、振鷺亭も、山東京傳も、森羅萬象も、式亭三馬も、十返舎一九も、洒落本作家と云はず、黄表紙作家と云はず、滑稽本に筆を染めることとなつた。特に三馬と一九とは、此の種のものに多くの述作をなしたのである。

一九の『東海膝栗毛』は、初篇より八篇まで全部十八冊、『續膝栗毛』は、初篇より十二篇まで全部二十五冊、三馬の『浮世風呂』は、全部四篇九冊の長篇であつた。滑稽本ももう四五冊の短篇ではなくなつて來た。『花曆八笑人』『滑稽和合人』『林七偏人』のごときは、即ち此の長篇ものである。

若し夫れ江戸に於ける滑稽を主とした著作になると、其の種類は極めて多い。道中記に倣つた

雄飛堂の『善惡道中獨案内』(一冊、寶曆六年)、無々道人の『迷所邪正案内』(五冊、同上)、多羅福孫右衛門の『無彈砂子』(一冊、天明六年)、一筆庵可候の『善惡道中記』(七冊、弘化元年—文久二年)の如き、評判記に擬した泉山坊、梁雀州合作の『評判龍美野子』(三冊、寶曆十年)、式亭三馬の『花江戸客者評判記』(三冊、文化八年)の如き、畫作物の一拂齋作『人遠茶懸物』(一冊、天明六年)の『三芝居京傳作』當世小紋新法』(一冊、同上)、『小紋雅話』(一冊、寛政二年)、『奇妙圖彙』(一冊、享和三年)、東西庵南北の『下界圖會』の如き、風來山人の『風流志道軒傳』にある異國廻りの趣向に倣つた遊谷子の『異國和莊兵衛』(四冊、安永三年)、澤井某の『異國和莊兵衛』後篇(四冊、安永八年)、笑止亭の『異國滑稽素人芝居』(五冊、天明二年)、宇多樂庵嬉丸の『異國滑稽羽栗毛』(一冊、文化四年)のごとき、『滑稽素人芝居』『樂屋方言』『戲場粹言幕の外』『見通鄙戲場』『狂言田舎操』『壽茶番狂言』『田舎芝居忠臣藏』新話旅芝居田舎正本』『口豆飯茶番樂屋』『方言競茶番種本』『茶番早合點』芝居樂屋雜談』『初昔茶番出花』『十二趣向茶番噺』の如き、芝居、茶番が、つたもの、若しくはもぢつたものを初めとして、何物にても取つて之れを滑稽の資料とし、又滑稽化せんとしたのである。然し其の多くは淺薄な穿ちと、くすぐりとを生命として、滑稽の上乗に入つたのは、殆んど見當らない。

落 語 本

古くは輕口話、後に小咄、之れを集めたものを噺本、又は落語本と稱する。此の種の最も古いものは、元和活字本の『戲言養氣集』二冊である。これについて寛永年間に刊行された『きのふはけふの物語』二冊があり、安樂庵策傳の『醒睡笑』三冊がある。萬治二年になると、『百物語』二冊、中川喜雲の『私可多咄』五冊があり、寛文八年の『一休ばなし』四冊、同十二年の瓢水子松雲の『狂歌咄』三冊、『一休關東咄』三冊、『徒然御伽草』一冊があり、延寶より天和にかけては、『輕口曲手鞠』四冊、『秋夜友』五冊、『噺物語』三冊、『輕口大わらひ』五冊、『當世手打笑』五冊、『新撰咄揃』五冊が出板されてゐる。此等は江戸で出版されないで、多く上方に印行せられた。

『醒睡笑』の作者たる安樂庵策傳は、京都の吉田に住してゐた。本姓は平林、通稱を平太夫と云ひ、後に誓願寺中竹林院の住僧となり、醒翁と號し、金森宗和に就いて茶道を學び、常に諸侯伯の邸に出入し、最も豊太閤に愛せられた。又頓智の才に富み、笑話に巧みであつたので、座興を助け、大いに世間の珍重するところとなつてゐた。晩年耳を聾したので、筆を以て舌に代へた。寛永十九年正月八日、八十九歳を以て歿した。

延寶天和の頃には、『輕口大わらひ』『當世手打笑』『新撰咄揃』等が上梓せられたが、京都に露の五郎兵衛なるものがあつて、落語に巧みであつた。五郎兵衛は祇園、眞葛原、四條河原、北野などに小屋がけして辻噺を興行してゐた。後に薙髪して露休と號し、又露の字を分けて雨路と稱した。元祿十六年五月九日、六十一歳にて歿した。其の作に元祿四年板の『御存知輕口露がはなし』、同一年板の『露新輕口ばなし』、同十四年板の『露五郎兵衛新ばなし』、元祿年間板の『露休ばなし』、寶永二年板の『露休置土産』がある。同時に大坂に米澤彦八があり、生玉を定場として辻噺をなして大いに行はれた。其の作に『輕口御前男』(元祿十六年板)があるが、其の序に、

此の頃京都へ上りけるに、都の若き衆、何と彦八、難波に新しい事はないか承はらん。されば夕べ淀川にて水が物申しました。何とく、水が物いふ、不思議にあらず、こちの都には露が咄をする。とありて、露の五郎兵衛のことを云つてゐる。

京の露の五郎兵衛、大坂の米澤彦八に對して、江戸に鹿野武左衛門があつた。彼は江戸の長谷川町に住し、本職は塗師業であつたが、座敷仕方咄で有名であつた。中橋廣小路に筵張りの小屋をかけて、晴天八日間興行した。貞享二年、『鹿野武左衛門口傳話』三冊、同三年、『鹿の卷筆』五冊、元祿年間に『はなしの間屋』一冊を出した。『鹿の卷筆』に次の一話が載つてゐる。

市村芝居へさる霜月より出る齋藤甚五兵衛といふ役者、前がたは米河岸にて刻其賣なり。とつと輕口にて器量もよき男なれば、とかく役者よかるべしと、人も云ひ、我も思ふなれば、竹之丞太夫元へ傳手を頼み出けり。明日より顔見世に出ると云うて、米河岸の若きものどもに頼み申しけるは、始めてなるに、何卒花を出して下されと頼みける。目をかけし人々二十三十云ひ合ひて、蒸籠四十、また一開の臺に唐辛を積み、上に三尺程なる造り物の章魚を載せ、甚五兵衛殿へと張紙して、芝居の前へ積みけるが夥し。甚五兵衛大きに喜び、さてさて恐らくは伊藤庄太夫と私、花が一番なり。とてももの事に見物に御出と申しければ、大勢見物に參りける。されども始めての役者なれば、人らしき藝はならず、切狂言に馬になりて、それも頭は働くなれば、尻の方になり、彼の馬出るより、此馬が甚五兵衛といふ程に、芝居一統に、イヨ馬さまくと、暫く鳴りも靜まらず賞めけり。甚五兵衛すごくともならじと思ひ、ひんくと言ひながら舞臺うちを刎ね廻つた。

然るに此の一笑話は、はしなくも武左衛門後年の奇禍を購ふ事になつた。元祿六年四月下旬より江戸市中に惡疫流行し、人呼んでソロコロりと云つたが、忽ちの間に死するもの一萬餘人の多きに及んだ。流言蜚語は盛んに云ひ觸らされ、南天の實と梅干とを煎じ服すれば、即效ありと云ふものあり、しかも馬が人語を發して教へ知らせたとまで附け加へられた。其の處方書さへ一小冊子となり公にせられ、江戸市中は固より地方にまで喧傳せられ、南天の實と梅干との價幾十

層倍に騰貴するに至つた。當局者は之を見て、同年六月十八日附にて、時の町奉行能勢出雲守より、

近頃市中にて馬の物言ひ候由申觸し候。斯様の儀申出し不届にて何者申し出し候哉、一町切に順々語次ぐ者、猶また初めて申出候者有之候はば何方の馬物いひ候や、書付に致し、早々可申出候。殊に薬の方組等まで申ふらし候由、不届に付、一町限りに人別詮策いたし可申候。若し知りながら隠し置き、後日顯はるゝに於ては、曲事たるべく聞、有體に可申出候。云々。

と、町中に沙汰した。其の結果として神田須田町八百屋惣右衛門、浪人筑紫團右衛門が捕へられ糺問して、其の犯人たるを知り、馬が物言つたと云ふ、出處は鹿野武左衛門が甚五兵衛の話より暗示を得たること、處方書は武左衛門の手に成つた事を白狀したので、武左衛門も捕縛せられ、元祿七年三月十三日、浪人團右衛門は江戸中引廻しの上、斬罪に處せられ、惣右衛門と武左衛門とは死一等を減ぜられて流罪となり、武左衛門は伊豆の大島に流され、處方書及び『鹿の巻筆』の板木は焼き捨てられた。武左衛門は配所にあること六年、元祿十二年四月赦されて江戸に歸つたが、積年の勞苦で病を發し、同年八月五十一歳を以て歿した。

武左衛門の噺本が行はれた頃の作としては、浮世繪師菱川師宣の門人であつた石川流宣の『枝珊瑚珠』五冊は元祿三年に、みやこ又平の『輕口幾世茂千』五冊は元祿十四年に、『輕口百なり瓢箪』五冊は同年に出板された。『輕口居合刀』五冊は寶永元年に、『輕口老婆さくら』五冊は同三年に、東の頓作の『かす市頓作』五冊、空言堂路嫌の『福祿壽』四冊は同五年に、『かる口利益話』五冊は同七年に出板された。同年間に出板された『輕口都男』三冊は露の五郎兵衛と、又八、鹿野武左衛門の話を集めたもので、之れに評を加へ、鹿と露とは懸合咄にして、其の勝敗を判定してゐる。

猿

むさし野の鹿

東國の城下米澤木工太夫といへる侍、世に並びなき不男なれども、由緒正しく、武藝萬事に付て發明なれば、祿百石を得て新參に有りつきけり。其年殿の御用に立つ事三度、翌年加増被下、三百石になりぬ。然るに此人の貌其の儘猿に生き寫し、おもてむきには云はねども、陰口の異名を猿の木工太夫と云へり。その事いとけなき子ども聞きふれ、木工太夫通られるを見て、あれ猿が通ると、あだ口叩くが、木工太夫耳に入りぬ。然れども十をかしらに七つ八つの子供なれば、聽かぬ振して邸に歸り、其の日召連れ給ふ草履取を近く呼び、けふ子供の云ひし事定めて汝も聞くべし、何と某が貌猿に似たかと御尋ねあれば、角平畏つて云ふやう、是は近頃勿體なき事を御申しなされます、且那様の御貌が、畜生ものに似てよいものでござりまするか云ふ。そんなら似はせぬかと、念入らるゝ時、且那様の御貌は猿には似ませねども、猿めが貌且那様に似ましたといへば、

おのれそれは同じ事ぢやと、旦那大笑をせられけり。總別物事に氣をつける旦那、今角平が云ひしは、同じ事を云ふやうなれども、主を尊む忠言なり。其の子細は主を畜生に似てよいものでござるかとおがまへ、見れども似たものを似ぬと云ふは、主をたばかりにひとしきゆゑ、猿めが貌旦那様に似ましたとは、氣をつけた云ひぶんと、褒美に青ざし一貫文頂戴したは、角平が仕合せ。

小便

都の露

ある上京の藪醫者、はいでの男を抱へ、挟み箱持たせて療治に出でけるが、彼の醫者門のきはにて小便せられるに、彼のはいで、旦那の跡に、一分に二文取つた様な貌つきして、小便せらるゝ間、すつくりと立ちたばつて待つてゐる。旦那小便しまうて云はるゝやう、今から人が小便するなら、其のしまふ間挟み箱下に置いて、躊躇うて居るものぢやと教へければ、心得ましたと、合點して歸りけり。其の日十町ばかりある所へ彼の男を使にやられるに、八つ時分に七つ過ぎても歸らず、やう／＼黄昏になりて歸りければ旦那大きに腹を立て、さん／＼今まで何をしてゐくさつた。言語道斷憎い奴と叱りければ、旦那殿は様子も聞かいで、むしやうに叱らしやる事ぢや。今日ほど小便仕の多い日はござるまい。やう／＼立つて一足か二足歩めば小便仕、又立てば小便仕、如何にしても歩く間がござらいで、今になりましたと云へば、此の返答には旦那殿も困られた。鹿のはなし、沙石集、聖學法師足の長短なる物語によつて作られたると見えたり。しかのみならず、一作働

いて興あれば長點、露のはなしをかきしき所はあれども、品こそかはれ、此のていのはなし類あつて耳馴れたれば平點にて、露のかた一點の負け。

當時の小咄の無邪氣さ加減はこれにても分る。其の後名人も出でず、小咄は振はなかつたが、明和安永の頃になると、江戸人の機智に富んだ頼才は、輕妙なる小咄本を續出する事となつた。安永元年板の山風作『話鹿子餅』一冊(後篇は『譚囊』と題し、一冊物にて安永六年板)、同年板の小松屋百龜作『聞上手』初編一冊(二篇一冊、同二年板、同三編一冊、同三年板)は其の流行の先驅であつた。『珍樂牽頭』一冊(稻穂作、安永元年板、同後編『坐笑産』二冊、同三編『近目貫』一冊いづれも安永二年板)、『話仕形噺口拍子』一冊(武子作、同後編『今歳花時』一冊、いづれも安永二年板)、『話飛談語』一冊(宇津山人、菖蒲房作、同後編『さしまくら』一冊、同三編『都鄙談語』一冊、いづれも安永二年板)、『春遊機嫌話』二冊(戀川春町作、安永四年板)、『鳥の町』一冊(安永五年板)、『高笑』一冊(多甫先生作、同年板)、『春宵一刻』一冊(千金子作、安永七年板)を初めとして、幾多の小咄本は刊行せられ、大田南畝も、『鯛の味噌津』一冊(安永八年板)、『萬の寶』一冊(安永九年板)、『落噺福笑』一冊(天明二年板)、『鶯笛』一冊(天明年間板)などを著はし、喜三二も『柳巷訛言』一冊(天明六年板)を作つてゐる。

天明四年四月二十五日、立川焉馬は、柳橋の河内屋にて寶合會を催して落語を披露し、これより落語は盛んとなつたので、落語中興の祖と稱せられた。焉馬は本姓中村氏、名は利貞、俗稱を和泉屋和助と云ひ、本所相生町五丁目に住し、大工の棟梁であつたが、傍ら足袋木綿類を賣つてゐた。狂歌の判者として、鑿鉞言墨曲尺のみのてうなごんすまかと稱し、烏亭焉馬、談州樓、桃栗山人、柿發齋の號があつた。文政五年六月二日、八十歳を以て歿し、本所表町の最勝寺に葬り、法諡を三樂院壽德焉馬居士と云つた。「思ひきやかたみの花を今さらに尋ねて杖を敷島の道」とは其の辭世であつた。

寶合の遊びは、安永二年三月、島田左内(狂名酒上熟寢)が始めたもので、其の後、諸方にて催された。此の河内座の會合では、萬象亭竹杖爲輕が自作の寶合の記三卷を披露し、焉馬は自作のお江戸太平樂の巻物を讀み、あとにて落語二三を口演した。

斯くて落語の氣運は頓に開け、天明六年四月十一日、向島の武藏屋權三郎方にて落語の會は開かれ、同八年正月二十五日、焉馬は第二回の落語會を向兩國尾上町の京屋に催し、翌寛政元年二月一日には柳橋大のし樓にて第三回を開き、同二年三年には、引續きて尾上町の京屋にて催し、翌四年正月二十一日開催して、爾後毎年之れを以て例會とした。然るに同九年十月、幕府は突如として之れを禁じた。文化十一年焉馬が七十二の賀筵を開かうとしたが、幕府は之れに干渉した

ので、會場を柏屋より本所五ツ目の羅漢寺に變更した。文化十二年には幕府再び落語の禁止を企てたが、翌文化十三年には、「近頃諸方に落噺相催し候者多く有之候、右はたはけ笑ひ、俗におどけたる噺は不_レ宜候に付、可_レ成昔物語忠孝の道を述べ候様、其方共より申諭し可_レ申由、御内達に付此段御達し申候。」と、やゝ寛大なる沙汰があつたので、文政三年正月二十八日、焉馬は龜井戸の藤屋にて一世一代の落語會を催した。

焉馬以後は二代目焉馬、三代目焉馬、立川談笑、二代目談笑、談語樓銀馬、二代目銀馬、立川金馬、立川白馬、二代目白馬、柴檀樓古木、石井宗叔、二代目宗叔、櫻川慈悲成があつたが、其の尤なるものは三笑亭可樂で、其の門人には幾多の達人があつた。

初代焉馬の著に『落語六義』がある。落語を風賦比興雅頌に分ちて、次の如く説いてゐる。

風は、そへらたなり、かぜは其の色見えず、そのしな物によせ合はせて、あらはるゝなり。八雲御抄にいふ十體のうち俳諧に類す、あらはにきこえず、外の物にすがりて狂じたるなり。はなしにとつては、ゆきすぎばなし。

「かみさん、大根を一本ください。」と、「大根はござりませぬ。」と、切口上でいふ。亭主奥より出で、「コレおすぎ、こなたは今まで御屋敷につとめたから、あきなひのしやうを知らぬ尤もぢや。賣切つたものがあるなら、それ

はござりませぬが、これではお間に合ひますまいかといへば、それについて外の物も賣ることがある。あいさつがかんじんぢや。「アイ随分心得ました。」といふ所へ、「かみさん、長芋を下さい。」「ハイ長芋は切れましたが、つくね芋では、どうぞござります。」「長芋がなくなれば、つくね芋で間に合はせませう。」と買つて行く。又門口へ「モシわさびを下さい。」と云うてくる。「ハイわさびは切れましたが、生姜ではどうぞござります。」「ム、生姜ではちとかゆいが、せう事が無い、間に合ひにしておけ。」と是も買うて行く。亭主、「それ見やれ、人に無理はない。物の云ひやうで買つて行くわさ。いつまでもさう氣を利かせたがいい。」といふ所へ、「モシかみさんたゝみいわしをくんさい。」「ハイたゝみ鯛は切れましたが、アノふりではどうぞござります。」（橋々亭萬羅作）（『たぬき』以下畧す。）

賦は、心を一べんにとゞめざる義なり。かるがゆゑに、かぞへうたと云ふ心を、くばりはかるなり。十體にいはゆる空戯、ひたすらにたはむれて、實少きなり。是れ萬八ばなし。

「今はむかし、夕立に龍がまいて、ついお屋敷のお物見の前におつこち、そのうち雲ははれる、龍もあがる事はならず、たふれて居るゆゑ、大勢の人ばかり。あしがる棒突き、左右をかため、殿様にもお物見へ御入り、奥女中のけんぶつ。龍もをり／＼顔をあげて見ても雲はなし、こまり切つて居る。御物見では、ホンニまあこはいものだと思へば、おちて見ればそのやうにもないものでござりますと、みな／＼煙草をのみながら御見

物、その煙草のけむが格子の外へ出ると、龍くびをもちあげて嬉しや雲がと立ち上らうとして、ゴホン／＼。

（富存作）（『にはとり』外畧す。）

比は、なずらへ歌なり。たくらべとも、物の物に似たるなり。十體にいはゆる謎字、なぞ／＼のやうにいへるなり。是れ秀句ぢぐち落のはなし。

「ム、貴様は缺落がしたいといふが、今の話では正直すぎてわるい。まづ缺落をしようと思はば、且那の留守か、人の居ない時、なんでも手あたり次第に取つて、内を出るのを缺落といふ。」「ハテネ、それでは盗人になります。何も取らずに出たいものでござります。」「ハテサテ、それでは缺落でない。出奔だ。」といはれてびつくりして、「エ、すつぽんなら首を切られます。」（千別作）（『水瓜』外畧す。）

興は、たとへ歌なり。そへうたはかくれ、たとへ歌は顯はるゝなり。十體にいはゆる鄙詞、いやしき詞をきらはでいへるなり。是れ下がりのはなし。

「鰻藏が一生一代しばらくを見ようと、あけ六つより切落へはひり、一番目の五立めまで小便にも立たず、もう二番目の口上のはじまらぬうち、ちよつと立つて二人づれ、雪隠に行きて見れば、ふさがつて居るゆゑ、おぬしはとなり裏のへでも行きやれとはひる。さきよりこちらの雪隠に居る男鰻藏がひいきにて、われを忘れてひとりごとに、「ア、親玉はきついものだ。」といふと、鄰の雪隠できいて、嬉しさのまゝ、「モシ／＼おまへは

おや玉びいきでござりますか。「アイひいきともく。たいていなひいきではござりませぬ。」といふ。こちらも、「アイ私も大のひいきさ。をしいものが引込みます。どうぞもつと出して置きたいもの、ム、あのやうな役者はありませんぬ。」と、あいさつするうち、となり裏から連が来て、「どうだまだか。もう知らせを打つ。早く出やれ。」といへば、「モシお連さまか。」「アイ連でござります。」「あなたも親玉びいきかへ。」「アイ、あの男も大ひいきでござります。」「ハテサテお待遠であらう。お入れ申して、お茶でもお上げなさい。」(千里叢風作)

雅は、物の成就して調ひたる體なり。たゞことうたなり。言雅意雅あり。意雅は治定なき體なり。言雅はことばに現はして一句を作るなり。十體にいはゆる俳諧詞字からことばの歌なり。是れりくつおちのはなし。こんどの奉公人は機轉の利いたやつだ、おれが年寄ゆゑ、飯もやはらかに焚き、何も彼も如才がない。料理もするであらう。「コレ八助、われは庖丁が利いて居るか。」「アイさやうでござります。」「そんなら猶よい。イヤモウ晝であらう。茶漬を喰はう。何もないから香のものをうすく切つて、持つて來い。」といへば、「かしこまりました。」と膳を持つて來る。「サテモうすく切つたわ、これで膾をうつにも手間はいるまい。」と、箸で一ときれはさむと、十枚ほど續いてあるから、これはけしからぬ、これ程の手際で、切れはなれぬはどういふ事ぢやと、「コレ八助、おぬしはこの料理屋に居た。」「イエ料理屋には居りませぬ。」「それで何屋に居た。」「艾屋に居りました。」(甲岳作) (じんきよ以下畧す。)

頌は、いはひ歌なり、世をほめ神に告ぐる心なり。十體にいはゆる狂言、ひとへにをかしきやうにのぶる。

たとへば火を水といひなし、またこゝろいきの通ずる所あり。是れ人情のはなし。

吉原の晝見世においらんが、「コレ喜助どん、茶碗屋どんが來たなら、茶漬茶碗を買つて下せよ。」「アイ買つて上げませう。」といふうち、茶碗屋が來る。「コレ此の茶碗はいくらだ。」「二百五十でござります。」「とはうもねえ百五十にさつせい。」「とんだ事をいひなさる。どうして。」「ソンなら六十やらう。」「ハテその様にちつとづゝつけあげずとも、もつとお買ひなさい。」といふと、女郎が聞いて小聲で、「コレ喜助どん、もつと高くてもいいわな。」といふ。若いもの、目ませでうなづきながら、「そんなら七十二文やらう。」「ハテさて、おめへも吉原に居るほどもない。けちなつけやうをなさる。」といへば、若いもの腹を立ち、「このあきんどはをかした事をいふ。吉原ものはねぎらぬものか。」と、はやいひ合になるゆゑ、おいらんも氣の毒がつて二階へ行く。茶碗屋は荷をかついで出る拍子にけつまづいて、今の茶碗も外の茶碗も、みちんこはれるを見て、若いもの嬉しがリ二階へかけあがり、「もしおいらん、今あの茶碗屋めが、まければいいことを、りきみまはつてあそこで轉んで茶漬茶碗をぶちこはしました。」といへば、「ほんにかえ、買はねえでよかつたなう。」(白鯉館作)

しかつめらしく詩の六義に分ちて説いたところは可笑しい。然し洒落本や黄表紙に見えた軽い滑稽、おちのある機智は、此でも遺憾なく江戸人士の特色を發揮してゐる。

春の花むこ

こゝに梅の仙人と名づけたる古木、庭のすみの白い桃に惚れて、ひめゆりを仲人に頼み、金銭花を持参に壻入りをしける夜、折しも植木屋木鋏みを持つてはひりければ、花どもこれを恐れて、ちひさくなつてゐるゆゑ、植木屋「ハ、アこれは今宵花壻の来るさうな、これを無情に切るでもない。」と、すたゝゝ歸りければ、仲人の花顔を上げて見て、「サア此のうちどなたも、おひらきなせえ。」(『江戸自慢』)
は、上品にして情趣が深い。

うそつき彌二郎

上方より歸り来て、「京都は花の都ほどあつて、けしからず上品なところぢや。先づ大道をあるくせんざいやが烏帽子直垂で、『あしびきの山の芋〜』と。紙屑買は、『千はやふる紙屑買はう。』といふ。せきだなほしは、『知るも知らぬも逢坂のせきだなほし。』と申して歩きます。そばにゐる人「ハテナ、そしてたびやなどは何と呼びますな。彌二郎これには大きに困り、頭をかきながら、「オ、それ〜、足袋屋は、『かんけこんのたび〜。』」(同上)

鳥づくしの駕屋

かや町へ鳥づくしにて、四ツ手あんぼつつかはし候といふ看板出でければ、物好きな人一人來り、「わしは雀で竹門までやつて下さい。」と云ふ。「畏りました。」と駕籠を昇き、チウ〜とかついで行く。又一人來り、「俺は鳩でやつてもらひたい。」かご「畏りました、鳩ならさんし百二十四文で参ります。」と、駕籠へ乗せてホウ〜とやる。そのあとへ三四人來り、「俺はてつばう見世へ行くから、雉子でやつてくれ。」と云ふ。今一人は「常磐町まで鷹で頼みます。」と云ふ。今一人は、「仲町の梅本まで鶯で。」と頼む。あとの一人は、「吉田町まで鷹でやつて下さい。」と云ふ。又夜更に一人來て、「わしは氣味が悪いから、駒形あたりまで時鳥でやつて下さい。」と云ふ。かご「どういたして、今時分くたびれ足で、おまへさんの様なふとつたお方を、時鳥ではやられませぬ。」客、「なぜくたびれあしでは時鳥でやられぬ。」かご「ハテてんべんからかけねえけりやあなりません。」(同上)
は、いづれも同工異曲な苦心の洒落。

吉原

「此頃は久しくお出でなんせん、お心がはりか。」と云ふ。「イヤ心がはりではないが、さん〜痔が起つて、それゆゑ來なんだ。」それはさぞお困りなさんしたのでござんしよ。殊に出痔の、いぼぢの、走り痔のといひあるさうでござんすが、お前のは何痔でござんす。「おれがのは親仁だ。」(『鳥の町』)

僭上

身上を女郎にいれ上げ、一家一門に見限られ、つひに菰をかぶり、寺町邊にねてゐる折ふし、前かた馴染の女

郎通りかゝり、此のていを見るより、「さて〜おいとほしや、わたし故に此のやうな體にならんしたか。」と、すがりつき泣き出せば、「こりやく〜聲が高い、おれは敵うちに出たのぢや。」(同上)

庵室

相模邊を通りかゝり見れば、庵室に三十ばかりの男唯一人、机にもたれ書籍を見てゐる體を見て、「あのやうにして暮したらばなア、さぞ面白い事であらう。」と、うらやましう思へば、庵室の男ずつと出で、のびをしながら、「ア、金がほしい。」(同上)

占

兩國の占ひ見世の前で、子供風を上げながら、「こゝのうらなひはあたらぬ、下手だ。」と惡たいを云ふ。占ひ者腹を立ち、「こいつらは毎日見世さきで風を上るさへあるに、にくいやつだ。うぬらはどこから來をる。」(あててみな。)(同上)

大屋

貸店の札を、子供がいたづらにはなすこと度々に及べば、大屋どの案をつけて、厚板にかし店と書いて、釘にて丈夫に打ちつけ、「是では二三年はこらへる。」

は、いづれも、輕妙。

此等の小咄は皆いづれも後年落語の本となつたものが多く。又落語の枕として遣はれたものも少なくない。小咄が一轉して長い落語となつたのは、石井宗叔を祖とする。可樂出でて、聽衆より題を乞ひ、三題咄を始めた。

花曆八笑人

瀧亭鯉丈作、溪齋英泉畫。初編より五編に至る十五冊。初編二冊、文政三年。二編二冊、同四年。三編二冊、同六年。三編追加二冊、同七年。四編二冊、同十一年。四編追加二冊、天保五年。五編上卷、一筆庵主人(溪齋英泉)作、歌川國芳畫。中、下卷、興風亭枝成作、歌川芳綱畫、嘉永二年板。

作者瀧亭鯉丈は江戸文化頽廢期が生んだ滑稽作家の代表者で、此の意味に於て本書は、太平に馴致された江戸民衆の享樂主義を遺憾なく寫してゐる。江戸民衆は四季を通じ、行樂して遊び戯る、人士であつた。本書の序にもあるが如く、「瀧の川には瀧飲の杯を傾け、不忍の池には高聲の調子をも忍ばず、飛鳥の山に今日を忘れて、日暮の里に晚鐘を恨む、何がし山に昔を偲びては、道灌山吹き破れた衣など、實のなき地口を囀るたぐひも、皆是れ酒に戯れ花に浮る、人心。」であ

つた。本書に冠して花曆と云ふのでも其の性質が知られる。作者鯉丈は一中節の三絃弾きの妙手であり、或は乗物師となり、竹細工を業とし、下谷稻荷町、淺草傳法院裏門前、駒形等に轉々して住し、藝人として世渡りし、彼自ら滑稽家たる資格を十分に有してゐたのである。「八笑人」は要するに彼及び其の友人を取りて之れを遊戯化したものである。然も滑稽本には江戸民衆の好んでした茶番狂言をあて込んだ物が多く、「滑稽素人芝居」「壽茶番狂言」「方言競茶番種本」「茶番早合點」の類を少なしとせぬが、鯉丈は之れを題材として種々の滑稽味を描き出したのである。

鯉丈には本書の他に『大山栗毛後駿足』六冊、『滑稽和合人』初二三編十冊、『滑稽牛島土産』三冊、『旅壽々女』三冊、『滑稽質屋雜談』三冊、『伊勢土産』見杯』三冊、『温泉箱根草』初二篇六冊、感和亭鬼武の『舊觀帖』續編、式亭三馬の『人間萬事虛誕計』後篇等があるが、『和合人』が最も出色の作で、本書と並び稱すべきものである。

妙竹 林話 七 偏 人

梅亭金鷲作、初編より五編に至る十五冊。初編三冊、安政四年。二編三冊、三編三冊、出版年月不詳。四編三冊、文久二年。五編三冊、文久三年板。

作者金鷲は松亭金水の門人で、本姓柳生氏、名を政知と云ひ、人情本にも筆を執つてゐた。「八笑人」を摸倣したものであるが、其の滑稽は「八笑人」に輪をかけて、すこぶる悪どくなつてゐる。これでもか／＼と無理に笑はせ興がらせようと、不自然に作爲なされてゐる。

醒 睡 笑

安樂庵策傳作、三冊、寛永整板本を初めとする。慶安三年板、萬治三年板がある。策傳が板倉侯の爲に其の口演した小咄を輯録したものと云ふ。後世の小咄落語のもとになるものが少なからずあつて、流石に材料が豊富である。

昨日は今日の物語

作者不詳、二冊、寛永活字本、寛永十三年板、正保四年板などがある。

輕口露が話

露の五郎兵衛作、五冊、元祿四年正月板。

延寶三年に「輕口曲手鞠」が出てから、同八年の「輕口大わらひ」、貞享元年の「輕口男」、元祿元

解題 醒睡笑 昨日は今日の物語 輕口露が話

解題 鹿の巻筆 新話笑眉 鹿の子餅

二四

年の『輕口咄』など輕口を冠する書が刊行された。此の書が出板されて後、元祿十一年には、『露新輕口ばなし』が出板されてゐる。

鹿の巻筆

鹿野武左衛門作、古山師重畫。五冊、貞享三年板。

新話笑眉

作者不詳、五冊、正徳二年正月板。板元は日本橋南三丁目戸藏屋とあり、此の種の江戸板として古いものである。

話稿 鹿の子餅

木室卯雲作、序に山風とあるは此の人の匿名、勝川春章畫。一冊、安永元年板。小咄本では、一紀元を畫した作である。後編に安永六年板の『譚囊』一冊がある。

壽々葉羅井

志丈作、北川豊章畫。一冊、安永八年板。

「雷きらひ」「けじく」「浪人の鑄刀」「貧乏人」など氣の利いた小咄がある。

落噺 無事志有意

立川焉馬作、紫園春潮畫。一冊、寛政十年板。天保十年再板して『開卷百笑』と改題す。

題名は『宇治拾遺』をもちつたもので、社中の人々の小咄を集めたものである。焉馬の落語集には此の他に『談州樓雅筵に咄し賣』一冊、『落青樓育咄雀』二冊、『落噺六義』一冊、『落噺通人藏』などがある。

解題 終

解題 壽々葉羅井 無事志有意

二五

花
八
笑
人

瀧
亭
鯉
丈

花 八 笑 人 序

曆を披いて八將神を見るは、吉方を知つて萬事を行はんが爲なり。八笑人を開いて花曆をしるは、阿房を見て戯作に笑はんが爲なり。夫れは恵方の年徳神、是れは阿房の八笑人、恵方果報は寝て待つとも、ねにはかへらぬ花の下臥し。まづひらきたる吸筒の、口に出るまゝ、洒落を吐きたる花見の連の一羣が、現ぬかして戯るゝさまを觀るが如くに書き綴りしは、友人瀧亭鯉丈なり。そもく根岸の里の根なしごとをとり出して、谷中の谷の底をも穿つか。瀧の川には瀧飲の杯を傾け、不忍の池には高聲の調子をも忍ばす。飛鳥の山に今日を忘れて、日暮の里に晚鐘を恨む。何がし山に昔をしのびては、道灌山吹破れた衣など、實のなき地口を嚙るたぐひも、皆是れ酒に戯れ花にうかるゝ人心にして實にも愛でたき春の夕暮、櫻は花の王子の神社、此の方に向ひて畜類のむだ口を求めず。小便無用花の山、よろづよし野も小初瀬も、此の大江戸の華にはしかず。またおほ江戸の花見の日記は、四季の名所の春にはしかずと、千社参りの豊丸正、矢立の筆を繼ぎ足して、櫻戸の端に記すことしかり。



伊都茂鹿文之滑稽

龍亭鯉大編

文政三年かのえたつ乃新編目錄加壽美凡二冊五十九帖

大せいりけのまご

大そらだんうちの方

大らんおやのあこ

どしどしひとのり

たつこのまのまらさ

さいせういぬ

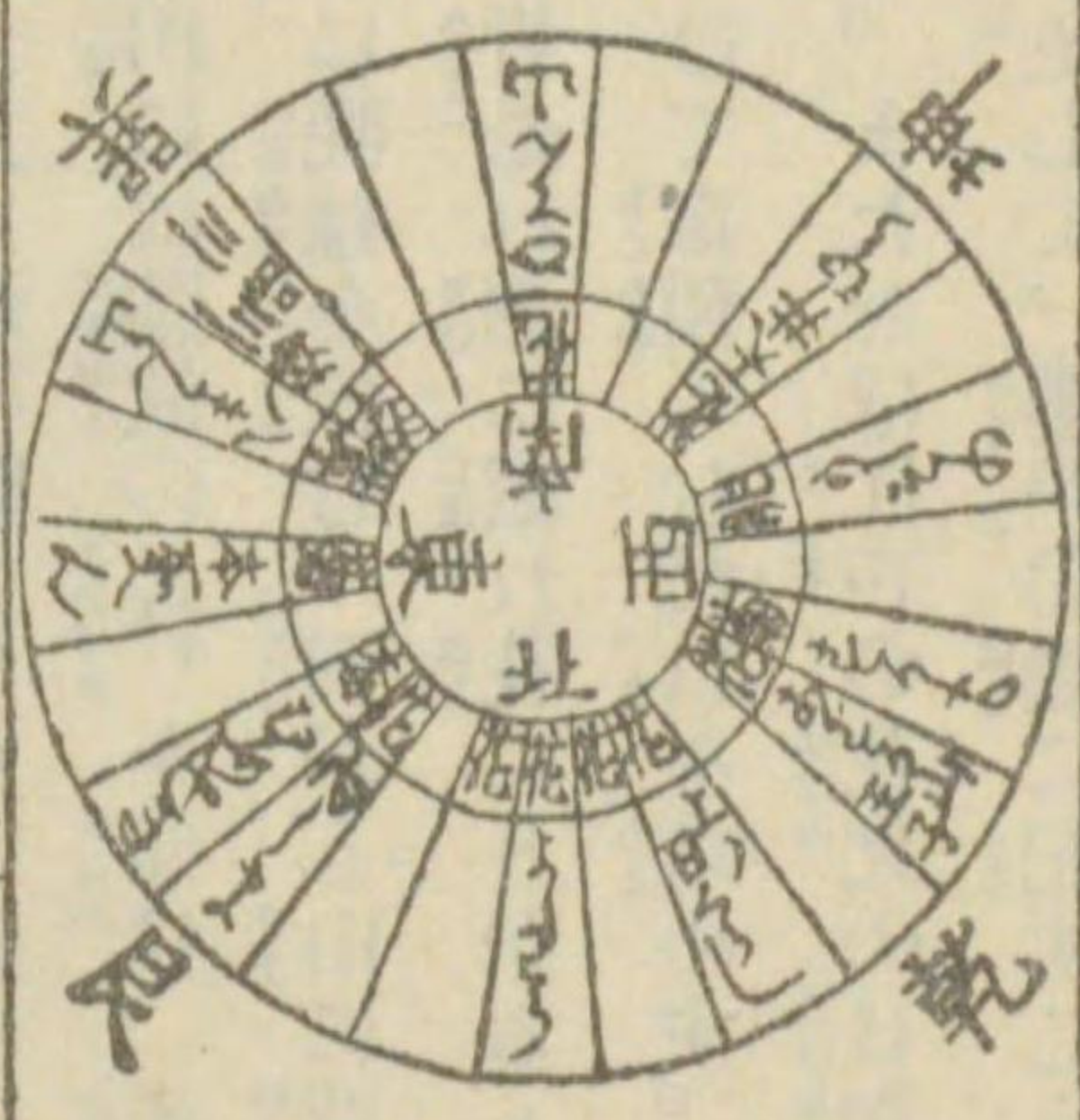
たいとらーのこ

たいへんげのまご

くしひのまご



全部



出法 春ハハハ 夏ハハハ

本立春ヨリ 六十八日ヨリ

彼岸六十三日 大佛

花七 飛鳥山

秋色 七十五日 清水

夕 三月 六日 至

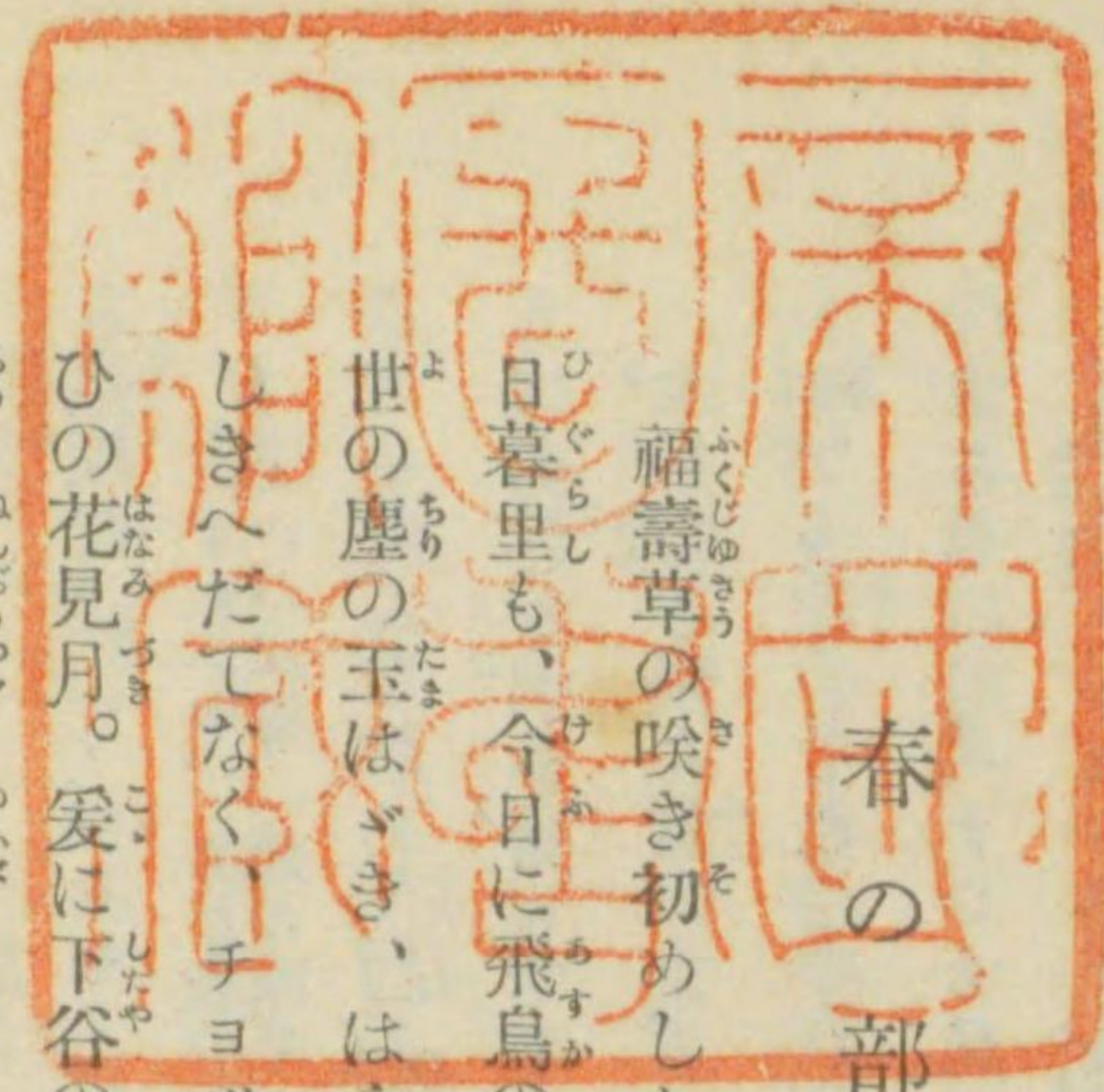
八笑人遊行日

春	庚辰年は 飛鳥山の花の雲
辛巳年は 角田川のはな筏	
壬午年は 高田の里の螢がり	
癸未年は 兩國川の涼ぶね	
甲申年は 百花園の秋七草	
乙酉年は 海晏寺の楓がり	
戊戌年は 青樓の夜の雪	
己亥年は 浅草寺の年の市	

右追々出版

花八笑人

江戸 瀧亭 鯉丈 作



春の部 壹之卷

福壽草ふくじゆさうの咲き初めしより、四季しきの花はな、盛りたがへぬ時津風ときつかぜ、静しづけき御代みよの春なれや。遅日ちじつをおくる
 日暮里ひぐらしも、今日けふに飛鳥あすかの人の山やま、茶瓶ちやびんの行列ぎやうれつ三重さんじゆうも、壹升いつしやう徳利とくりのテントてんつも、弾ひけや謠うたへの芝疊しばたふ、浮うき
 世よの塵ちりの玉たまは、はらふ片手かたてはをりづめの、勝負しやうぶあらそふ拳角力けんすまふ、幕まくらの内うち外そとの合あはせもの、疎うとき親した
 じきへだてなく、テヨットおあひのお手てもとも、はかりながら櫻さくらかな、梢さかにむすぶ短尺たんさくも、思おもひ思し
 ひの花見月はなみづき。爰こゝは下谷しもやのかたほとり、何屋某なにやのたれが總領そうりやうに、甚じん六ろくならで左次郎さじやうとて、生うまれついでの香太のんた
 郎らう、年中ねんぢゆう續つづく夕部ゆふべけに、うくる家業かげふもうるさしと、弟右之助おとみぎのすけに相續さうぞくさせ、おのれは隠居いんきよの身みとなりて
 心こゝろのまゝに不し忍にんの、池いけのほとりに寓居かりすまひ、同氣どうきもとむる香のみ會所くわいしよ。わがれたる聲こゑで、「チト御ごめん下くださり
 まし。あなたに安波太郎あはたたらうさま様はお出いでなさりませんか。」此この家いにいてつ、眼まなこ「ハイ今いまも内うちから呼よびに來きまし
 きの居候い眼まなこ七しち、

たが、まだこちらへは見えませんが、安波太郎は表を明け、アバ「コウ／＼内から誰が来た。」あるじ左次郎「ハハ、べらほうめエ、誰も来ヤアしねえ、かへり討ちをくらつたナ。」眼七傍より「口を出す。ガ、なんぢ等ごとき不才をもつて孔明を計らうとは、コレよく聞かッし、天へ向つて唾を吐けばかへつて我が身へかゝる道理だ。」アバ「イヤ、ごたいそうなことを申し上げるワ。おれがあんまり聲を拵へ過ぎたからわるかつた。」ト、いふ中、また表のかたより卒八と、卒「オイ安波公居るか／＼、ちよつと来て見さッし、美女々々。」アバ「をんななく。」ト、うろたへてかけ出すひやうしに、くつぬぎの下駄をふ「どれ／＼。」卒八づつとはひつ卒「あとを引き寄せてくだッし。」アバ「女はどこへ来た。」卒「あけて這入るが面倒だから。足下に一寸木戸番を頼んだのよ。モウいいから表をしめて此方へ来さッし。」アバ「このべらばア。」ト、ざしきへおはせ。卒「コレよせエ／＼。あんまりこすりつくな、木強がたからア。」アバ「オヤ／＼不届なことを言上するナ。」卒「ナンノ又その顔で、女さんまいをするからのこつたア。」左次郎「それ見さッし、他を呪はば穴二ツといふわ。最初おれをかつがうとして眼公にかつがれて、卒八先生にたてつけられるも、智慧のねえ理窟だハ、。。」ガ、ナニ安波公なんぞが呪ふには穴一ツで澤山だ。自分而已おちるばかりだ。」アバ「いめエましい、足をひどくぶつた、ア、痛え／＼。」卒「イヤ、かつぐといへば昨日日暮里へ行きやした、ところが聞きねえ。」アバ「ナゼかつぐといへばひぐらしへ行くのだらう。」卒「ナンノ

又のたり出るヨ。燕雀なんぞ大鵬の心をしらん。此の一回何等のことを言ひ出づるや、つぎの段に分説くるをまつて知れ。」アバ「こやつ何事をかいふ、ト首をかたづけ手をこまぬき、やをら左右の耳をすまして、聞いた所が河童の屁だらう。」卒「フン引かたことをならべ立てるわ。コウそして、利多ふうにしやべるが、河童の屁といふはどういふわけか知りはしめえ。あんまり文盲で不便だから、友達のなさげに教へてつかはさう。マ、河童といふやつは河にすむものだが、水の中で屁をひつたら、ぶくぶくと音のするはずだぜ。ソレ柳樽に、

すかしても音のするのは河童の屁

といふ句があるわ。それを亦、たわいのない譬へにいふ譯がわかるめえ。これ則ちいひあやまつて居るからのことだ。子曰はく、こつばの火と論語にもあるわ。夫れでたわいのない筋がわかるだらう。ア、歎かほしいことだ、チツト學問をするがいい。一六の日には在宿いたすから、きけんを聞きながら来さッし。」アバ「ム、二七、三八、四九、五十、日濟貸で押し分けられめエ。ア、なる程屁の講釋は感心だ。おめへは博識ではねえ物ひりだらう。」左次郎「コウ／＼そりやアいいが、卒公日ぐらしはどうしたのだ。」アバ「ナニ屁でまぎらしたから屁ぐらしだらう。」左「どうも此奴が此の通りこしををるから嘸ができねえ。」卒「安波公チツトだまらッせえ。ア、やかましい口だ。」卒「イヤサ聞きねえ。奇

妙な趣向で花見に來たが、皆一ぱいかつがれたのよ。さすがのおれせへ、まじめだと思つた。」アバ「ナニさすがのおれ、ヘン小刀のまがり聞いて呆れらア。」左「東西々々、フウどういふ趣向だ。」卒「聞きねえ、うまくすぢを書きやアがつた。」左「はてな。」卒「聞きねえ、すつぱりとかつがれたぜ。寢にくくしやアがつた、聞きねえ。」左「フウはてな。」卒「ヤこてへられねえ。」アバ「エ、こじれてエどうしたのだ。手前ばかりのみこんで、何だかわけがわからねえ。」卒「いんにやヨ聞きねえ。」アバ「聞いて居るヨ。ひとつの咄に聞きねえ」が百五十出らア、はやく申しあけろ。」卒「そんならかいつまんで噺さう。まづ本舞臺三間の聞いちめに櫻の立木、上の方に葭簀の茶見勢。」コレサつまんで咄すに其様なことはいらねえわな。」卒「イヤサ聞きねえ。其の出茶屋がすぢだわな。その娘が十七ばかり 岩井半四郎、瀬川菊之丞、けいは大吉桑三のおちやつびいに、生姜二片入煎方つねのごとしといふ美女だらう。聞きねえ、そのまた腰かけに居た野郎が二十才ばかりで、いづれ金満の息子株、色のしろいいやみなしの梅幸、團十郎、持物衣裳つきは御推量ス。」ガン「モシ是れには生姜ははひりませんか。」左「マタ／＼ひかへろ／＼。」卒「ソコでその客が暫く休んで、茶代を置いて表へ出合ひがしら、でんほふらしいやつが二人、門口で突き當つたといふがいひが、りで喧嘩よ。それから聞きねえ、其の色男をノ聞きねえ、むごくぶちのめすもんだから、ききねえ。」アバ「イヤサ聞いてる

ヨ。」卒「あすこの事だから人は黒山のやうに集まつて見て居るけれど、誰一人取り支ふる者もねえ。俺もあんまりかはいさうだから、中へはひつてやう／＼両方へ引き分けてやつたら、ぶつた奴等ほとりの茶見世へはひる、色男は其の娘の所へ這入る。其處で娘も氣の毒がつて、いろ／＼介抱して、お髪をマアかりにわたくしでも結うて上げませうと、鏡臺を出して結ひにかゝると、聞きねえ、鄰近に居るぶつた奴等がいつの間にか調子をあはせてチャン。歌 櫛笥鏡臺取り揃へ、ト長五郎髪すきめりやすよ。そこで合方になると、聞きねえ、その野郎が梅幸の身振聲色で、娘をあひてにいろ／＼思入ありよ。日暮里中の人をすつぱりひつかつたのだが、何とおもしろくかついだぢやアねえか。」アバ「かし重かつたらう。山ぐるみかついぢやア。」卒「いんにやヨ、うまくかいたぢやアねえか。」左「ム、こりやアいい、それとも古いか知らねえがおもしろえ／＼。」ガン「コウ／＼なんと此の連中で出かけようぢやアねえか。御前達がぶちのめし人で、おれが髪すきよ。おらア亦成田屋で遣るべエ。」ト、團こわ色に「不思議なえんでいかいおせわに。」左「エ、よしてくれエ。さう思つたばかりで胸がわるくなつた。」卒「其のつらで髪梳どころか噛み付きさうだア。馬子唄のうしろで漉返しのかみすきがいい。」ガン「ヘンそねめ／＼、ナウ安波公催さうぢやアねえか。」アバ「その漉返しの方なら御多分には洩れますめエ。」ガン「チヨツいめえましい奴等だ、とかくおれがいふ事は取り用るねえ。」左「そんならかう

しよう、他の仕た通りもされめえから、身分々に茶番の心もちで、一趣向づ、案けて、自分の書いた正本なら、其の狂言のたてものにするがいい。」アバム、それで役不足がなくなつていい。それにしても此の顔ばかりではさびしい、野呂松や出目助はどうしたらう。」卒「さうよ、今日は大分遅い出仕だの。」「なアにみんな昨夜から二階に行きだふれだ、ホンニ眼公モウおこさつし午刻過だ。」ガニ「さうだつて。一ばんおびやかしてくれべエ。」ト、しゆろばうきの柄にて二階をとん／＼とつきながら、「オイみんなが蘇生らねえか、最う日が暮れるわ。」三すけが聲色で、「ハイ／＼どうもハア病氣あんべエで、疝氣のせゑかどたまがやめて起きられましねえ。」左「其の筈だア昨夜はひどく食らつたぜ。オイ他の倒れ者はどうだ。」二階はれも八人藝の小僧の聲色、「のろ「ハイ私はエ、引疝氣のやうな色氣のない病はおこりませんが、エ、引血の道のせゑかエ、どうもエ、眼が覺めませんで困ります。」卒「コウ／＼馬鹿アいはずと早くおきさつし、急に相談が出来た。」ガニ「ナニそんな甘口でいくのぢやアねえ、皆々歩行びねえひつばがう。」ト、眼七、卒八、安波太郎三人二階へかけ上り夜。左「時に斯う言ふ相談だ、此の連中で花見茶番と號して。」具を残り引きまくれば、漸く起きて下へ来る。左「出目助は半分聞かず、出め「オツとみなまで宣ふな、最前より二階において、やうすは残らず承り。」今一人どん七、さん「とくより趣向致してござる。」のろ「いで鎌倉へといふときに、われらが智計をほどござる。」さん「せかいの女はみなごろし。」表のかたより圖ツア六「香友公御入りイ引、ヒイ／＼テン／＼ツク／＼

ツク／＼ツ、テン／＼。」左「ハ、ハ、ハ、奇妙々々、これで羣勢の著到はすんだ。コウ寐ほけ手合は、早く顔でも洗つて飯でも食はつし。そこで圖武六かういふ案じだ。」「オツト承知々々。先刻此所へ來か、つてすつと這入るも智慧がねえから、何ぞ一番かつがうと思つて、密と障子の陰に身をひそめ、工夫の始終残らず聞き、直に案じは定けておいた。」アバ「イヤハヤどいつも早い奴等だ。サア／＼此方は大變だ、さつぱり心當りはねえぜ。」左「何サさううろたへる事もねえ。今日ツから始めて一日一幕づ、だから、その中出來た者から先へやらかすがいい。マア今日の初日はだれがする。」さん「ものごとすべて手はじめが大事だ、庸意なものにはさせられめえ、まづさしづめ俺だらう。」のろ「ナンノまたさし出るヨ。先日の茶番の手なみで、どうして初日が勤まるものか、マア／＼初日はおれだおれだ。」左「熊谷平山待ちたまへ、争ふうちに日がたける、中をとつて亭主役におれが始めよう。」出め「それがいいそれがいい。」さん「シテ其の趣向は何と／＼。」左「マツ筋は敵討だが、カウト役割は色の黒いでく／＼と肥満つた、眼の大きイ髭むしやくしやの悪々しいといふ面がほしい、ム、安波公やつてくだつし立敵だぜ。」アバ「立敵はいいが、顔の容色があつらへ通りぢやアうれしくもねえ。」ガニ「オツト狂言方の割りつくだ、面不足をいふめエ。」左「ソコデ著つけは黒羽二重の紋付に、萌葱博多の帶、朱鞘の大小、中ぬき草履、深編笠といふこしらへだ。」アバム、いい／＼。」左「おれと出目助が順禮の

すがたで、そこ爰と花を見ながらたばこを呑んで居る所へ、安波公がのさり／＼と出かけて来る。これも同じく彼方此方と見あるき、なりたけ人の目にかゝるやうにして、程能き所で順禮にたばこの火をかりようと、すひつけにかゝる笠の中を覗いて、ヤアめづらしや鳥目百味、年來尋ぬる親の敵、ト是れから浮木の龜や優曇華の花、なんでも彦兵衛で、彦兵衛とは御ぞんじの。おもひれならべ立てよう。安波公も出たためせりふで、ト不便ながらも反り討だと、編笠をとつて捨て、金貝張をスラリトぬく。俺と出目公は杖に仕込んだやつをぬいて、先達茶ばんに仕組んだ立合になりはどうかだ。」 卒「コリヤアがうせえだ。飛鳥山は此友達ばかりで、花見をする様だらう、いいわえ／＼。」 左「そこで亦眼のしよほ／＼した鼻のひらつたい、齒の黄いろい、水ッばなが鼻のまんなかに絶えずぶらついでゐるといふ面がほしいな。オイ／＼圖武六、ちよつとおめにかゝらう。」 ツ「ハイ／＼大體は私が似よるかネ。」 卒「似寄りどころか南瓜を二ツに割らずに其の儘だ。」 ツ「チョツいめえましい、爲方がねえ此の節だ、この首で間に合ひさうなら、お大事のものが心置きなく遣ひねえ。」 左「其様に力を落すことはねえ。役廻りは助高屋だぜ、六部の出立でチャアン／＼と鉦鉦をならして來か、り、切り結ぶ中へ割つて入り、しばらく錫杖であしらひながら、某一言いふことあり、しばらく／＼と雙方引き分けて笈を下し、中から酒肴三味線を出しておれに渡すと、ヂヤ／＼ヂヤン／＼と弾き出す

から、出目公と圖武公が、エ、引 山できつころがした松の木根ツ子の様でもと唄ふ。安波公が例の踊、跡の者も見物に交つて居て、直にそこへ踊り込んで大酒盛となるといふやつだ。」 野旦「ヤきてれつきてれつ妙計々々、サア／＼些とも早く押しださう。」 アバ「そんならマア衣裳や道具を早く工面しよう。」 左「眼公てえぎながら例の所へ行つて借りて來て下ッし。是れは茶番一式の損料屋なり。入用は今いふ通りだ、順禮の杖の大小も金貝がいいぜ。しかし笈摺の背中に、千秋萬歳や大入叶では中だノ。正うつしで行きてえもんだ。」 卒「それにはいいさんだんが有りやす。どうせ六部の笈も、ほんものでなければ諸色が這入るめえから、山崎町へ行つて、六部の形とおひするは借りてこよう。」 是れも又かの地に出來合左「そんならさうしてくんねえ、ア、併しじ、むだらうナ。」 卒「じ、むも坂東も一所に書いて有るぜ。」 左「エ、わるくしやれずと、千手觀音の居さうもねえのを、はやく借りて來さつし。」 ト、卒八、眼七をせ左「サアそれできまつたが、なんほ出たらめでも、ちつとはきつかけを付けて置かう。」 ト、是れより稽左「サア出目公と俺は、ほどのいい所に居る。そこでアバ公も同じく、是れサマア立たッせえナ。さうさう、そこいらがいい。そこでキツカケは圖武が山の下で鉦を叩く音を相圖に、たば公がアバ公をついて、順禮殿火を一ツト、そばへ來る。」 アバ「ム、よし／＼。」 左「エ、よし／＼ぢやアねえ、爰へ來さつしナいけずるい。」 さん「たば公がアバこを呑んぢやア、たばるときせこ入れがいの。」 左「エ

エしやれるなえじやまになるわ、サアたば公たたねえか。」のろハ、、、やつぱりたばこうだア。一
 アバ「オイく。コリヤく。順禮、びろうながら火をひとつおかしやれ。」めで「ナニそれにびろうがい
 るものか。」左「イイサく。そこで、トすひ付ける笠の内をのぞいて、ヤア珍らしや鳥目百味、汝を尋
 ぬる其の爲に、いく歳月の艱難苦勞、俱不戴天の父のあだ、サアじんじやうに勝負々々。サア出目公
 も何とかいはつし。」出「オイエ、引、辨財天の御由來、くはしく尋ぬる母の敵。」左「コレサどうも、
 さうしやれて許り居てはいけねえわ、身にしみさつしナ。そしておれが父の仇といふのに、母の敵と
 いふ事もねえ。」出「おめへが父といふから、同じいひ草も智慧がねえから、そけてやる氣だ。」左「イ
 ヤイヤそんな智慧は出さねえがいい。そしてむづかしい事をいはずと、あたりめへ、うききの龜うど
 んけの花、爰で逢うたは天のあたへとかなんとか、紋切形でいいワサ。」出「ム、うどんけの花の山
 とやつてはどうだらう。」左「何々しやれたがつちやア悪いく。」で「オイく。そんなら、うどんけの
 花うききの龜、爰で逢うのが百年目。」のろ「どうで此方は夜ばたらき、二世より先へ命がけ。」左「戀
 のぬすみとたれしら波、ばんにやいのと合ひ言葉。」左「イヤモウどうもならねえぞ。此の又べらほう
 が、何だいやみナさまをしやアがるわ、マアちつと邪魔をせずに下ツし。それでなくつてせへしやれ
 たがツていけねえ、マアく。てえけえにして置かう。サアアバ公、ちつとやつて見さつし。」アバ「へ

ンおれかくヨシ、かうなるからは名乗りて聞かさんよつく聞け、われこそは桓武天皇無體の強陰。」
 左「コレサく。さう時代ではわりい。そして狂言の氣をはなれていかねえと、まじめらしくねえ。ム
 ムかうするがいい、あらたまると角が立つから、やつぱり不斷喧嘩をする心もちでやつて見さつし、
 おれはマア見物になるから二人でやんな。」出「ム、それだと大きに仕いい、そんならアバ公やるぜ。」
 アバ「オイよし、順禮殿火を一ツかして下せえ。」出「ハイく。ト、笠の内をのぞいたは、ト思入あ
 ツて、オヤ手前は鳥目百味だナ、七年以前におれが親を打つて驅落をして、行方が知れなんだが、い
 い所で逢つた。モウこちとらが目にか、ツては、貧乏のすりもさせねえぞ、覺悟をして勝負をしろ。」
 アバ「ナンノ此の野郎めえ、うぬらが二人や三人來たとつて屁とも思ふものか。そして己等が親父が、
 するい事許りしやアがつたから、殺したのだわえ、それがわりイか。」出「ム、わりイはエコレエ、
 親をころされてだまつてるちやア外聞わりいわえ。なんでもうぬを殺さねえちやア、面がよごれらア
 馬鹿面あづまつ子。」左「コウく。どういへばかういふと、それでも又あんまりだ。扱々じれつてえ事
 だぞ。だうりで茶番のたんびにいたく答だア。いいく、てえけえにして置かつし。俺がいい様に
 ごたつて仕舞ふから、あんまり口数のすぎねえやうにしさつし。そこで又、タテだが、それもバタ
 バタく。ヤどつこいと、見えになつてはよくねえぜ。筋はせんだの通りで、間のギツクリく。なしだ

よ。」アバ出目「オイよし〜。」左「ヅブ公、その采配と、しんばり棒をもつて来てくんナ。アバ公は兩刀だぜ。」アバ「承知々々、おれには采配をくだし。オツトきた〜、サアやるべい。」左「出目公は左へ廻んナ。」出「へん御開帳のやうだ。」左「しやれるナ〜。サア尋常に勝負々々。」アバ「心得たりと。」アバ「たりとはいらねえ、只心得たサ。ソレぬき合はせた、さうきた、さう、さう、さうくる、味い〜。それ裾をはらつた、一ツとんで後へ、ソレとん〜〜。」ト、跡さきりするはずみに、箱懸けてありし土瓶をこはし、ジュウ〜〜、一面に灰をふき立てる。アバ太郎は五徳にて龜アバ「アタの尾のほねをつよくいたため、急に立ち上る事も出来ず、火鉢へ腰を懸けたるまゝ、灰まぶれまつしるになり。」タ、タ、タ、タ、タ、此の時卒八は笈を背負ひかへりし、卒「オヤ〜〜こりやアどうしたのだ大へん〜、行き暮したる旅の修行者、此の大雪になんぎし〜。」左「エ、しやれ所ではねえ、マア早く来てくだし。」みな〜「アバ公尻が焼けるわ、早くわきへのかねえか。」ト、引き立てられ顔をしかめながら、縁端へ出る。のろ「そこへ坐らッし。オイその采配を爰へくんナ。サア目をしつかりと瞑つて居たり。」さん「ヤレ〜、目も鼻も知れなくなつた。サアいい〜こつちへ來さつし。」左「マア著物を著替へさつし。尻はびしよぬれだ。」さん「ナニサ此の著物を背負はせて、町内を一邊まはらせるがいい。」卒「寐小便も此の齡までやまねえから、モウ直るめえよ。」アバ「ア、引いてえぞ〜、まことに目がくらんだ。なんと左次さん、もうちつといたくねえ趣向は有るめえか。」左「ハ、ハ、ハ、ハ、何サ飛鳥山には箱火鉢がねえからいい。」ト、みな

大笑ひになり、此の時眼七も、眼「サア〜道具はそろつた。コウ今道で八ツを聞いたぜ、仕組がよくば出諸色取りそろへてかへり。」左「サウ〜稽古もあらましますぢが通つたかけねえか。人の出さかりでなくつてはをかしくなえぜ。」左「サウ〜黒羽二重朱鞘の大らしいとして、出掛ける仕度になせう。ドレ眼公衣裳を見せナ、ム、いい奇妙々々。黒羽二重朱鞘の大編笠ト、サアアバ公渡すぜ。こつちは杖許りだ。サア〜著替へた〜。」是れより役がムリのもの思ひ思ひのこしらへ出來て、左「先づ是れで仕度はいが、チト腹がわりイナ。」眼「さうさ今日は珍らしくマダ始めねえから、物わすれをしたやうだ。何ぞ着をこしらへようか。」左「何々そんなことをしては居られねえ。イヤしかし辨當があるナ、眼公そこらへ行つて見つくるッて來てくれねえか、兩もちひに鮮なんぞもいぜ。」アバ「ア、まづい物屋のにしめもおそれるス。そして鮮もこひねがはくは長門といきてえナ。」眼「長門鮮とはどこだ。」アバ「馬喰町ヨ。此の男もアノすしやを知らねえか。」眼「なんほおれが物知りだつて、どうして爰いらまで知れるものか。コレすしの評判十八丁といふワサ。」左「わるくごたつくぜ、何でもいから早くはたらいて來さつし。そして笈の中へみんナ詰めて、圖武州は一足跡から出かけさつし。おらア茶椀で二三杯ひつけて先へ出よう、ナア出目公。」出「ム、それがいい〜、マアおれから始めよう。モウぐびがのど〜する。」アバ「ヤレ〜いぢのきたねえ男だぞ、そんならてんでんにしよう、待ち遠だ。サア是れへついでくんナ。」左「そりやアいいが順禮歌を承知か。」出「オツト

氣づかひたまふナ。例の美音で女どもをまよはせてくれベエ。ふだらくやきし打つ波のおのれのみ。」
 アバ「ム、くだけて今朝はものをこそおもへか、ヘン紋切形だの。」左「サア、アバ公出かけねえか。」
 アバ「オイ、モウ一ツついでくんナ。」出「いやモウあきれたいぢきたなダゾ。そんなら俺もモウ一杯
 やらう。」左「左次郎はやうくたち出で、左次「サア、遅いぜ、今からさう呑んでつまるものか。是
 れからが大役だばか、しい。」目介「小言たら、手を取つて引き出され、アバ太郎は編笠ふかく打ち被り、出
 出て行く。引違へ、眼「サア、肴もりつばに出来た、ナント重づめはきれいだらう。」卒八「野呂松、ドレ、ドレ。」
 眼「オット、それからごらうじろ。」卒「ナンダナまだ見えもしねえ。喰はうといやアしめえし、がうぎ
 と用心をするぜ。」野呂「すみの所に有る黄いろな物はなんだ。」眼「ドレ。」野「是れヨ。」眼「オット
 其の手はくはねえト。」さん「その手はくはねえ此の足を喰はう。」ト「さくら煮を、エ、ぶじやれる
 ナエ。きたねえ筈から出すのだから、きれいな事てなくつてはいけねえから、折角骨を折つて詰めさせ
 たに、チョッだいなしにした。」卒「ドレ、ほんにナア、おれが直してやらう。」眼「いんやたのむめ
 え。モウ、ぶつさうだ、早く筈の中へ納めよう。サア、地蔵さま、御窮屈ながらひろい所に寝て
 おいでなさい。」ト「笈佛を引き出し、三味線酒肴諸色、眼「サア、是れで安心だ。ゾブ様かぎをわたすぜ。」
 ズブ「オイ、よし、ア、併しおれが一ばん難儀な役だナ、行きつくまでの道中がつまらねえさまだ。」

何でも酒の氣をはなれては出来ねえ、モウ二三杯やりつけようか。」眼「エ、うるさく呑みたがるぞ、
 マヤ草鞋でもはきねえ。其の内かんを直してやるから。」ゾブ「ム、そんなら爰へもつてきて下ッし。」
 ト「上り端へ出さん、ソレ筈ヨ、ちつと重いぜ。」卒「サア、かんが出来た、香まつし。」ゾブ「ハ
 イハイ、是れは御報謝でございます。どうぞもちつと大きい物で願ひ申します。」野呂「コレサ、い
 いかけんに呑んで出かけねえか。先へ行つたてあひが待遠だらう。」眼「さうよく、おいらたちも跡を
 片付けて出かけよう。」ト「追ひたてられて圖武六はことなる形も、酒氣に乗じて出でて行く。」

初編 二之卷

踏めば惜し踏まねば行かむかたもなし心づくしの山櫻かな
 と赤染右衛門は詠まれけん、花の山里多かる中に、わけて江都の飛鳥山、植ゑ人もうる人花盛り、吉
 野初瀬もおよびなき、その山ぶみも遠近より、あらしひ競ふ道草の花見連中、霞と共に引きつゞく、
 春の日あしや足元も、よろめく山のつゞらをり、酒のとがとも岩根ふみ、たどる方への出茶屋には、
 きせんをえらばぬよしす圍ひ、花より團子の下戸上戸、かの酔狂の圖武六は、六部の姿に出立ち左次
 郎が宿を出で、池の端を谷中の方へいそぎ行く。最早鄰家も程すぎしと心落ちつき、少し稽古の心に

て殊勝氣に鉦打ち鳴らし、ツズ「なまアだアぶウ、なアまアだアぶウ〜」。六十餘りの「アイ六部さん進ませう。」愛ぞ大事ととほくより腰をかぢめ、「へい〜是れははや有りがたうござります。へい〜是れははやへい〜」。ト、わるといねいに錢をいたゞき、ト「コレ六部さん、報謝返しの廻向をナゼしなさらねえ。」ト、とがめられて又びつくり、ハツと思、ツズ「今いたす所でござります。」ト口にはいへどいはんと、目をねむり口許りむぐ〜して、むしやうに鉦をチヤン、ツズ「エヘン如是畜生ほつほだいしん、往生安樂國なアまアだア〜」。ト、暫くして目を開いて見れば、ツズ「ヤレ〜怖ろしいめに逢うた。モウ〜念佛は申さねえ。」ト、つぶやきつづ、ト「オイ〜六部どん進ませう。」圖武六ぎよつとせしが、に行きすぎるを、うしろより笈、ツズ「だれだ〜、コレたふれるわえ。卒公か野ろ松かふざけるナ〜」。聞き付けぬふりにて足早をしつかり押へてうごかさず。判八「おれが見附けては一寸も先へはやらねえぞ。いやはやく〜貴様はこなたは、おのれは〜」。此の聲におどろきよく〜見れば、店受の判八といふ親父なり。今日上野へ參詣する程四五日も呑みつけ、宿へはより付かぬなど、よき折から意見したくれよと頼まれ、其の歸るさ異なレ、何がすまぬ事が有つて、お袋や女房を捨てて六部に出るのだ。それもよん所ねえ事なら、ナゼ相談づくで出ねえのだ。役にたたずながらも、此方が居ねえ日には、俺ひとり厄介を背負ひ込みだわ。」圖武六はいひわけせんと思へど、判八はかなつんぼなれば、大きにてござり、いつも仕形にて咄をする故、笈佛へ指をさしかむりをふり、是れはじやうだんだ、花見に行くといふ思入にて、鼻と目へ指さしする。判「ナン

ダ六部に出るもいやだが、フウ鼻と目が役にたたねえ。コレそれいばねえ事か、一昨年のおこねの時しつかりと療治をして、一歳も毒だてをしると、口のすくなるほどに言つても、二十日もたたぬ内にモウ大酒をくらつて悪物喰ひ、たつた一人のお袋が、泣いたり笑つたり苦勞するを、屁とも思はぬみんナ罰だわ。」ツズ「ナニサさうではねえわ。」ト、又くふうして齒をむきだして、指にてつゝきて見せ、又笈の中は酒や辨當だといふ氣どりにて、笈へ判「ム、ナンダ齒、四文。ム、橋本町へ這入つて此の笈で喰ふゆびさし呑み喰ひするまねをして見せる。判「ム、ナンダ齒、四文。ム、橋本町へ這入つて此の笈で喰ふ氣だ。いやはやこなたも生若いさまをして、ふがひねえ男ダゾ。コレ親にゆづられた家業でさへ、なまけ廻つて喰へねえものが、一文貫ひで親や女房が喰はせられるものか。」ツズ「エ、こじれつてえ、さうでもねえわ。そんならモウ仕形がねえ、此の内を明けて見せよう。」ト、眼七に受けとりし笈の鍵を尋しが、いつかふり落せしと見え一向知れず、いかゞはせんとうるたへながら、させるの吸口にて錠をこじ廻して居る。此の押し合ひの内往來の人一人二人たち聞きせしが、だん〜集まり、何かは知らず六部と親父と問答をすると言ひふらせば、近鄰の人我も〜とはせ集まり、判「コレ此の通り人立ちがして外聞がわりのい。マア〜おれと暫時の間に黒山のごとく人立ちせしかば、判「コレ此の通り人立ちがして外聞がわりのい。マア〜おれと一所に内へけへらッせえ。何も彼もうちへ行つて、わけを付けるがいい。」圖武六も尤もとは思へど、此又飛鳥山の手筈も相違する事故、ツズ「先へ行きなせえ、跡からすぐ行く。」ト、手まねをすれば、判「イヤイ何とかして引つばざさんと、ヤさうはならぬ。貴様先へたたッせえ、おれが跡からついて行く。」ト、いきまき荒く中々合點するけしきなく、心ならずも元來し道へ立ちかへる。判八はうしろより笈のすみへ手をかけながら、跡へついであゆみくる。是れより圖武六が宿へ歸れば、母女房はいふもさらなり、鄰家の人且家主まで集まり來り、異なるさまに驚き、

家内大もんちやくとなりけれど、圖武六は茶番の手管相違せんと、兎角いひくるめ此のまゝ出て行かんと、花見の趣向をあらまし言譯すれど、多勢にいひすくめられ取りおさへてうごかきねば、笈の扉を引き放し中の仕込みを見せくはしく咄し聞かせ、やうくみなく得心の色見えければ、はや春の日の長しといへど、店受の擬勢、家主の理窟、鄰家の意見、女房の愁歎、と大わらひと成るころは、茶番は寂滅入相に、飛鳥の花はいかになりけん、圖武六も御興を居えて、有り合ふ酒肴とり出して、皆それらに禮をのべ、心ならずも洒波みか、左次郎「アバ公爰からわかれはす。斯くとも知らず彼の三人は日暮あたりのうら道にて、それらに支度を直し、左次郎「アバ公爰からわかれて先へ行かッし。そして美しさうな幕張を見て置きねえ。何でも勝負の場所は、女澤山の所と究めよう。」アバ「承知々々、女の目利ならへん外の者には出来めえ。」出め「ヨシ／＼いいサ／＼、轉ばねえやうに早く行かッし。」ト、是れより別れて出目助、左次郎は引き下つて、ぶら 左次郎「オイ出目州何ダカをかきな足取だが、あんまり呑み過ぎたやうだぜ、例のタテはおほつかねえもんだノ。」出め「ナンのおれが歩行み形よりおめへがむづかしさうだア。」左「馬鹿をいはつし、俺に間違ひが有る物か。アノたて許りは、安波公がよく呑込んで居るヨ。どうも足下がけんのならねえ。」出め「ナニサ案じなさんな、美味くやつて見せよう。併しやどつこいと見えに成つて、後の鳴物がかはらうといふ所からガ、少とつちる所が有るやうだ。」左「ウ、雙方から打ち込むと、眞が兩刀で請ける。」ト、少々のり氣にな出め「ソラ此方の刀を引く。」左「おれも引ッぱつして又打ち込む。」ト、同じく杖に 出め「アバ公おれが方へた、みかけて来る。トン／＼／＼ト三足さがつて平居て受ける。」左「所をおれが後から打ち込むを、安波公が左の刀を逆手にうしろで受け留める。」ト、だん／＼はずみになりたる所へ、西國邊の御家中と見え、二人連いか物作りの侍、此の後へ來かゝる。こち

らは一向心出「そこでアバ公が鼻の先へひらり。」ト、かの侍の鼻先へよいと杖をつき出せば、筑五郎「コリヤづかぢ、慮外千萬な奴。」筑四郎「此奴、乞食の身分の以て、武士を嘲弄いたしをる。」出「エ、是れは何しをる、慮外千萬な奴。」筑四郎「此奴、乞食の身分の以て、武士を嘲弄いたしをる。」出「エ、是れは御免なせえ、大きに龜相いたしました。」筑五「ヤア此奴、今さら龜相ちうて尻込みするとて、其のぶんに致さうか。最初此の棒を突き付けをる砌、アバ公が鼻面へちうて、我等が面へ突きかけ居つたでねえか。アバ公なぞと、秀句の如云ひをつても、矢張我等が面のミツチャのことは承知してをるわ。」筑四「思へば／＼大膽なる不敵奴、箇様な奴原生け置いては、のち／＼何事を仕出づるも計られぬ。」幸へ此の頃求めし此の新身、筑五郎殿一人づ、試みませう。後日御咎めの受くるばつてん、慮外者を手討に致すは武士の常、別に六かしい事はござらぬ。」ト、いはれて兩人彼の侍を見れば、大あばたの鬼髭はびら、眞田卷の柄に手をかけ、するどき眼に角立てて白眼み付けら 左次郎「イヤ御立腹は御尤も至極でござりませ、兩人は死人のごとく眞つ青になり、土へ天窗をすり付け、 左次郎「イヤ御立腹は御尤も至極でござりませ、全く是れは間違ひで、あなた様方の御氣にさはりましたのでござります。私ども連の内に、安波太郎と申すものが御座りますゆゑ、其のものと少し稽古のことがござりまして、只今私とその仕形をいたします所、餘りはなしに實が入りまして、あなた様方の御通行とも心付きませず、龜相仕りましてござります。へい何分御慈悲に御ゆるし下さります様にお願ひ申し上げます。」出「左様々々どう奉りまして、お武士様方へ向ひ奉りまして、嘲弄仕ります様ナ心はけつして御ざりません。」

ハイ實に間違へて御ざりますから、どうぞおはら立ちを納め奉りますやうに願ひ奉ります。」筑四郎は
 すこと聞さる 筑四「イヤ筑五郎殿、先刻より此奴等が言葉のはしに、稽古の事ども有りをると申せば、
 察する所物ごし關東ものと見ゆる所、棒を心かくるを見れば、總州香取邊の者可有 我等等は今劍法
 を磨く身分なれば、幸への事、少したりとも兵術の心得ある者を、やみく／＼手討ちに致すも不便な
 れば、爰元にて仕合致して遣はさう。萬一我等等未熟にて打ち負けば、最前の慮外のゆるして遣はさ
 う。又打ち勝つに於ては、元より真劍た、みかけて新身のためし、筑五殿、此の儀はいかゞでござら
 う。」筑五「宜こそ思やア付かれた。成程只今まで試しをつたは死骸許りで、張合のなか事なれども、
 此奴等が飛びはねをる所を、見事すつぱく切り下ぐるは、え、手定めたい。然らば、支度致さう。」
 と、下緒をはづし早だすき、こひ 筑四「サ、早々立ち上りをらぬか。兵術の心がけると見た故、乞食
 口くつろげ左右よりつめかけ、 筑四「サ、早々立ち上りをらぬか。兵術の心がけると見た故、乞食
 なれども心根を不便に存じ、武士が相手に成つて遣はさうちふに如何立合へをらぬ。」筑五「但し此の
 儘打ち掛けようか。」ト、雙方よりつめせられ、左次郎も出目助も魂は中天へ飛び上り、死人のごとく口びるま
 も、あしこしなえて立ち上るこ 左次郎「モシ／＼失禮ながら、それは大きにお目鏡違ひでござります。どう
 いたしまして私どもが、劍術なんぞ存じます者では御座りませぬ。また有様は寔の順禮でもござりま
 せぬ。よん所ないことで、身をやつしましてをるので御座ります。それもたつてお尋ねなら申し上げ

ませうが、とてもまこととは思しめしますまい。只御慈悲に命をおたすけ下さりまし。」出目助は大粒
 ほろ落し齒の 出目「ハイ此の者が、申す通り、どう奉りました、お武士様に、手むかひ、奉ります、
 根もあはず。ものか。わ、私は、し舌が、ちんで物が、いはれ、ません。ハイ拜みの、後生様で御座ります。
 どうぞ、命許りは御たすけ遊ばさせられ、下さるびやう、エ、ぞんじ奉ります。」筑五「ヤア今さら腑
 甲斐ねえたは言いはすと勝負いたせ。此方覺悟極めてをるわ。」筑四「おのれらわりの料簡也、縦へ勝
 負不致共、此の儘ゆるす事罷いならん。さすれば勝負は時の運次第、仕勝ちをツていさぎよく、遁る
 るが能えでにやアか。彼是日開取る内往來の人立ちがしをるわ。」筑五「エ、早々立ち合アをらぬか。」
 ト、出目助が杖を取ツて、鼻の先へ突き付ける拍子に、杖に仕込みし金貝張、二三寸ずらりと抜ければ、左次郎はハ
 ットおどろき、是れを見せてはなほ／＼ねぢくり、むづかしからんと手早くしつくり納むるを、筑四郎は目早く見付
 け、筑四「ヤレ筑五々々、ざんじ控アさつしやれ。先刻より此奴等の爲體がてんのかぬ事ども多き中に
 も、只今忍劍の所持をいたすを見受けましたが、何さま俱不戴天の族かと存するが、貴公如何思はる
 る。」筑五「なるほど貴所の賢察の通り左様に存する。」少し小聲「コリヤ順禮敵ども尋ねをる身の上
 か。」ト、いはれて左次郎すましたりと心に 左次「ハかく御見咎めに相成りましたる上は是非も御座りま
 せぬ。御推量の通り大望の有る者どもで御座ります。それ故命がをしうござります。どうぞこのま、
 おのるしなされて下さりまし。」出目「へい私も左様で御座ります。」筑四郎は横 筑四「テモ扱も左様と
 手を打ち

もぞんぜず纒かの怒を根にいたし、最前よりの過言ゆるさつしやい。」筑五「いかさま大功は、細謹の願すと、大望有る身は堪忍が大事デヤ。先刻よりの過言今さら後悔いたす。」ト、風なみ直れば、兩人出目「へい私共は生まれ付いて人に負ける事が嫌ひで、今まで五分でも引けをとつた事はござりませんけれど、どうも敵を打ちますには、成丈あやまつてをりませんと、どうもそこが。」ト、くだらぬ事を左次郎はうち消し、目くばせ 左次「イヤモウ先程の慮外をお許し下されましても、矢張親どものかげみに付きそひ、助けられますかと存じられます。」ト、顔を涙をこぼし「何時を限りと定めもなきうきかんなん、其の上めぐり逢ひましても、萬一返り打ちになりませうかも知れません。」ト、しをくとする。兩人の侍筑四「何サく左様の不吉を申すものでねえ。孝子には天の助けちぶが有る。しかし其の相手ちふは手強いやつか。」 左次「左様で御座ります。同じ家中に名を得たる劍術師範の、へい名はまうしにくう御座ります。」 筑四「我程々々尤もした事ぢや。承るにも及ばぬが、ア、何にもいたせ、萬端何角と辛勞の段察しをる、思はずも眼水の催した。ハ、サ、手を上げられい。本望とけられた其の上は、尙又いつかどの御出世でござらう。我々とても同じ仕官の身、斯く承る上は高下はござらぬ、サ、平にく。」ト言葉も直りていねいの挨拶に、 出目「へい、何、是れが勝手でござります。モウ身を落しますからは、昔の氣を出しては行けません。たとひ内に金の茶釜が有ると申しました所がはじまら

ねえ理窟でござります。」左次郎は出目助が口を出すがにひやくして、又にらみつけ、 左次「是れは大きに御遊山の、お邪魔を致しました。最早おわかれ申ませう。」 筑四「成るほど、この方はともかくも、人目ののぼる、おの、方、人立ち致しをるで、さぞ心配でござらう。ア、名残のをしまるれども、是非に及ばぬおわかれ申さう。」 筑五「武道を磨く我々計らずもかやうなる孝子に行き逢ふも武門のみやうが、今日は吉辰ばいの、イヤ随分とも、身を大切に本懐のたツしめされ。御縁もあらば重ねて貴顔の得ませう。」ト、残り多氣に見返りくわかれ行く。げにいお強きは武の表、裏のなさげぞ深かりし。 出目「ヤレヤレとんださいなんに逢つたナウ。」 左次「災難どころか命を拾ったア。コレちつと氣を付けさつし。どうも兎相ツかしいから此様な目に逢ふノダ。どうしてまたアノ侍の鼻面へ、丁度杖を突懸けたらう。おらア向うをむいて居たから、後から人の來るのも知れねえ筈だけれど、足下はアノ時こつちをむいて居ながら、侍の來るのが知れねえ事も有るめえに、ばかしくしい。」 出目「さうさどうして見付けなんだかさ、どうもおらア藝事にかゝると、夢中に成つてならねえ。」左次「ナンの藝も大層ダア、まだしも顔へ突つけて、疵でも付けねえで仕合、アノいきほひで疵でもついて見たがいい、物いはずひつこ抜いて、やられる所だ、オ、おそろしい、思つてもぞつとするわ。」 出目「ホンニおそろしい事よナウ。しかしアノ侍もあんまり短氣な手合だ。こつちもわるさは悪いけれど、殺すほどの事も

有るめえぢやアねえか。なんほ此方連だといつて、犬を切つたやうにもいくめえす。こつちが死ねば先も解死人に出るだらう。」左次「とんだ事をいふ、そこは武士の威光だわ。此方がダアといつて仕舞ふと、死人に口なしよ。いいやうに理を付けて、慮外者ゆゑ手打に致した、此の段御届け申す、ハイ左様ならぐらゐで済んで仕舞ふワサ。それだから町人は割が悪いワ。」出目「馬鹿ア言ひねえ。町人だつて、茄子や大根を切る様に、サウ手軽く済むものか。こつちに荒神様も大家様もあらア。又急度さういふ筋のものなら、屋敷方へ出入の職人商人、其の外武士を相手にする商賣は皆馬鹿もの、往來をするにも向うから侍が来ると、とほり過ぎるうち軒下へ屈んで、待つていねえければならねえ。どういふ間違ひで兎相しめえ物ぢやアねえ、ばかしくしい。」左次「ナンノ今になつて、其の様にりきむ事はねえ。さつき其の通りいへばよかつた。漸う舌が廻つて來たナ。」出目「ナニサいつもだと、足でもすくつてはふり出して、ぶち放しといふ所だけれど、何分茶番の事が氣にかつて、今爰で騒動おこすと、モウ飛鳥山もチャン／＼に成ると思つたから、胸をさすつてこらへて居たのダ。」左次「このべらほう段々つよくなるナ。そんならなぜさつき大粒の涙をこぼして泣いた。」出目「おめへもベソベソ泣いタア。」左次「おらがの傾城泣きといふので、目へ袖を押し付けてこすりちらすと、目縁が赤くうるんでくるわ。そこで又せりふ廻しでぐつとうれへがきいて、あれから侍の氣がをれて來た

らう。足下は又手ばなしでホタリ／＼、一ツ粒十六文位な涙を落したり、鼻の先へ綱渡りをさせて、鼻の中ばへしばらくたもつ、名づけて野田の下り藤といふ涙をどうしてこぼした。」出目「へんおれも傾城泣きヨ。おめへの様にするのは昔の傾城泣きで、目のふちへつばを付けたり、のみかけて有る茶を付けたりして、袖でこするなんぞは、臆で禪をしめた時分の客人でなければ眞受にはしねえ。今時は手ばなしで泣いて見せねえでは得心しねえワナ。」左次「それだといつてうそに涙が出るものか。」出目「そこに祕傳が有るのサ。」左次「ハテナ本たうか。」出目「空言も眞言もいるものか、現に今おれがのを見たぢやねえか。」左次「ハアそんなら今泣いたのはうそか。」出目「知れし御事サ。」左次「イヤそりやア妙術だ。さつそくお弟子入。」出目「へんそれだから人を破家に許りしなさんなよ、何かしらちつとは能の有る物だ。今三津五郎でも幸四郎でも、愁歎に本たうに涙をこぼすのはみんなおれが傳授だ。」左次「イヤ又人がちつと受けると、御大相なほらを吹くからどうもならねえ。」出目「ソレさう思ふからどうもならねえ。法事といふものは理詰なもので、第一信仰がなくつては教へてもやくにたたねえ。」左次「フウ成程さういふ譯も有るだらう。そんならまじめにどうぞ教へて下ツし。」出目「ム、そんなら教へようが、何も別にむづかしい事はねえ。マア女郎でいつて見ようなら、今夜此の客に腹をたたせて歸しては、約束の夜具も間違ふとかいふとき、是非々々一番ぐんにやりとさせようと思ふと、マツ

ぐつと氣を落し付け、うつむいてふさいで居ながら、我が親か兄弟の死んだ時の事、又遺言などを思ひ出したり、お袋の病氣で人參の代に賣られた時の事なんぞしんに思ひめぐらし、十分愁へを以て相手が腹を立ッてるるを、エ、うらめしいお心ダ、なんぞと胸の内ではいり／＼考へながら、よわ／＼と挨拶をして見ねえ、そりやア手ばなしに涙の一升や一升五合出すぶんは、十五夜に絲瓜の水を取るより心安イ。」左次「アハ、おほ方其のくらゐな事だらうと思ツた。」出目「ナゼ／＼。」左次「ナゼといつて馬鹿々々しい。そりやア成程女郎なんぞは其のくらゐな事も有らうが、よくつもつて見さつし、足下なんぞが親の死んだ時の事を思ひ出したぐらゐで、涙を出す風か。コレ一昨歳親父が死んで葬禮の時、其の面にもはぢず、三津五郎の身振で焼香して、始終袴のヒダを内から手を入れて崩してすわつたり、かたをギス／＼しながら膝で歩行いたり、いやはやおらア冷汗を流して見て居たぜ。死にたてのほや／＼でせへ、其のくらゐのべらほうだものを、今時分思ひ出したとつて、そりやア手めへが出す氣でも涙が不承知だア。なんでも今こぼした涙は地金だ／＼、がまんを言ふな／＼。ハ、ハ、ハ。それはいいが、物云ひはちつと氣を付けさつし、むだッ口やへらず口はわる達者だが、少しまじめな事は無體なもんだぜ。何だらう、へい左様奉りまして此様奉ります、お腹立を納め奉りますツ。へん大山へ參る山伏の様だ。」出目「さういひなさんナ。あ、いふこけは、崇めさへすれば嬉しがる物

だ。」左次「いかに崇めるとつて、どう致しましてと云ふ所へ、ぬしがいふのは、どう奉りましてと言ふからわけがわからねえのだ、せめて仕りますならいいに。」出目「崇めるから奉ると云ふのよ。チヨットいふにも、崇め奉つて置くといふぢやねえか。あがめ仕るともあがめ致すともいふ人はねえ。」左次「エ、口のへらねえべらほうだ、なんともぬかせ。そりやアさうと大きにおそくなつた、安波公がサゾうろ／＼して待つて居るだらう。」出目「さうヨ、ちつときり出さう。圖武六や外の奴等はどうかしたらう。」左次「ナニ是れも先に成つたノサ。アレ／＼向うから來るのは、モウから樽にして歸つてくるぜ。」出目「ホンニナア、いい歳増が見えるナ。オ、／＼酔つたわ／＼、どうも女はよろける程酔つては中ダヨ。何でも櫻色で、目の縁がすこし、トロリと來たくらゐる所が千兩だ。」左次「跡の新造は足下の誂へどほりダゼ。」出目「ム、／＼こりやアたまらねえ／＼。」左次「ナンダ／＼見えばるナエ。いくら衣紋を直したとつて、笈摺に柄杓ではをさまらねえ。よせ／＼。」出目「チヨツいめえましいナア。モウ／＼こんなくはだてには一味しねえゾ、馬鹿々々しい。人は花見に出るには、借著をしても見えばるのに、此のさまは何事だらう。」左次「なんのふさぐ事はねえ。著物はどのやうに立派にも出來ようが、頬の皮まで著替へられやアしねえわ。」出目「さういひなさんな。馬士にも衣裳だア。」我が形を「へん公家にも綴では、納まらねえ。」左次「所を馬士にも綴だものを、何分納め奉られめえ、

ハ、ハ、ハ、ハ。」出目「ナンのをかしくもねえ事を笑ふぜ。」ト、かほを左次「剛氣とふさぐナ、コレ途中で見えばりに來はしねえ、飛鳥山がかんじんだ。サア、いそがう。」ト、是れより道を早めて行きながしりなどして、たゞおのれ等がおこなひのみを通りものと心得たるもをか。是れは扱置き安波太郎はとくより飛鳥山にいたり、趣向の場所を定めおかんと、そこ爰とぶらつくうちはや酒氣も覺めうす寂しく思へども、今を盛りの花の山、貴賤老若むれ、さゝえわりごを散らし、さすがに廣き飛鳥山所せきまで居並びて、諸ひつ舞ひつ餘念もなき有様を見て、安波太郎は猿狂言の役者の如く茶番の事も打忘れ、羨ましげにのさりくと見歩くと、花見の人々うろんに思ひ、殊に女中はうそ氣味悪くじろりくと目を付ければ、例の己惚れたつぷりにて心いそ、勇めども、何といひよるよすがもなく、あちこちうろくする所へ、宿に残りし四人の者にはしなく行き合ひ、卒八は小聲にて、卒「オイ安波公まだかく。」アバ太郎は安「オイみんな早かつたナ。イヤきてれツ、安波さん有封に入り、敵役替つて色事師となる、シヤン、編笠をはふり出してちうけへりがしてえ。」卒「コレどうした、狐にでも化されはしねえか。」野呂松、吞七「マア向うの茶屋へでもちつと休まウ。安波公も一ツ所に歩行みねえ、連のふりせへしねえければいい。」安「ム、さうしよう。おれもチツトうけて貰ひてえ事が有る。」みな「何だか無性にたれか、りさうで氣味がわりい、おかはでも買つて來ようか。」ト、いひさま茶屋が筵に腰をかけながら、安「コレ、早速ながらだが、今日ほど女に目を付けれられた日はねえぜ、みんな編笠の内をのぞき込んだり、又見る様で見ねえ様で、イヤ成程色事は花見の事ダゼ。ナゼといつて見ねえ、女は一體陰氣なもの、それだによつて物事が都てうちばだから、女が男をくどくといふことはめつたにねえもんだ。所が花見といふやつは、どの様な陰氣な人も陽氣になる場所だから、男増りに



女の方から持ち懸ける様になると思ふ。」卒八「コレサマアどうしたのだヨ。ほんに氣味の悪い、狐でもつきはしねえか、マア氣をしづめさつし。」野呂「そして左次さんや目出公は來て居る様子か。」安「ナアニマダそこ所ちやアねえ、マア聞かツし。凡そ江戸廣しといへど飛鳥山の花にしかずサ、飛鳥山廣しといへどサ。」ト、むかうの方「アレあの櫻ノ、あれは一昨歳うわツたぜ、七小町といふ名札の立ッて居る、アノ木の元に纏居したる一羣、なんでも御大家の奥方と見えるが、上下ひツくるめて甲乙なしのドロビイ。」卒八「ナあれが盗人の女房か。」安「エ、わからずばひツ込んで居ろ。是れドロビイとは硝子を逆さといふ事だわ。」卒「アハ、うぬばかり呑込んで居てさつぱりわからねえ。」野呂「それがマアどうしたといふのだ。」安「イヤサ何も取りしきつてかうといふ事もねえが、先刻からおれが行き廻りかん廻り、三四度もアノ櫻を見て居たらう、さうするとそれまで何か高笑ひをして居ても、しんとなつてコツ、コツ、何か聞きとれはしねえが、目引き袖ひきいそ、する様子、イヤモウ咄しても總身がぞく、ぞくしてだるい様だが、どうも言ひ寄るでだてがねえ。いい智慧が有るなら借して下ツし、友達のよしみだ。」みな「アハ、イヤはやあきれた代物だ。足下も鏡のねえ國の人ではあるめえし、女三昧もてえけえにさつし。今日の形は拵へがおつりきだから、先でも不氣味に思つてじろじろ見るのだらう。そりやア茶人の女でも有るなら、開抜けでいいとか、ぢ、むさくつても面白い

とか、名を付けて惚れめえものでもねえが、氣心も知れねえ初對面から、ほれられようといふ、面でも有るめえぢやアねえか。」安「何も其様に手ひどくいはずといいわサ、俺だどつてちつとは切掛もあると思ふから相談するのだ。」野呂「ハアそれぢやア少しは出來勝手ナ當りでも有るのか。」安「さうよ。」香七「なる程、イヤ待ちねえヨ、此方が十分見くだして許り居るからしんかうがねえけれど、惚れる心持になつて見た所が、カウト、先が武家育ちに、こつちが武士の忍び出立、著付は黒羽二重の紋付、萌葱博多の袂み帯、ぐつとはでに朱鞘の大小と、ム、いいわえ。御面相は編笠で見えず、下から覗いて見た所が、鬼髭だがマア、是れも青髭と見るサ、ム、いいわえ。こいつはどうか取り結び様が有りさうなもんだ。」卒八「さうよ、首尾よく成就した所で笠を取ると、手付損にしておことわりヨ。こいつはおもしろい。」安「へんそれまでにこぎ付ければ面にはかまはねえ、手管で殺して見せべエ。何にしろアノ幕へ入り込む手段にこまる。」香七「マア花見の場で心安くなるのは歌だナ。チヨイと梢へ付けた短冊を先で讀んで、又返歌の心持で、短冊を付けるなんぞといふ様な事が、マア早手廻しだナ。」安「イヨく作者々々、妙案々々、こいつはきつといい。併し短冊に困るナ。」卒八「ナニそれは鼻紙の端をさきかけて、チヨイとよりかけにしていいのサ。」安「ム、成程是れ以テさそくだナ。」香七「なんの是れもたすとももの事だ、ひどくかたく褒めるぜ。それはいいが歌は出来るか。」安「どうして出来るものか、おめへたち考へてくんねえ。」野呂「そんなつまらねえ色事師が有るものか。」安「それだどつておれには出來ねえものを、仕方がねえ、香公考へてくだッし。」香七「どうしてそんなぶ人がらなことを知るものか。」安「是れまでにして腰がれてはくやしい。卒公、眼公、野呂松、コレ拜む。」卒八「それだどつて、むりな事許りいつたもんだ。つひぞたべた事もねえものを。」野呂「何でも自作でこじつけねえナ。」安「なんの俺に出來るくらゐなら、氣をもみはしねえわサ。なんの卒公なんぞは、初午ダノ天王様ダノにはやりながら、いちのわりい友達づくといふものはさうしたもんぢやアねえ。」卒八「それは地口や川柳點だわ。」安「それでもいいわナ。」卒「馬鹿々々しい、地口で色事が出来るものか、せめて狂歌ならいいけれど。」安「ム、其の狂歌がいい。」卒「イヤサ其の狂歌が出來ねえといふ事ヨ。」安「ナンノおつくふな事許りいふからはじまらねえ。イイどうするものか、ねえ昔とあきらめよう、やつぱり縁のねえのだ、其の替り此の末おめへたちにどんな事が有つても、おらアしらねえといふから、其の時腹をたちなさんなヨ。」香七「イヤハヤわけのわからねえ男ダゾ。」安「さうヨおらア譯がわからねえ男よ、わかつてれば歌の十や二十ナニ差支へるものか。」ト、大きにふさぐ。眼七はし、眼七「コウあの様子では、今に左次さんや出目公が來てもかんじんの趣向は身にしみてする事ではねえぜ。」野呂「さうよ困つたもんだ。よし、皆と相談して、何とでも歌らしくこじ付けてやるべい。」

先の所爲はねえ、ぜんたいこつちの己惚からおこつた事だ。アノ手合は男をひやかす事は何とも思ふのぢやねえ。」野呂「ハ、、すつぱり釣られたナ、おもしろい。」香七「見し玉だれを、武士鼻たれはいいい。」香「あんまりけらくするナ。人のいい時にはてんぐに不承々な面をして居て、ちつと落日になつてくると、アハ、く笑ふぜ、いめえましい。どうかして意趣けへしをしてえもんだ。」卒「コウく其の意趣けへしはいい事が有りやす。今に役者がそろつたら、アノ幕のそばでおつばじめるがいい。何ほ屋敷育ちでも、鼻の先で切つたりはつたりを、ちつとして見てはるられめえ。さうして追ひ散らしてやるがいい。」香「それがいいい。」左次「さんや出目公はどうしたらう、モウ来さうなもんだ。圖武六はさつきから來てゐる様子だ。」ト、いふ所へ向「ふうだアア、くウ、ヤア引。」卒「アレく來たぞく、香公早くいつて場所をのみこませてきさつし、そつとダゼ。」香「オツト承知だ。」ト、はしり行き兩人。卒「アバ公しつかりさつしヨ、肝じんの所だぜ。」香「へん美味くやつて見せよう。」ト、帶などめめ直ししづくと歩行く。左次、出目助も、つじつ。卒「コリヤく順禮火を一ツかしやれ。」左次郎はいまだばこも吞まぬ所ゆゑ、エ、氣のきかぬと。左次「へいくサアお付け遊ばしませ。」ト、編笠を思ひながら、うろたへ火打を取り出したばこを吸ひ付け。左次「へいくサアお付け遊ばしませ。」ト、編笠を「ヤアめづらしや鳥目百味、年來尋ぬる親の敵。」出目「じんじやうに勝負々々。」ト、是れより廻りぜりふ人がひに笠をかなぐりすて、刀に手をかけ詰寄せれば、ソレけんくわ、イヤ敵討と、所せきまで居竝びし野遊びの人々上を下へと騒動し、重箱かへ懸け出す有り、辨當箱をけちらすやら、吸筒をふみくだき、毛氈をかむり逃げ

惑ふもあり、たゞ鼎のわくにひとし。こなたは早抜き合はせ、仕組みし通り十分に切り結び、最早圖武六來れかしと思へど、山の下通にてチャンくと、鉦の聞ゆるのみ。來らざるもことわり、此の鉦の音は三きき幡院院勸化の、ぢぢばの集まりしなり。三人はタテの仕組種切れとなりたれど、一向圖武六見えざれば、せん方なくへしなぐりにたぎちらし、たがひにいきもきれ、つかれきつたるその所へ、いづくにか吞みあたりけん、最前道灌山にて出で合ひたる、かの侍二人さげ緒たすきに「ヤレじゆんりやアたち助太刀申す。」ト、いひさま兩人一度に、氷のごときだ後鉢巻、かひくしく出たち、「ヤレじゆんりやアたち助太刀申す。」ト、いひさま兩人一度に、氷のごときだどり込む。左次郎、出「左次「ソレ安波公早く逃げさつし。」ト、いひながら、あわてふため逃げ出せば、アバ太郎目助けつくり仰天。左次「ソレ安波公早く逃げさつし。」ト、いひながら、あわてふため逃げ出せば、アバ太郎逃げ出「ヤアひけふなり、おどれ逃ぐるるとにがさうか、ヤレ順禮間近になじか切り付けぬ。後袈裟に打ち掛けぬか、エ、埒の明かぬ。」ト、齒がみをなし、刀をふつて追ひかくれど、是れもよほど吞み過ぎしと見へにげ廻り、はては山の端におひ詰められ、最早一生懸命と下道の方へ飛び下るれば、木の根莖に突き懸り、衣類手足のわかちもなく、ばらがきになり、のたり廻つてやうくと、下道通りへおりければ、彼の侍も見えざれども、今にも跡より切り付けられる心地にて、三人ばらばら「我先にと、根岸通りをやらう」と命からん逃がかる。跡に四人の者どもは、なげちらしたる諸道具取り集め、すごとくと立ち歸り、互につゝがなきを喜び、又圖武六も夜に入りて、漸く家内をさめ出で來り、途中にて店受けに引き返されし始末など物語り、はては大笑ひとぞなりにけり。

儒者教以解_レ惑。富家施以救_レ貧。難矣。解且救。鯉丈先_レ難而後_レ獲。欲_レ惠_ニ惑者貧者_一。而非_レ儒非_レ富。無_レ所_レ苟而已矣。仰觀_レ世俯察_レ情。作_ニ世話之書_一。名曰_ニ八笑人_一。讀者必悅且娛。破_レ眠除_レ欠忘_レ倦忘_レ憂。冬夜夏日爲_レ短。豈不_レ近_ニ解者救者_一乎。

文政四年辛巳正月

大八海老人稿

そも八笑人のらんしやうといつば、僕生質家事にうみて遊戯にあくことを知らず、謂曰食は貧
 樂とやいはん。されど清貧をたのしむ器にあらねば、ひぢを枕の樂しみその宅に居る事をきらひ、花
 と月とに心を移せど、孔伯といふへうきんものを連れざれば、今に其のたる事を知らず。故にかくあ
 りたらんにはと思ふ程を、春の日秋の寐覺々々にうつ、心のうつけの数々、書きちらしたる其の反古
 を、八笑人とはなづけしなり。或人予に問うて曰く、彼の小冊何の爲に著述するや。予エヘントせき
 ばらひをしながら答へんとして行きつまる。嗚呼いかにせん勸善懲惡の趣なく、益の有無を辨へ
 ず、サアそれはエ、ト口塞るを見て、彼の人は高笑ひしてそしりて曰く、いかに犬先生、無益の業を
 今こそ知るらめ。看者は滑稽にうみて拙著の愚かなるを笑ふ。さすれば及ばぬ下根つひやすのみか、
 廣く愚智短才を引札するにひとしからずや。はづかしいかな作者ぶり、いたいかなかた腹、冷いかな
 掌中の汗と、竝べたてたる惡口にこたへ兼ねたる門首、幸く來たるは板元の文永堂が使なり。八笑人
 の後編はと催促されて鼻高く、エヘン／＼とせきばらひ、そしりし人をしりめにかけて、序に似たも
 のをかくのごとし。

文政四辛巳春

瀧亭主人鯉丈誌

花曆八笑人二編上之卷

久かたの光のどけきと詠じたる、春の日のうらゝかさは、かせたる野邊の若草の、もゆる煙が立つ
 霞、山懐に早蕨の、にぎりこぶしを開くより、盛り違へぬ花曆、年々歳々相似ても、日々夜々の花
 の形、同じからざる詠めには、心の花も櫻比、うき立つ空に陽火の、ちら／＼見ゆるほろ酔ひに、樽
 を荷うて行く娘、花をかざして歸る老父、賢愚貧福押しなべて、うかれ遊行の時なれや。彼の八笑の
 遊人は、花見につれて催しの、茶番も昨日飛鳥山、其の仇うちも仇事にて、打つは遠寺の入相比、花
 ならなくに散り／＼に、追ひ散らされて漸うと、八人揃ふ池の端、酒狂亭へつどひ寄る。取りわけ左
 次郎出目助は、疲れしのみかそこ爰と、摺剝疵や打疵へ、一心足らぬ萬能膏、酒にて用ゐる無名圓、
 此の人物へ合藥か、即刻廻る酒氣に連れ、猶こりすまの後日の趣向。左次「コレみんなが呑んで許り居
 ては始まらねえぜ、あしたはたれがする。」ア「ほんにさうよ。ア、しかし初日をいたゞいたから、
 すこしおくれが來た様だ。」の「何のそんなけちな根性でいけるものか。それならおれが一番座直し
 としてやるべエ。」左次「ム、おもしろえ／＼、筋は出來てるか。」の「はうすんに有りす。鶴屋南北

櫻田治助、めめて鶴田南助と云ふたて作りだ。まづすつと。」卒「たいそうなはうだが、すべてすつとと云ひ出す嘶に、おもしろえのはねえもんだ。」のろ「エ、やかましいわえ。モウまぜつけへしやアがる、マアだまつて本讀を聴聞仕れ。エヘンそこですつ、又顔を見やアがる。」左次「コレサどうしたのだ。いがみやつてばかり居ちやアわけがわからねえ。すつとでも、すつとでもいいとして、其の先はどうだ。」もん七「こうかのふみ板はづすが。」眼七「いいさくわかつたよ。」左次「イヤわかつたぢやアねえ。マア皆が些と洒落ッこなしと極めて、しつくりと稽古するがいいぜ。」アバ「是れからかうするがいい。一洒落百づ、過料を取るとするがよからう。」出目「こりやアいい、ぶちのめすより痛えからきくだらう、しめく。野呂公心置きなくはなしねえ。」のろ「よし。サア洒落らば洒落ろ、翌日の小遣だぞ。そこでまづ、大びらにすつと向島に。」卒「フン引それから。」のろ「それにどうした。」そつ「どうもしねえ此方の事だわ。」のろ「エ、引コレ五十が物は有るが、チヨツ許してやれ。そこで先づ。」そつ「ず。」のろ「何だと。」左次「痛がするやうだ。」左次「エ、此の男も、むづかしい事許りいふわ。マヅ荒増正本をはなさつせえナ、向島でどうするのだ。」のろ「かう云ふ譯だ。マヅ隅田川の、エ、引しがらみといふ名代で。」左次「ム、ン大層な驚しだの。」のろ「トリつばに聞かせて置いて、おれが形がいい。ぢゝむせえ布子の、あちこち綻などが有つて、泥が付いたり綿がぶらさがつた

り、帯は繩か何かめて、冷飯草履と中貫と、かたくちんばにはいて、川越の辨當のさいといふ、手拭をくるくると、米屋かむりといふ拵へだ。」左次「なぜそんなむづかしい手拭を冠るのだ。」のろ「めんだうな理窟はねえ、鈍公のを借りてかぶるのサ。」左次「鈍公足下の手拭はどんなだ見せな。」もん「これよ。」左「オヤくはれが川越の辨當とやらか。」のろ「おめへもやほにくどく聞け。醤油でひどく煮染めた様だといふ事よ。なんと、見てものがかわくだらう。いつ買ったか知らねえが、ちつと洗濯でもすればいい。」もん「大きにお世話お茶でも。」のろ「飲まねえで、こてへられるものか。手拭を見たら、のどがひりくすらア。是れを思ふと俺アほんにもつてえねえぜ。マヅ手拭、小遣、小菊、こくぶは、小娘どもから仕送る。衣類持物等は歳増分後家のたぐひ。」左次「このべらほう、尻ツくせのわりい、又いびつたれをしやアがる。」アバ「サアく百出せく、己が手にまぜつけへしやアがる。以後ほかの物の見せしめだ。」のろ「何々是れは狂言についでの咄だから、まぜつけへしぢアねえ。」アバ「向島の趣向に小娘や歳増だの後家だのと入用か。」のろ「入用ではねえけれど、向島だから其様なものも出ようではねえか。」卒「そんなら小菊や、こくぶや、小遣がいるか。」のろ「それも一文なしではいかれめえし、煙草も呑むだらう鼻もかまざらに。」アバ「何々言譯はこれえく。何でもたれたく。」ツア「めんどうな、しりをひんまくつて改めさつし。」もん「それより腰の錢入をひつばつせ。」のろ「ア、

ア、あやまつたく、出すよく。うるせえ取附くなえ。どうも男の肌さはりは氣味がわりい、きついきれえだア。チョツいめえましい、それ百、ヘンとんだ災難だ。」（ごん）「あんまり人の事ばかり、わるくいふからいい氣味だ。」（アバ）「笑つてやれエアハ、、、。」（のろム、ン智慧のねえ笑ひざまだア。サア是れから本讀におか、りなざるが、どいつでも、ぐつとでも吐かすと百ふんだくるぞ。）出且「かうせえむづかしいナ。ぐつと言つてもわりいか。」（のろ）「わりい〜。」出且「それではおくびもされねえナ。」（のろム、ならねえ〜。）そつ「くしやみは。」（のろ）「ならねえ〜。」（ごん）「屁は。」（のろ）「もちろん。」（左次）「イヤハヤあきれた馬鹿どもだぞ。サアそれでいいとして置いて、話合はどうだ。」（ごん）「おれが手拭を借りてかぶせればどうするのだ。」（のろ）「そこで土手通りをぶら〜、草履の古いのをひろつて腰へぶらさけたり、そら笑ひをしてをどつたり、何でも出たらめにしやべつて歩行くだ。」（ごん）「こいつは大當りだらう。」（そつ）「なんのあんなざままで歩いたとつて、大當りな事があるものか、こぎたねえ。」（ごん）「それだからよからうといふのよ。此の又面で、なり許り立派ではうつらねえわサ。」（のろ）「チョツ又つらを持ち出しやアがる。うつちやつておけえ。」（ごん）「ほめるのだア。」（のろ）「ほめられて嬉しくねえわ。」（左次）「いいサ〜、そこでそれ許りぢやア有るめえ。」（のろ）「どうして〜、是れからが山だ。先づ其の形で、牛の御前から秋葉近邊、足まかせにほつつき歩くもんだから、定めて人はどろ〜付いて

来るだらう。」（左次）「ム、〜。」（のろ）「それは扱置きこ、にまたサ、三圍のがんぎに、しるこほしが一艘付いて居やす。所へこつちからをどり狂つて行く。そこで又見物のうちへ、樂屋から二三人まじつて居て、始終程よくからかひながらついて歩行き、馬のくつか何か、おれにぶつツつけるやつだ。さうするとおれが又其のくつを投げけへすと、眼公が侍のこしらへで、見物してゐる顔へ、ボンと當ると、やほにあつくなつて、するさんとか茶山花とかきツとなつてかゝる。此方は茶にして、けら〜笑つて居る。こらへ兼ねて、すらりひつこぬいて切つてかゝる。こゝへ少し立廻りを付けてもいい。と〜あしらひかねて、がんぎへ逃げ下りる。つゝいて追つてくる。追ひ詰められて見物どもに、手に汗を握らせ、あはやと見る間に、彼の小屋形へひらりと飛び乗る。侍も同じく飛びこむと、船をついと押し出すとたんに、俺は又家根へ逃げ上り、真中ごろへしやんと立つと、爰が山だ。引きぬきで上の綴がばらりと落ちる。手拭をひよいと取つて、後へ放ると絲毛のみだしで、保名の物狂ひといふこしらへだが、何と初手がきたなくつて、ぐつときれい事になると云ふもんだから、だんどりはびつくりだらう。」（アバ）「首はやつぱりその首か。」（卒）「それもぐつと引きぬきにしてすけかへるのだらう。」（のろ）「やかましいわえ。そこで船の簾をぐる〜と捲くと、唄三線はやしまでちやんとならんで居る。大鼓でヤア、引とかけると、唄いざさらば、有りし雲居の花の袖、思へばかかる執著の。」と、アバ公

が鼓唄で、仲藏の狂亂を、丸で一番やるつもりだ。へん兼て手練の扇が山だ。」左次「ム、いいわえ。こいつは一番めめるだらうナアアバ公。」アバ「ム、本讀ではなか／＼おつりきだが、どうも安心ならねえもんだ。」のろ「なぜ／＼。」アバ「マツ第一山だといふ扇からしてうろんなものだ。さかさにして、富士山なんぞはどでござんす、といふ山だも知れねえ。」のろ「エ、おいてくれエ、べらほうめえ。心得のねえことをするものか。へんちよいとした所を一番見るか。オイ圖武公その扇を取つてくん。來た來たマツ、チャントひらく。エ、こんなぐわさ／＼扇ちやア出來ねえ、もうちツとしまつたのはねえか。」左次「そら／＼道具えらみが始まつた。オイ眼公、その袋戸をあけると、封のきらねえのが有る筈だ。一本出してやらつし。」眼七「おい來た、それなけるよ。」のろ「オット妙々、マツ封を切つて、そこでチャ／＼、イヤ、是れは又さつぱりひらかねえ。餘りしまり過ぎた扇だ。」左次「エ、よく七めんだうな事ばかりいふぞ、マツ兩方の手であけさつしナ。これからが見所だ。」のろ「そんなら、マツ、チャン、よしか、それ、それ、それ／＼、アよんや。ホイ是れはしたり一おとせばひらふハリトウ。」圖武「なる程かんしんだ、さう思ひきつては落せねえものだ。」のろ「ナニ是れは久しくやらねえからダ、ちつと手馴れてくると大丈夫だ。其の證據にはきせるなんぞは始終手なれてるから、百發百中まぢけへなした。アレ、ソレ、ソレ、ぐる／＼／＼アイヨイトナ。」卒「ヤンヤ／＼、奇妙々々。イヤ扇

よりきせるにするがいい、狂亂の所作喜世留の手いぜ。」左次「扇は落したら落しツきりにして、穴のあかねえやうに、ごたついても仕舞ふが、丸で所作を久しくやらねえから、ちつとも動かねえのはねえか。」のろ「ナニ／＼そりやア大丈夫だ。」眼七「イヤそれが不丈夫だヨ。」のろ「そんならちよつと當つて見てくん。アバ公たちかたが、しつかりだと思つて呑まれてとつちめえヨ。」左次「大層許りいふから、猶安心ならねえぞ。時におらア左の指が此の通り、右の手首はひつ挫く、今夜はとても弾けねえ。眼公裏のおだるさんを、ちよつと頼んで來さつし。」眼七「ア、地弾がたほでは、ちほけてうごきえ、めえ。」左次「うごけずば、いつそ今の内がいい。押しだしてからは連中のはぢだ。」のろ「へんびつくりしようと思つて、眼公はやく連れて來ねえか、いけ埒の明かねえ。そして左次さん、蠟燭を二三挺氣めへを見せねえ、どうも行燈の火ではうつりの悪いもんだ。」左次「イヤハヤすさまじい劍幕だぞ。今眼公がけへると、燭臺を出させようわサ。マア／＼笹湯がすむまでは、氣まかせにするがいい。」卒「あんまり甘口にするから戲けるのだ。今におだるさんが來ると、だつこして寢ねしよう」とぬかすだらう。」のろ「何もさう口ぎたなく言ふことアねえ。マツ今度の狂言ではおれが卷軸だぜ。」卒「かんぢくだか、亂ちくだか知らねえが、おだるさんにだつこさせるものか。」アバ「いいわサ、此の男も其様に氣をもむ譯もねえ。さきで承知なら、だつこでもなんでも、いけみ出すがいいぢやアねえ

か。」のろ「へん女めづらしさうに、がやくさうぐしい事だぞ。ほんに素人衆は、ナゼあんねえに
 びりつくしらん。こちとらアあのくれるナをん。」裏口より、おたる「左次郎さん何御用ダエ。」のろ「女
 ほきやアベエるしやのうツ。」卒「何だ、あのくれるな女ほきやア、ベエるしやのうとは、なんの
 こつた。」のろ「松は少し赤面し。卒「ナゼそんなえににらめるのだ。」左次「エ、引やかましいやつらだぞ。
 サア、おたるさん、こゝへ來給へ。時によんどころねえ譯で、ちよつとおめへの三絃をねがは
 うといふ存心だ。」おたる「おやすい御用だけれど、おまへナゼお弾きでない。」左次「所がこの通りの手
 だ。」おたる「オヤ、どうなさつたえ、けしからねえ。」アバ「鈍公なんぞが、あの手を持つてゐると、
 安樂だノ。」おたる「ア、俺アあの手が有れば、芝居へ出てぶつ付け二枚目。又腹が有るから拵へ物はよ
 し、あくる歳は立三味線おかしらだア。」アバ「ナアニさううまくはいかねえ。アノ膏藥をはがさず
 置いて。」おたる「おしてどうする。」アバ「荒うち足場からおちまして難澀いたします、御一錢。」おたる「ア
 ア引鶴龜々々。なんでもわりイ事といふと俺に許りなすりつけやアがる、いめえましい。」卒「そりや
 アいいがまづ。」おたる「何いい事が有るものか。」おたる「オホ、は、是れが敵うちの發端になりさうだ
 ねえ。」眼七「サア、坊もペン、を弾きに來ました。」おたる「オヤ、ナゼ連れておいでだ、又邪魔
 をしていけないよ。」左次「いいわ、サア坊爰へ來な、よく眠がらねえナウ。」おたる「ナニサ宵ッ

張でなりませんヨ。」のろ「オヤ、よくふとつとるなう。おらアモウこんな子を見ると、まことにへ
 んな心持になつて、ふさいでくるぜ。」おたる「オヤ子供は嫌ひかえ。」のろ「ナアニ其のくせ好きだけれ
 ど、マツア、いい子だが、此の子は元だてが、どういふ譯で出來たしらんと、深くかんけへて見ると
 モウ、たちきれなくなるわ。」おたる「オホ、いかないやナ野呂さんだヨ。」眼七「この子をサ柏戸
 が、ひどくほしがつたツけ。」おたる「ハア始終つよくならうといふ、見所があると見えるノ。」眼七「ナア
 ニ角力にする氣ではねえ。」おたる「どうする氣だ。」眼七「尿をたれずば、根付にしたいとつてよ。」左次「ア
 ア引やかましい口だぞ、をかしくもなんともねえ。時におたるさん、ちよつと、狂亂を一番弾いてや
 つてくんねえ。」おたる「なぜえ。」左次「かういふわけだ。ちよいとした茶番が有りやす、所で野呂公が
 一番所作らうといふ存心だ。なんと恐ろしいくらみだらう。」おたる「オヤ、それはサゾよからうね
 え。」左次「あんまりよささうでもねえノヨ。そこで今夜下見分をしようといふりくつた、イヤかうし
 やせう、とても長い事はごたいくつだから、まづ、鼓唄から『定家かづら』をすいとやつて、『いたい
 けざかり。』トきたら、すつとひっこ抜いて『ふりにし事を聞くからに、ひよく連理のちぎりさへ。』と
 いふ所へ飛んで、あんまり扇々といふから、蟲おさへに、『色にぞ出でし。』ヤ、ボ、ボウ、チリカ
 ラ、ハア、『我がうらみ。』といふ所で、扇をぱつとひらいて、一ツギツクリやつて、もうけさつし、扇

をば遣ひツコなしがよからう。」左次「なる程それがいいく、あぶねえ事はいらんもんだ。」のろ「そんならさうよ。」左次「そこで、一人ではどうも寂しさうだから、『千草も冬枯れて。』からは、奴をふり出して所作だてと、やらすがよからう、花やかでいいぜ。」アバ「こりやアいいく。第一ひとりでは荒がかくせねえ。」のろ「勿論荒はねえ積りだが。」出目「所が種ぎれの潮といふ所作で、見どころはちつと許りだらう。」左次「やかましいく。そこで二人の奴は誰にしよう。」がん「これはこぎれいなものでなければなるめえ。マヅ俺と、もう一人はかう見た所がト、扱々見るしい首許りだゾ。」左次「イヤサとても首えらみをしては、八ッ寄せても菅秀才の一ッぶりには受けとれねえから、たゞ小機轉のきいた、身の軽い者がいい。」がん「小機轉のきいたのならマヅおれだが。」左次「イヤきいては居るだらうが、何分さうドタ／＼した身體ではいけねえ。マヅ卒公と眼印がよからう。ナア野呂公。」のろ「さうよ、とてもおれの氣に入つたしろものはなし、仕方がねえ。」眼七「ハイ／＼お氣にはいりますまいが、御不承なさつておつかひ下さりまし。」左次「イヤサうらみッボイ事をいはずと、二人で立廻りでも案じさつし。そこでこつちは二階にしよう。爰で踊つたら又口がやかましからう。おれが見とッければいい、卒公と眼公許り來さつし。見物にまじつて居る侍はアバ公がよからう。」アバ「またおれが侍か、チョツ。兔角にくまれ役だナ。」左次「さうだけれど仕舞のおちへ來て船へびよいト飛び込

む、其の形で鼓唄とくと奇妙だぜ。しかしちつとでも立廻りのあとで船へ飛び込んだら、息が切れてこたへさうもねえぜ。」左次「そりやア息をつく内は、大小でかけりを小長く打つて居たら、ゆるりと息はつけるだらう。」アバ「ム、いいく、どうかかうかやツつけベエ。出目公も一口やつてくれるだらう。」出目「折角の頼みだけれど、此の節、はなはだ都合がわりいから、氣の毒だが半口と思つてくんねえ。」左次「ム、シろくな洒落は出ねえ、えんぎでもねえ。オイ圖武州、野呂公が所作つて居るうち、のろ公が替りに、アバ公とちよつとした立廻りを、つけて見て下つし。サアおだるさん、此方は二階としやせう。坊は寐たら、そつと火燧へころばして置くがいい。卒公眼公サア／＼、野呂公何をして居るヨ。」のろ「チョツト一口元氣を付けてえから。」左次「エ、久しいもんだ、いぢのきたねえ。今度の催しには人に氣をもませる事はねえ、自分の茶番ぢやねえか。」のろ「オツト承知々々、サア行きやせう。圖武公立廻りを美味くたのむぜ。」ツア「ヘンだまつて行かつし。箸を持つて喰ふ許りにこせへてわたサア。」のろ「ハイ／＼善好さん宜しくお頼み申しやす。」ト、のろ松はツア「アバ公何でもすつぱり拵へて、びつくりさせようぜ。」アバ「ム、そしておれが役廻りは此のタテ許りだから、所作よりにタテでぶツメめてくれベエ。」ツア「おもくれえく。マヅ荒まし筋を立ててネエ、それから小枝はおれがふりを付けよう。」出目「よからう／＼。兔角タテは氣どりが肝心だぜ。」がん「ちけへねえ。し

かし氣どりよりは、葉どりが下手だと呑みがわりイヨ。どうも素切といつても、とかく山を入れて。アバ「イイサ、わかつたヨ。随分洒落るもしいが、あんまりかんで含められるからうるせえぞ。所でマアたつて見よう、どうも素人細工では、胸でこせへて、チヨイトおつ建てる云ふわけにはいかねえ。なんでも最初から立つて、おし合つて見るが、一ばん早いヨ。そこから二人で手續をおほえて下ツし、サア圖武公。」ツブ「オットそれきた、先づ胸倉へくるか。」アバ「ム、しかし、てんから胸倉でもあるめえ。かうだからトマア向うへツカ、と行きナ。」ツブ「オイづか。」出且「口でいはずトいいヤ。」ツブ「それでもほんたうにツカ、と行くと、壁に鼻づらをぶつからヨ。ソレ只ヅカ許りでせえモウ此れくれゑだ。」アバ「よく言葉質許り取るぞ。それ帯へ手を掛けて引き戻すわ。」ツブ「それで鼻血の難はのがれた。」アバ「コレサ洒落て居てはいかネえ。そして其様跡さりをせずと、たゞ腰で少しこたへる思入をさつしナ。」ツブ「オットかうか。」出且「ア、アいやな尻をするぞ。」アバ「何を其様尻をふらずといわサ。」ツブ「それでも堪へる身をしろといふからヨ。」出且「さう尻をふつては、もりさうなのを堪へるようだア。」アバ「ソラ左の手で、俺が手を拂ふ、ア、いてえぞ、ナゼそんなえにひどくするヨ。」ツブ「堪忍しねえ、どうも乗がくるとツイ。」アバ「ナンノ乗どころか、マダ立ツた許りだ。ソレ腰の手を拂はれたから、左の手を肩へかけて引く。今度はグツト引きかへされた心持ですこし反る

だ。」ツブ「斯うか。」アバ「マアさうヨ。そこでト、ム、そこで胸倉だ。ソレ後から斯う取るわ、とりながらキリ、と引き廻す。こつちへむくダ。エ、さう廻れるものか、こつちへヨ。ヤ、さうむいた。そこで両手で拜みうちに、胸倉をうちおとすだ。」ツブ「どう。」出且「かうヨ。」ツブ「ム、それよりは、かう手をかけて、ヤ、かうねぢるとぢき離れらア。」アバ「アタ、アタ此のべらほう、ほんたうに力を出しやアがるナ。はなすめえと思へばこつちも又斯う取るわ。」ツブ「さうとつてもかまふものか。やつぱりこつちは、ヤ、かうして。」アバ「へん其のくれるナ事ではなすものか。」ツブ「はなさずば又かうやつてはな。」アバ「爪をたつてもいたくねえぞ。」ツブ「そんなら拳固でソレ。」アバ「なんとして雷が鳴つてもはなさねえゾ。」出且「互に金剛力を出していどみあふ。左次 此の手合は何をしてるのだ、アバ公どうするのだ。」アバ「よわい野郎だ、くひつくナ。」左次「コレサいい加減にとちぐるはねえか、ばか、しい。そして立廻りは出来たか。」出且「その立廻りがあのとほりだ。」左次「イヤあの通りぢやアねえ、足下もまた見てる事もねえわ。てんぐにちつと身にしみさつし。」出且「さうだけれどタテを付けるに、とりさへ人もいるめえと思つて見てるた。」左次「コレアバ公もマア放さねえか。」アバ「俺もはなす氣だが、放したらむしり付きさうで、めつたにはなせねえ。」左次「イヤハヤ呆れきつた物だ。コレサ圖武公、オヤ、まつかになつてらア。いいべらほうだ。」出且「あんまり

はなれずば、水でもぶつかけようか。」ツズ「どうだ、サアあやまつたか。」アバ「胸倉をとられて、はなすことも出来ねえくせに、あやまつたかもをかしい。」ツズ「あやまらずば。」左次「エ、いい加減にしねえかといふに、香公笑つて居すと、来てひつばなして下ッし。」ト、やらうく、引き合わせる。「んなるほどハヤつまらねえ所で、悪意地のはつた奴等だ。オヤ／＼圖武公は二ツの鼻の穴では息がし足りねえ様だ、よわい男だ。」ツズ「本氣になれば、直にひつばなすけれど。」出目「ナンノ本氣にならずとものことよ。」アバ「オヤ／＼コレ見てくんナ、手をばらがきにされた、ア、いてえ／＼。」左次「それまで我慢して居ることもねえ、馬鹿々々しい。」アバ「あんまり圖武州のけんまくがおそろしくなつたから、だん／＼氣味がわるくなつて放せなんだ。」出目「圖武公もまたなんだらう、そしてすこし登つたやうだツケ。」ツズ「ナニ暑くもならねえがノ。」ん「ぬるくもなかつたさうで、天窗から湯氣が立つわ。」ツズ「はなさねえでは男がたたねえやうな心もちになつたからヨ。ア、息がはずむわ。香公湯でも水でもくれねえか、氣のきかねえ後見だぞ。」ん「へん腕の捻りツくらに、後見もさるほゝもいるものか。」左次「何とふざけッこなしとして拵へてくれねえか、野呂公はなか／＼出来るぜ。それともそつちで出来るさうもなくば、たのむめえ。」アバ「へん是れしきの立廻りを、出来るも出来ねえもいるものか、ナア圖武公。」ツズ「さうス、ずんどさ、いな内證ごとだ、おかまひなくとまづ／＼二階へ。」左次「どいつらも

屁ッぴりのくせに、口ばかりわる達者だ。」と、いふ處へ 卒人「オイ左次さん／＼、チョット来てくんねえ。稻荷町に何をしてゐるのだ。そつちはどうでもいいわナ、こつちが肝心だア。」ツズ「ナンダト、がうせえ安く取りあつかふナ、コレ金箔のついた。」左次「イイサ／＼、ア、世話のやけた奴等だゾ。そこで衣装だが、翌日では間に合はねえとつまらねえ。上の引拔衣装は、こつちで袷を一枚引ッほどいてこせへすばなるめえ。それは翌日でもいいが、下の狂亂の形は今夜かりて置くがよからう。出目公今度の隠居役に一走りいつて来て下ッし、先で寐てはいかねえぜ。」でめ「オイ／＼いつて来べエ。こつちから来たといつたら、よこすだらうノ。」左次「註もんさへわかると、小僧に背負はせてよこすよ。」また二階 眼七「左次さん／＼、はやく来てくれねえか。モウ少しでまとまる所だ。」左次「オイ／＼より、トいひすて二階へかけ上る。今いくよ。そんなら出目公頼んだよ。アバ公も圖武州も車輪でやらつしヨ。」ト出目助も損料屋へ出てゆく。ツズ「サアやるべエ。」アバ「ム、やるべエはいいが、圖武公タテはチョイ／＼と手先をさはる許りで行ってえもんだ。どうも足下のやうに、むやみに腕をひつ掴んだり、ひつばらつたりしては、あんまり白ッポイ。相手になるものが怪我をするわ。そして大層な爪のはえやうだゾ、七草の儘か、ぢ、むせえ。」ツズ「イイワサ、それだとして、夜夜中爪もとれねえわ。其の心持でおめへの方で氣を付けてくんねえ。」アバ「へん熊と角力を取りはしめえし。」ツズ「ときに斯ういふ手を付けて、野呂松を一番よ

わらせてやりてえ。」アバ「どういふ手だ。」ツブ「マツどうかいふ手つゞきから、雙方行き違つてよろよろと跡すさりをして、背中と背中が當ると、マア爰へ來さつし。後合はせに、ソレかういふ身に、首が打違へになるだらう。」アバ「ム、」ツブ「ソレうしろへ手を出して、おれがあごへ兩手を掛けて、グイト前へこむはすみ、おれがヒヨイト足を上げて、後がへりをして、むかひ合ふといふ手だ。」アバ「ム、コリヤアよからう、しかしさう美味くいくか。」ツブ「おれがすればいくが、野呂松にはおほつかねえ。そこであいつをいぢめてやりてえ。」アバ「ム、いいわえく、ドレひとつやつて見よう。」ツブ「サア、ソレかう背中が當つた。それ手を上げて俺があごへ、さうだく。ソレヒヨイ、ア、わりい、サウ頼馬ぢやアいかねえ。雙方とたんにはずんでヨ。」アバ「よし／＼そんならあごへ手のかゝるが相圖、グットやるぜ。」ツブ「思ひきつてやらつし、あぶなくもなんともねえ。」アバ「がつてんだがつてんだ。」ツブ「ソレ背中があたつた。」アバ「めめた、アヨ、イ、ヤサ。」ト、力まかせに背負ひ上げる圖武けおとしながら、アバ太郎が前へ地響させてどつさり倒れる。香七「ヤア／＼大變々々、大方こんなことだらうと火焼に寐入りぬし子、この音におどろき、ワット泣き出す。香七「ヤア／＼大變々々、大方こんなことだらうと思つた。」アバ「どうしてアノ行燈が落ちたらう。オイ／＼二階から明りを持つて來てくれねえか、いけねえく。」このさわぎゆゑ、皆々のぞき見れば、下は眞暗闇、卒八は三味線を取り、わるいカン所にて、チ、チ、チ、テ、テ、テ、ボオン。左次「エ、古いわく、そんな事より早く明りをやらつし。そしてモウこつちはたいてえ筋は通つたから、跡は翌日の事としよう。」

みんなが下へあゆみねえ。おだるさん早く行きな、坊がどうかしたさうだ。」ト、燭臺をもち皆。左次「どうしたどうした、またとちぐるつたらう、久しいものだ。」のろ「オヤ／＼油だらけだ、コリヤア大變な始末だ。ソレ／＼左次さん、そこは油だヨ、エ、裾を引きはしねえか。」左次「ホイ／＼、いやはや不始末許りするには困るぞ。マア坊をおこしてやらう。オ、いいサ／＼、堪忍しなく。馬鹿おぢいどもには困るノウ。サア／＼こりやア素人では直りさうもねえ、おつかアへ連れて行くがよからう。そしておだるさんも、あんまり遅くなつたらう、眼公おくつて行かッし。」おたる「ナアニコツちに居てはあんじる事ぢやアないよ。」眼「こつちの内をばよく／＼見くびつてゐると見えるノ。アツア、かうも武運につきはてたかチエ。」左次「コレサむだッ口をたゝかすと、早く坊を連れて行かッし。おだるさんおほきに、そんならあした又チヨイトやつておくれ。」おたる「さやうなら、明日ははやアくやりませうネ。」のろ「ぐつと早く四ツ起きたよ。」おたる「オホ、ハイドなたも明日、オ、やかましい子だナウ。」ト、おだるも早。左次「坊は怪我でもしはしねえか。」香何々よつほどはなれて居たから、怪我はしねえが、吃驚したのさ。」卒八「イヤ坊より圖武公がどうかしたぜ。オイ圖武公々々、何、何だと、何をいふかさつぱりわからねえ。」のろ「ホンにわからねえ事をいふわ、中氣にでもなりはしねえか。」卒「アレかむりをふらア、中氣ではねえとよ。」左次「ドレ蠟燭をもつて來さつし。ア、口を

おどろいたから、胸を摩つて居るところだ。」呑「イヤ〜卒八だナ〜。此のべらほうめえ、今まで口をきいて此のせんぎに掛つたら、軒をかきやアがるわ。コレナゼあんないたづらをした。」ト、馬乗りめる。卒「ア、あやまつたく、わざとしたのではねえ、鹿相だヨ〜。」のろ「鹿相だとしてしみ火鉢と間違ひはしめえし、イヤしかしよく似ては居るノ。」呑「そばからあんな事をいふから、猶々ゆるせねえゾ。」左次「イヤ有りやうは俺が吸ひ付けて貰ふト云つて、ツイ火皿から抜けたのだヨ。わる氣ではねえから、堪忍してやらつし。」呑「ムンさうか、そんなら料簡してつかはさう、サウ事がわかればいい。しかし事は分つたが顔はやつぱり熱い。」出目「そのうへ厚くなつたら、面だか踵だか知れめえ。」呑「イヤ面の皮が厚いといへば、菊石屋のヤシヤブシの。」眼七「ヤシヤブシとはなんだ。」呑「ソレ菊石屋の息子よ。」眼七「フンあれか、をかした名だナウ。」呑「仇名だわナ。アノつらを見ねえ、紺屋で遣ふヤシヤブシのやうだぜ。アバ公より九石もつよからう。おまけに所々玉子トヂが有つて、けんほ梨子のおかけで、鼻の穴はちつとばかりたすかつたが、上唇と鼻の先とち付いて、なんでも犀角と角兵衛獅子で、半身上ふるつたといふ面で。」ツ「面のいひたてはてえけえにさつし。俺がつらまで引きごとにならべ立つて、おもしろくもねえ。そして其の面が、イヤつらぢやアねえ、其の息子がどうしたといふのだ。」呑「イヤサその野郎が、つらにも似合はねえやつし形で、馬鹿にの

ろいやつヨ、まるでアバ公さノ。横町の文字焼といふ豊後の師匠にひどくのろけて、おれに取持つてくれるといふ譯だらう。所でおれが事だから、何でも四文と呑込みやした。なれども男は悪いが、アバ公と違つて金満と云ふもんだから、ひよつと慾心で出来ようかと。」アバ「コレ番毎アバ公〜とあんまり安ッほく引きだすなえ、いめましい。」のろ「ハ、、、イヤそりやアいいが。」アバ「ムンニヤよくねえ〜。」のろ「その事ぢやアねえわ、呑公なんト其の一件はおもしれえぜ。思ひれ煽り付けて、おごらせてやらうではねえか。」呑「そこで聞きねえ。それも其の氣だから、文字焼が所へすつとしかけた所が、つひぞ行きもしねえうちだから、なんだか間がわるさうなものだが、さうでねえノ。」卒「ソリヤア其の筈だア、お袋が古狸に、娘が九尾の狐だものを。」呑「狐でもいい、うつちやつて置かつし。」のろ「それから行つてどうしたよ。」呑「そこでお袋めが、いい鹽梅に、呑さんごめんせえ、ちよつと湯へ這入つてまゐります、ゆるりとおあそびと、すつと出て行き、あとはさし向ひとなつたから、是れぞ天の與へと、段々漸をたぐりよせて來た所が、とんだ受けがいいから、彼の息子の事をいひ出すと、オヤあのヤシヤブシとやらの事かえ、わたしは又。トいつて、につこり笑つてゐるから、おめへ誰が事だと思つたといつたら、私やアおまへかと思つたと、おつになつて來たから、おれなら又どうする氣だといふと、おまへならどうともと、バツト顔を赤くしたから流石のおれも、顔が少

しほか／＼としてきた所を、手で撫でると、吹殻をたきつづした物を、びつくりしめえ事か、腹が立つめえ事か。」のろ「コレ今までの夢のはなしか、べらぼうめえ。人にはまじめに挨拶をさせやアがつて、いめえましい。」香「イヤサゆめとは思はねえ。あんまり残りをしてしい。」左次「こつちはまた寔とは思はねえ、夢ならばするぶんありさうな事だ。しかしあんまりたわいのねえ事を、馬鹿長くひつばつたぞ。おもしろくもねえ。」アバ「さうサ、それにしては何といひ天気ぢやアねえか。」のろ「さればサ是れ程の日和に、夕部圖武公が舌を喰ふといふもふしぎサノ。」出目「そりやア舌を喰ふ筈だ、今年江ノ島に開帳が有るものヲ。」卒「だうりで犬がとほほえをすると思つた。」左次「コレてえけえにして湯にでも行つこねえか、朝ッばらからいい馬鹿どもだぞ。」眼七「湯へ這入つたとつて、金時になふものか。」左次「エ、いいかへんにしろえ。イヤハヤどいつもく、牀放れのわりい事だ。夜著を背負つて起きかへつたさまは、お菰が蒲鉾小屋にゐるやうだア。」香七「歌右衛門の香葵下坂二ツ胴、バツタリ。」左次「どうしてさう味くは見えねえ、伊賀越の般若坂でして居らア。サア／＼みんな一所に巢だちだく、ヤレ／＼ふびんや、今朝は圖武州チウの音も出ねえナ、舌はどうだ。ちつとはいいか、しかしひとりづ、も口のへるもよからう。」圖武「チウ／＼夫へ、その位なことは手輕いもんだ。」香「ハ、、、とんだあどけなくつていい、よつほどおもしろえ／＼。」ツア「餘い面白くもくもねえ、

ちえツてえ。」アバ「ハ、、、、いい／＼、有り難え／＼。」ツア「なんの有いがてえ事が有ゆものか。何でも人の悪い事をいふと、嗜ひがやつがゆ。」出目「イヤサ／＼坊はいい子ダヨ、かんにしろかんにしろ。」左次「イヤそれはさておき、なんと二三日飯をくはねえやうな心持だが、腹直しに今朝は雑炊としようではねえか。」眼七「よからう／＼。ろくに飯といふものを食はねえから、お冷がどんと有るからちやうどいい。」香七「奇妙々々、眼公早くやらつし。」眼七「やらしても能く出来たア、おれにこせへさせて食ふ氣か、押しをつええ、香公やつて下ツし。」香「へん此方は座頭株だゾ、平日は兎も角も今日は大切な身分だ、アバ公やらつし。」アバ「此方とても其の通り、立唄立敵兼帯でござる。」左次「どいつもどいつも火が高ぶつて居るから、いけるもんぢやアねえ、そんなら拳でやるがいい。」出目「よからうよからう、狐でいくベエ、みんな一所がいい。一人勝ひとり負は抜けて、のこつた者を三助としよう。しかしひとりでは誰にしても、あんまり可愛さうだから、三助役を二人こせへよう。」卒「よしよしサア三打だよ。」のろ「夫れきたシャン／＼。オヤ左次さんナゼ見てゐる。」左次「なんのおれはせすといいわ、此の家の主だものを。」のろ「なに／＼あるじでも内痔でも用捨はねえ、ひつ遣ウ／＼。」左次「へんかけまの夜鷹ぢやアあるめえし。」眼七「あんまりあるじ／＼と内びらをきると、居さふらふに居てやらねえからイヤ。」香「サア手を上げた／＼。」左次「なさけねえやつらだなア、よし／＼サア

「こい。アイヨ／＼ヨンヤサ。まて／＼、ヤア／＼卒八眼七が鐵砲で、あとはのこらす名主、ヤ奇妙妙。」アバ御苦勞ながらふたり六助どん、早く頼むヨ。」のろサア／＼こつちはお風呂へ召して來ようナア呑公。」出目「みんなが行つてくるうちこせへておかつし。一人はこゝへ來てお床をあけろヨ、へんいい心もちだナ。」これよりみな／＼すてせりふにて楊枝をくはへ、眼七「いま／＼しいめに逢ふナア。」卒「コレ見さつし、牀もあけずに行きやアがつた。」ト、小言たら／＼手水をつかひ、卒八は牀をあげ、けえ氣ナもえねえ眞木だぞ、ヅア生木ださうで煙ッて許り居るわ。なんと味噌をするも面倒だから、醬油で水雞炊とやらかさう、菜も少しあるし。」卒「猶奇妙だ、あつさりしていいもんだ。それとも悪いといふやつは、食はせねえ許りだ。」眼七「ちけへねえ。そこで、鯉節をどつさりかいてくだつし、したちは此の位でよからうノ。」卒「ドレもうちつとたんとでもいい、雜炊はうすいのがいい。オットよからう／＼。」眼七「イヤモウ此の眞木にはこまるぞ、又いぶりだしたわ。此の又火吹竹はなんだから、さつぱり役にたたねえ。大家様と違つて、吹竹の尻の穴は、なりたけ小さいがいい物だ。オ、ウいぶるぞ／＼。」卒「菜をきるベエ、こりやア洗ッて有るノ、よし／＼。アツア手鍋さけたり水仕業、ア浮世ぢやナア。此のうしろはおつな合方へ礎を入れて貰ひてえ。」眼七「このうしろなら總雪隠がある許りだ。それにしても大層いぶる事だぞ。もう飯を入れてもよからう、オ、いぶい／＼。」ト、顔を

がら鍋蓋をとり、飯を眼七「卒公此のくれるなゆるさでよからうか。」眼七「ム、よからう／＼。ア、ソレツレ水ツ鼻が、ア、あぶねえ／＼。」オット眼七はす／＼りこめども開にあはず、卒「ヤア大變々々、ことこはしをやつたぜ。」眼七「己もす、つたけれど間に合はなんだ。」卒「す、らすと手のか、とで撫で上げればいいに。」眼七「さうやればよかつたが、其の期に及んでは、どうも當意即妙とはいかねえもんだ、おれもまだ水ツばなの方は素人だ。イイどうするものか仕方がねえ、見ぬ事清しだア。折角こせへて、是れしきの事で捨てられもしねえ。」卒「あんまり是れしきな事もねえぜ。そして見ぬことなら清しにもせうが、見た事はどうしてもきたなしにちけへねえ。」眼七「ナニその氣で脇の方を食はつしナ、そつと盛ればいい。」卒「わきがいいか中が能いか知れるものか。」眼七「それもさうさノ。かういふ時は青ツばなだと、かたまつてゐるから有家が知れていいけれど。」卒「ゲエイ／＼、おらア食はねえゾ／＼。ゲツ／＼。」眼七「そんねえに、きたながつてくれる事アねえ、頼もしくねえ男だ。」卒「ばかな事をいふ、頼もしいの頼もしく無えのといふ譯ぢやアねえ、蟲がきらふのだから仕方がねえ。無盡の斷りでも云ヤアしめえし。」眼七「それでも飯をみんな入れて仕まつたから茶漬とはいかねえぞ。」卒「どうするものか仕方がねえ、干死ねばとつて夫りやア食へねえ。」眼七「足下は食はずはいいけれど、みんなに沙汰なしだよ。」卒「知れた事よ。そりアいいが、眼公紙を一枚くだつし、お下屋敷へ御幸がある。」

眼七「おとしがみなら火鉢のひきだしだ。」 卒「オット有馬山。」 ト、雪隠へかけこみ、しばらく有つて出てきたり、 手水鉢にて手をあらひながら「オヤ爰のうちは手拭かけずだの、眼公ちよつと借して下ツし。」 眼七「オイ袂に有る、ソレだしな。」 卒「鍋をおろしたの、何だ中をのぞいて居るの。」 ト、いひながら、眼七が袂へ手を入れる。眼七「エ、コレサ手水の雫が這入るわ。」 卒八はうるたへ、 眼七が袂より鼻紙ととも手 時、手をあらひし雫を鍋の中へポタリ。 眼七「エ、ぬかなはぬ。」 卒「何の蓋を取つて置くから悪い。中を見て居たとつてはじまらね事だのに、段々つみをおもくしたア。どうせこつちは食はねえ氣だからかまひはしねえが。」 眼七「それだつて食物の上へ濡手を出す事もねえ。」 卒「こつちは食物とは思はねえ、くへねえ物だと思つたからヨ。是れがほんの手水の手から水がもつたのだ。」 眼七「イヤ水ツばなのうちは俺も食ふ氣であつたが、跡二味の調合で、ぐつと食がす、まなくなつた。」 卒「おまけに鼻紙も、三四度もお役をつとめたやつだ。ならばに袂くそなぞも少々、是れをくへば、がうぎなきほひだ。」 眼七「むかし幡隨院長兵衛なぞは食つたさうだ。」 卒「幡隨院長兵衛でも、誓願寺半兵衛でも、是れ許りは食へめえ。ア、ゲツ／＼。」 眼七「おれもをかしくゲエイ。モウ／＼二人は喰ひツこなしときめよう。ア、引ゲエ／＼。」 ト、兩人は胸をわるくなみな湯あがり のらア、引い湯であつた。コレ／＼お茶をくまねえか、氣のきかねえ三助どもだ。」 眼七「まだ茶が出来るものか。」 左次「ナンダまだ茶もこせへねえのか、ばか／＼しい、なにをして居た

のだ。」 眼七「何をしてゐるものか、雑炊を拵へてゐたのよ、さういちどに兩方出来るものか。」 出且「兩方だつて、別に手間のいることでは有るめえし、茶釜と兩方火を焚けばいいに、イヤモウいつかうなトンチキだゾ。」 眼七「夫れに眞木が生で、一處さへいぶつて許りゐて、やう／＼焚いたものを、いわさちつと待たつし。ぢきに涌く。」 ト、又火を焚 卒「いやはや不始末な事だゾ。二人が／＼ナゼさう氣が利かねえナウ。」 左次「アノわくうち待つてゐると、雑炊がかたまつて仕舞ふだらう、マアやつつけよう。其のうちすこしは湯もぬるむだらう。」 卒「さう／＼、さめてはいかねえやつだ。アノ手ぎはでは、どんなこせへやうをしたかと、蓋をとりやア、水雑炊とやつたナ。出来た／＼。」 アバ「そいつはおつに氣どつたわえ、妙々。中へなにを入れた。」 眼七「エ、中へか。エ、菜とエ。」 卒八と合は「菜許りだつけノ。」 卒「さうサ、マア菜許りのやうなものサ。」 左次「なんのこつた、様なものをかしい。サア／＼眼公盛り出さねえか、エ、七めんだうだ、てん／＼に手盛とやれ／＼。」 アバ「アア妙々妙鹽梅だ、うめえ／＼。」 卒「おやア、舌へ染みて熱いものは少々難儀だ。」 卒「どうだ、皆がうめえか。ヤレ／＼ゲエイ、鹽加減はどうだ。ゲツ／＼。」 左次「なんだ。人の物を喰ふそばで、ゲイと小ぎたねえ男だ。」 卒「へん、ゲイぐらゐるがきたなくつて、よく雑炊を喰ふぞ。」 左次「さふするが何できたねえものか。眼公も卒公もナゼくはねえ。」 眼七「イヤ／＼大嫌ひだ。人の喰ふのを見ても

胸がわりい。」のろ「ナゼ又そのやうにきたながるだらう、をかしいナウ。」アバ「ナニサこしらへながら、みづツ鼻をたらし込んだとよ。」眼七「コウ／＼だれか見て居たさうだ。」と、卒八が「アバ」これほんたうに水ツ鼻を落したか。おらアじやうだんにいつたら、チキ白状におよんだ。ヤア／＼とんだ物を食はせた。ゲエイ／＼。」のろ「いやはやとんだやつらだ、是れはたまらねえ。ゲア／＼胸が、ア、どうもベツ／＼。だれだ眼公か卒八か。」出め「どつちにしてもきたねえにちけへねえ。ゲツ、ア、たまらねえたまらねえ。」眼七「有様は俺がたらしこんだけけど、夫れより卒公は、又雪隠へ行つて手を洗つた雫をたらしこんだから、實にきたねえ事はきたねえのよ。」左次「ヤア／＼大變な事をいふ。道理でうぬらは喰はねえ、いま／＼しいやつらだ。オ、きたねえぞ。ゲツ／＼。」アバ「聞けばきくほど胸が、ア、ゲエイム、ベツ／＼。」吞「なる程だうりで、鹽がちと辛くつて、おつな匂ひがすると思つた。ゲツ／＼。」卒「ハ、アその匂ひは眼公が鼻紙の匂ひだ。すきけへしだからくせえ筈だ。」左次「エエエ、はなつかみまで入れたか、そりやア又どうして入れた、イヤ／＼聞くめえ／＼。もう／＼なんにも言はずに居てくれろ、聞けばきく程、ゲツ。胸がア、ム、ゲロ／＼／＼。」是れにつゞいて總座中さわぎとなる。此のうちいろ／＼をかき思入草稿あれども、丁敷かぎりあれば、左次「サアだれぞ駒形へ行つつとはしをる。暫くあつてやう／＼静まり、腹直しの酒にてみな／＼氣色を直し、左次「サアだれぞ駒形へ行つて、船をこせへておくがよからう。」出目「さう／＼しゆんはづれだから、すぐにといふ譯には行くめ

え。」アバ「さうよ役者の外は先へ行くがいい。そして船宿もその味ひを知らずではいかねえから、船頭にすつぱり相圖をのみこませて置くがいい。サア／＼早く行つたり／＼。」左次「のろ公は此の給を裏のおばさんの處へ持つていつて、引抜のあんばいをよく教へて頼まつし。そして船には婦人がなくつてはつまらねえから、おだるさんを頼んで連れて行かう。今日はおれも假成に弾けさうだけれど、二挺だとなほいい。」卒「所作の方はたいがい夕きまつたから、もう稽古はいいとして、はやく出かけよう。」のろ「アバ公との立廻りはどうだらう。」左次「イヤ／＼これはモウなしがよからう。なま中岡で立廻りらしい事があつては、見物にかんが付いてわるからう。」ツブ「其のタテが貰ひになつては、己が骨折がむだになゆナ。いま／＼敷イ、舌をくつたも犬死だ。」左次「ハ、ハ、ハ、違へねえ／＼。サア／＼船宿へ行くものは早く出ねえか。眼公おだるさんを頼んで來さつし。」ト、それ／＼に手配をさとのひければ、皆々ぬけぬけに出てゆく。

大江戸の名所多きその中に、月雪花の絶景を兼ね備へたる隅田川、實にや賑ふ花見月、歌人雅人はいふもさら、親の代より仕出したる、伊勢屋の亭主出ぎらひの、内田の女房かしの嫁、鬼を留守居に命のせんたく、かせぎ男も繰女も、花にうかる、其の人に、またうかされて出る人と、羣れつどひたる隅田堤、崩る、許りの人足は、蟻の往來にことならず。彼の催しの人々は、かねて期したる手わ

けの通り、アバ太郎は侍のこしらへ、呑七出目助兩人は後見の心にて、そこ爰とぶらついて居る。出目「オイ、呑公見さつし、うつくしい。ハ、ア奥様はおひろひだナ。」呑「ほんにこりやア綺麗だ、イヤ大層な女中だナア。奥様は日傘でかこつてさつぱり見せねえわ。おだいじのものが、御無心ながらちつと見せて下さればいいナ。」眼「取り巻いてゐるのは、どれも一粒えりだ。アツア、り、しいもんだ。なるほど、

人は武士なぜ傾城にいやがられ

といふ川柳があるけれど、女は武家方の事だ。どうもさつぱりしていい。」呑「そのさつぱりといふやつが、やつぱりこつちがさつぱりしねえからの事だヨ。奥女中といふと、何か不自由らしいから格別しんかうがあるのだ。ア、どれも中肉で、しる澤山らしい代物だ。」眼「さうよ此の椎茸からはさぞいいだしの出る事だらう。サア、あの方方はチトむづかしいぜ。こりや突きこみに買ふと損をするぜえ。だいぶ落が見えて来た。オヤ、これ、申し尾上様、あのいぢわるいお局のといふ形だ。」呑「うさアねえ、右と左で二人づ、遣ふといふ人形だナ。ハ、ア秋葉がお小休みと見えるわえ。イヤそれはさうト、アバ公はどつちへ行つた。」眼「今みめぐりの茶屋に見えたが、野呂松はどこをうろついて居るだらう。全體こゝらまで、一所に來ようといつたに、先へ來てしまつた。」呑「何サのろ



公もあの形で、道々なぶられるをせつながつてよ。」眼「さうさ淺草の通りから、氣違にされてもつからうナア。」呑「イヤ今日の催しはきつとはねるだらう。のろまめえうまく案じたヨ。」眼「さうよア、しかし氣狂のうちがよほどつらいぜ。あんまり色氣がねえナア。」呑「どつちしてもねえ色氣だからやけでいい。イヤほんに此のやうに來てはあんまり來過ぎるだらう。奥様にひかれてツイ、うかうか來た。」眼「マダ、早い。もう少しついて行つたら、奥様にあはれる事も有らう。」呑「何の見た所がギヤマンの船だ、ばか、しい。歸つてアバ公と一所に茶でも呑まう。」ト、又みめぐりへ立ち戻り「ひ、呑イヤ是れは、アバの進さましばらく。」アバ「ム、呑七か、ハア出目助も同道ぢやナ。コリヤ手前達も花見か。」出目「へい左様でござります。あなた様もお花見にいらつしやりましたか。成程此の節は、蝨さへそろく、這ひ出しますから、御尤もでござります。」アバ「コリヤわいら武士を嘲笑しをるな。」呑「イエどういたしまして、武士はてうろうにはなりません。どうか致すと禪宗の坊主などがなるさうでござります。勿論昔軍の有つた時分、ひやうらうは遣ひましたさうだが。」出目「しかし只今でも、あなたが楽しく遊びますと、浪々にはなりません、兎角勞の字が付いてはむづかしいと醫者も申しました。」アバ「イヤこいつらは重々の過言、最早聞き捨てならん。」ト、刀へそりを打ちアバ太郎をおさへ、婆「マア、御料簡なさつて下さりまし。コレおまへがたとんだ人だ。お侍様

に向ッてぶしつけな事ばかりいはッしやる。そんな人は爰へは置かれねえ。はやく出てゆかッせえ。」
 吞「行かッせえたアなんだ、此のば、めえ。お客様だぞ。」 婆「ホンニ其の様なお客様はいりましねえ、
 商賣の邪魔になる。早くそッちへ行かッせえ。」 吐「外の方へ 出目「ハ、ハ、ハ、コレサバアさんこは
 がる事はねえ。じやうだんだよく。是れいい加減にりきまつしなアバ公。」 ば「アうるたへて卒八が口
 引きずり 婆「是れお前方氣でも違ひはしねえか、じやうだんも事による。腹をたつてござる所へ、又い
 も顔の旦那へ向つて、アバ公なんぞと言つてたまるものか。そらほど喧嘩がしたくば、脇へ行つてし
 て貰ひませう。爰ではめいわくだ。」 吐「吞七を突き飛ばし、又立ち 出目「是れサバアさんや、じやうだん
 だヨ、洒落だといふに。」 婆「イヤ、くわるいしやれだ。なんにしろ爰ではけんのだ。わきへ行つて
 休みなせえ。」 卒「こりやアどうもならねえぞ、コレアバ公いかけんに解けねえか、いつまでりきん
 で居るのだ。困りきるわナ。」 アバ「コリヤ、婆アかまふなく、兩人とも覺悟しやれ。」 吐「立ち上
 アは眞青 婆「モシ、旦那さま、六十になります婆アが、是れ手を合はせて拜みます、どうぞ御料簡
 遊ばして下さりまし。爰でもしもの事が有りますと、今日から商賣を休まねばなりません。ハイ一年
 に一度の花の三月でござります。」 アバ「いかさまナ、ア、料簡のならぬ奴なれど、血をあやなさば社
 參のけがれ、助けにくい奴なれど、茶屋の婆アに免じ、命許りはたすけてくれう。ア、命冥加なうず

蟲めら、以後きつと憤み居れ。」 吞「ム、ンあの面を見さつし、しかし時平氣どりにはいいい面だナア。
 しかしば、が忠義とはなんの事だらう、あんまり文盲でをかしい。此の茶屋が松ノ尾とでも云ふとう
 めえナ。」 出目「ム、そして此のばアさんが、中氣病だと猶いいわ。松ノ尾が中氣に免じとぢぐるわ。」
 婆「イヤサ何でもうちやつて置きなせえ。おれが命乞ひをしたから、早くそつちへ逃げなせえ。ア
 アひつっこい人達だ。」 吐「又立ちか、ッ押し出せば、往來繁き隅田堤、たちまち數多人立ち 吞「いめまし
 い婆アだナア。そしてあの野郎奴エ風竝のいい事だから、やみとりきみちらして、たうとうまじめに
 仕通しやアがつた。」 出目「ハ、ハ、ハ、洒落がかうじた物狂ひといふめに逢つたナア。しかし仕組んだ
 事よりうまく出来たぜ。おらが番にはかういふ筋に書くべエ、手輕くつてとんだいい。」 吞「さうよ此
 の位ひツかつけば澤山だ。是れへちよいとした落をつければやんやだ。なんと追ひ出さればなしもあ
 んまりくやしい。船へ行つて一陶下けて来て、二人で隣の茶屋へ這入つてぐいぐい香んで、アバのや
 らうに氣を悪くさせてやらうではねえか。」 出目「イヤ、そんな事をいふと、左次さんが又小言だ。
 それよりのろ松はどこをうろついて居るだらう。もう出てくればいい、はじめてもいい時分だに、秋
 葉の方へ行つて尋ねて見よう。」 吐「兩人は秋葉道へ志し境内に至り見れば、玉垣のあたり大勢人立ちして集まり
 侍中開つき添ひてゐるを見て 出目「ヤア、く、ひどい目に逢つてゐるぜ。」 吞「さうよ、どういふ理窟か知

らねえが、よもや盗人もしくはしめえ。何もあんなえに繩をかけることはねえ。なんのダ折助どもた、きなくつて連れて行くべえ。」出目「とんだ事をいふ、先は武家方だア。めつたな事をしてこつちまで天井見ちやアつまらねえ。たしかに悪ふざけでもしたらう。慮外者なら手打にされても仕方がねえ。アバ公の侍とはちがふわ、マヅ譯を聞いて見よう。」ト、人をわけて 出目「モシ、此の者は私共見知りませんでしたものでござりますが、どういふ事で此の様にしばつて置くのでござります。」侍「貴様達此の者のつれか。」香「イエ連と申すでござりませんが、一體亂心致してをります故、何ぞ御慮外でも致しましたなら、幾重にも御料簡なさつて遣はさりますし。」侍「成程亂心の體ぢやらう。」香「左様でござります。面にも似合はぬ色氣違で。」侍「成程色氣ぢがひでも有らう。見らる、通り御前様のお供先で、お附の女中達へすりついたり追ひ廻したり、いやはや以ての外尾籠がましき狼藉に及び、すでに切り捨てにもなるべき所、御前様のお詞がかつて、追ひはらへども、お言葉にあまへて猶々この邊へ立ちさはり、甚だ御遊山のさまたけに相成るゆゑ、お慈悲を以て此の通り、しばらく上げて置くぢや。」出目「へエ、それははや不埒千萬な奴でござります。さりながら氣違の事ゆゑ、どうぞお許しなさつて遣はさりますし。」侍「イヤサ此方ゆるす心なれども、繩をとくとまた女中方へ狼藉に及ぶゆゑ、是非なくお歸りまでは番をいたしてをる。此方も迷惑至極ぢや。」香「御尤もでござります。しかし是

れからは私共が引きとりますからは、けしておじやまはさせませぬ故、どうぞ御許し下さいまし。」ト、兩人ひたすら詫げければ、餅についたるやつかいもの、引き取り人こそ幸ひ 香「ナゼ又わるひつこくふざけと繩をとく兩人へわたせば、そこへ挨拶してわかれる。吞七は小聲にて 出目「あら、そこは好きの道、畜たらう。」の「あんまり美しいやつが、わやくとそやしたてやアがつたから、そこは好きの道、畜生の淺ましきには、ツイヒツこくなるのよ。それに又親父の侍めがひどくむくつて刀へ手をかけたから、こいつたまらぬと逃げ出すと、聞きねえ。奥方はるかに御覽有つて、ひかへい〜とお差留め遊ばして、ア、綺麗ナ男ぢやが亂心と見える、不便なことぢや、随分いたはつて遣はせといはれた時は、有り難くつてうれしくつて、ちりけ元からちは〜と總身がとけるかと思つた。」香「さうすると縛られたのだナ。ごぶさらしナ。そして亂心と見えるとは言つたらうが、何きれいな男だといふものか、おほかたきらひな男といつたのだらう。」出目「何といつたつてはじまらねえ詮議だ。サア〜遅くなつた。いい鹽梅に人がついたから早く行かッし、船は今川丸ダヨ、間違へめえゼ。」の「合點だ合點だ。」ト、是れより出目助吞七は少し引き下り、のろ松はさま〜のそらごとをしゃべりちらし、早足に堤へも、土手の真中に立ち出でて、来るを遅しと待ちかける。出目助吞七は最早岡には用の「蝶々徐かに差しこめアなしとかけぬけ、船へ來つて相圖をする。往來の人はそりや氣違ぢやと集まり寄る。の「蝶々徐かに差しこめア差しこめア、だんほさんや〜。」ト、程よき場所へ來り、腰につけたる古草鞋をアバ太郎に打ち付けたら、うかくるとふり廻す。後へ黄八丈に七ツ襟の小袖緋ごろの帯をメめ、朱の二重緒雪駄を 大若衆「イヤこの野郎めが。」はき、耳にタコのある大若衆うつかり來かゝる横顔へ、彼の古草鞋をポント當てれば

安波太郎様

卒八郎様

圖武六様

香七様

出目助様

野呂松様

もし御不參の御方は、今日到來致し候宮戸川五升
呑みそこなひ被レ申べく候いぢきたな御連の御事
ゆゑ、御恨み不レ被レ成候様爲レ念申し入れ候。

眼 七

萬歳の才若がとのさまもお好き、おくさまもお好きと云つて腹を抱へさせしは、いにしへより初春
のをかしき限りなりとて、佐保姫も雪どけに山の笑ひしとか。夫れはともあれ滑稽は世におこなはれ
てどなたもお好き、人面樹の花もわらへばこそ落をとらせし姿見が古人大谷道外に妙を得手ものは瀧
亭が口癖なり。かの八笑人が花見の趣向も煙草休みの三編目、また相かはらず石部金吉願をはづして
にこくと笑ふ門には福來る、差合のなき洒落まじりを おや子笑ひましよ作ごとし。

二代目そま人門人

駒

人

誌

花 八 笑 人 三 編 上 冊

初編目次兩國川催涼蓮池之會合

春過ぎて夏來にけらしきのふまで、笑ひし山の時鳥、四季節々の季違ひは、彼の本丁庵の戯れに、
春 はる 過 す ぎ て 夏 なつ 來 き に け ら し きの ぶ ま で、 笑 わら ひ し 山 やま の 時 鳥 ときすず、 四 季 しき 節 々 せうせう の 季 違 ちが ひ は、 彼 か の 本 丁 庵 ほんぢやうあん の 戯 たは れ に、

と、諺字盡しのおそならずとは知りつ、も、呑み明し遊び續けし八笑人、かの座頭の左次郎は、世聞
晴れたる樂隠居、元より人目忍ばずの、池の邊の呑み會所、青葉涼しき夏木立、朝貌さへも我儘に、
這ひわたりたる庵の戸、表の方より足音は、序文に記せし廻状の、招きに集まるなまけ連中、打ち
揃うたる六人連、先に立つたる安波太郎、あは「ハイお頼み申します、左次郎様は御在宿でござります
か。先刻はお使を下さりましたが、それに付き安波太郎、卒八、圖武六、呑七、出目助、野呂松、打
ち揃ひまして參上仕りました。此の段宜しくお取次お願ひ申します。」初編よりしてつきの居候やら
御主人やら、とりきまりなきが、眼へいゝこれはくお見ぐるしいお顔ばかり、お揃ひなされまして
七が、えてにほかけて走り出で、
悪うこそ御入來、まづくあれへお通りなされまし。イヤ一寸お斷り申し上げますが、只今申したま

づまづは、文字には味くないと申す心の、まづ／＼を書きます様にござります。その思召しであれへお通り下されまし。」あは「これは／＼御丁寧の御挨拶で痒み出でます。斯様申したばかりでは、ほんくら様方には分り兼ねませうが、かゆみ出でるとは痛み入るの裏がへしたのでござります。」眼「へいへいなる程いはれを聞けば股くゞります。これもかんしんと申すこととござりますが、チト古いから土用じん仕ります。是れも則ちかんしんの代りてござります。」あは「イヤもういいかけんに致しませう、面倒に相成りました。サアどなたも上りませう。」卒八「さやう／＼かやうなとんちきは、いつまでも負けぬ氣になつて、こじつけますものでござります。サアあなたお先へ。」のろ松「イエまづ／＼あなた。」卒八「いかさまあまりおじぎ致すはかへつて無禮、しからばお先へ。」吞七「イエだれもしかりはいたしませぬが。」などと互にしゃべるむだくちの、わからぬことをならべたて、這入口にてや、暫くがん七る。左次「これ／＼眼七、くわん化ことならお断り申さつせえ。ア、ひつつこい俗願人だ。物もらひもあんまりひつつこいと猶やる氣がねえ。」眼七「トいつて、ひつつこくねえとやらずに仕まふし、どつちしても、遣るのはおきらひでござりませう。」あは「イヤ主御在宿さうな、皆様直にあれへ参じやせう。」卒八「いかさま取次の顔色が餘りきたない面てござりますゆゑ。」のろ「左様々々、それに口中がわるくさいゆゑ、應對いたすが甚だ難澁、とんと糞取とつかみ合ふやうでござりますテ。」圖武六「成程、

あなたはよくお心づかれた。わたくしは又何のにほひかと存じた。胸がむか／＼致して、是れへ参つた許りでむかひ氣が参つて、歸らうとぞんじました。」左次郎「コレ眼七、でへぶへこんで居るがどうしたのだ。」眼七「へこむ氣はござりませんが、あなた方の狐臭が目口へ染みて、ぐうともすうとも言はれませんか。わたくしはモウ引込みませう。」卒八「ヤレ／＼嬉しや。取次の者があちらを向きましたから、此のうち早くお上りなさい。とても筒先へは向はれません。」あは「マジ／＼あなた。」卒八「ササおかまひなく。」あは「しからば。」ト、何かしかつべらしのろ「扱はや其の後は、うち絶えまして、まことに御無音、何か當年は格別の大暑にて、嗚々御心配の段恐れ入り奉ります。」左次「これは／＼ようこそその御入來。仰せの通り舊冬から見ますれば、殊の外おあつうござります。」あは「わたくし事も、御無沙汰致しましたが、御存じのとほり婦人の儀に付きまして、毎度寸暇を得ませず、存じながら、ハ、ハ、ハ、扱殊の外、きびしい餘寒でござりますナ。」左次「左様でござります、寔に蒸し／＼と寒じます。」圖武六「この餘寒にはよほど水が這入りませう。」出目「いかさまイヤ近年は餘寒になりました、しのぎ兼ねますテ。」吞七「なる程あなたなぞのおつむりは、蠅がとまつて迂り墮ちますほどの、よかんでござりますから、サゾひえますでござりませう。」あは「イヤ時に用事も申さずに、此様な事ばかり申しますも、ほんの餘寒の仕事で、サゾおよかんましようござりませう。」のろ「さやう／＼、最早用

談を申しましたも餘寒らうとぞんじます故、先づわたくしから發言致しませう。扱今朝は御使、御廻
 状の趣、委細承知仕り、今晚わざ／＼參上のしるし、交魚少々お目に掛けます。先づ是れは鱒で
 ござります。ト、おいらんの「殊のほかあちはよいト、申す事でござりますが、又中には蛸だとも申し
 ます。」左次「ハ、ア成程、これは一しほ賞翫いたします。」野呂「そこで鱸を一本さし上げませうとぞ
 んじて、今朝とり寄せまして生洲へ活けておきました所が、あまり生洲を掃除致して、水をかへまし
 たら、濁りがなくなりまして。」ト、花かんざしの「すゝきに成つて仕舞ひました。」左次「ハ、ハ、ハ、是
 れは是れは、いろ／＼御丁寧に。」野呂「扱あはびを一杯差し上げます。」ト、手あそびのつりがねト同じく
 「此の提灯に鐘を蛇と申しまする譯は、片重いと申す事でござります。」左次「イヤ何よりの好物、さ
 いはひ今日は精進日ゆゑ、早速庖丁いたしませう。」又吞七入りかはり同じ 吞七「へいわたくしは今朝よん
 所なき遊び用で他行致したゆゑ、さすがの私も宿にも居ず、在宿もいたしません所へ、御使だと申す
 事で、歸り／＼宿で申しますには、池の端さまで開帳が始まりますさうだと申しますゆゑ、廻状の
 間違とは心づかず、それはさいはひ、私家に先祖大食亂、小もたれの代より、つたはりましたあり
 がたい寶物がござりますゆゑ、靈寶場へお貸し申しませうとぞんじて持參致しました。」ト、駒形の内田
 「これは宮戸川より出現しましたる所の酒無理如來の尊像、生得大酒にして、一樽愛する輩は、

博突賽難けんのを、のがれ苦勞不知、又辨當兩役を守らせ給ふとの御誓願なれば、いかう酔つて五
 杯上りませう。」眼七「イヨ／＼とんだ靈寶奇妙々々。」入りかはり 圖武「へい私は五蠅帳をお買ひなされ
 たと聞き違ひましたゆゑ、その中へおたくはへの品を少々さし上げようとぞんじて、則ちこれへ持參
 致しました。」ト、女達摩の畫「へい是れがまづ、座禪○豆でござります。」又茶見世の女繪「是れは納豆で
 ござります。ト申す譯は去るお寺さまの、嘆めものだと申す事でござります。」左次「是れはよく慣れ
 た様子で味さうに見えます。」圖武「さて此の繪はチト龜相な出来ではござりまするが、田舎狂言の無
 間の鐘の圖でござります。是れが則ち梅がえ田夫でござります。」左次「ハ、ア是れは御自畫と見えま
 す、一しほ賞翫いたします。」圖武「そこでこれは、ちと時代な繪で、清盛の妾で、貞女を捨てて貞女
 を立てたを自慢の常磐味噌、そばに今若、乙若、牛若の數の子もそへてあげます。」左次「是れは／＼
 色々の好物、有り難うござります。」又卒八入りかはり手あ 卒「へい私は又なんの料簡もなく、唯こなた
 で一ツ食べようとぞんじまして、煮肴を一種、持參致しましたが、ちと荷が張りましたゆゑ、車を一
 輛雇つて參じました。先づ車ついで手に爰らをチト片附けませう。」ト、車力の思入にて鉢巻「ハイ此の繪
 は圖武六さんから、池の端までかネ。」ト、彼の景物の畫「おふだアソウ、そこだアエ、ウ、／＼、ハ
 イ是れへ揚げて置きます。オイこの宮戸川の樽は、左次郎様までかネ、ハイ／＼かしこまりました。

イヤどつこいな。ア、ム、だア、そこだア、うんたア、へイ駒形の内田からさんじました。判取は歸りにお寄り申しますから付けて置いて下さりまし。ア、忙がしいぞ。アイ此の花魁は深川へ鞍替かネ、ハア身請かえ。そりやア妙だ。酒手は駈りだらう、ア、ウ、だアそこだア。吞七「イヤ是れはけしからん、さうぐしい事だぞ。」眼七「しかし能くお似合ひなりました。アイ番頭さん車力を壹貫壹文下さいましといふ身だネ。」左次「東西々々。」卒八「オイ此の鐘は西村から道成寺さままでかネ。ホイ小附に小田原提灯か、これは通りみちだから、與一兵衛さんの所へとけるのかえ、かしこまりやした。ハアム、だア、そこだア。ヤレ、草臥れたく、是れでまつみんな片付けた。」ト座にな「へい左様なら、おやくそくの鉢着をさし上げます。」ト、今の車「へい是れが方々の煮つけでござります。」アバ「ヤレモくさうぐしい、につけだつけ。扱はやわたくしは、チト餘り手前勝手のやうではござりますれど、據なく皆様へ、お憑み申したい事がござりまするが、今日是れへ出ます節、衣類を著換へようとぞんじたところが、彼の吉原の心底方より、まるった玉章をツイ取り落しまして、山の神に取り上げられました。サア八里半だと、二ツ割にいたさうとまうす角を、二本揃へてはやし、大嫉妬トなりまして、未だ封も切りませぬ文を、此のやうにすたくに破られました。彼の心底も折角人目をしのんで、丹誠いたし認めましたものを、むざと捨てるも餘り不便でござりまする故、引きちらしましたを、少々拾ひ集めてさんじましたが、どうぞ皆様、御工夫なさつてお読みわけ下さりますやうに相願ひます。」眼七「イヤ是れは珍らしい事が出来致しました。成程あなた杯へ女の文の参る事はない事ゆる御不得手だらう。どうも馴れぬ事は、よめ兼ねるものでござりまする。随分事慣れました私ども故、讀んでは上げませうが、餘り手ひどいおたれなさり方ではござれば、何ぞ受賃がなければどうも。」アバ「それは勿論の事、いづれ濡事師は、水金は遣ひうちの事、頼といとひはござりませぬ。文言さへわかりますれば、受賃は上げます。」左次「左様なら是れへ遣はされ。」アバ「へい、コレごらうじまし、なさけなく引き裂きまして。分明りますれば宜うござりまするが、先づそれへおわたし申ませう。」左次「ドレ、ハ、ア成程、天地紅で、イヤどうも艶なるものでござりまする。フンなんだ、神かけねがひあけか。」アバ「へいわかりました、神かけねがふと申すには、しほりばなしの切でもござりまするまいから、あつさりと稻元結になさりました。」ト、稻元結左次「扱と、なんだハ、アこがれをりなり。」アバ「へいこがれをりと申すお禮には、浅妻船の畫をさし上げませう。」左次「イヨおもしろしく。サア是れはしみぐじれったか、へんうまいナ。」アバ「しみじみじれったか。」ト、硯墨「よく摺つてお書きなさい。」眼七「オヤ是れは紙が違つて居るが、フン一ツ百六拾四文酒五合三拾貳文味噌二十八文みりん一合、オヤ、こりやア酒屋の書出だぜ。」アバ「ハ

ハア成程内田の書出だ。なんでも掴み合つて、鼻アに半分より餘けい取り上げられましたを、やうやう残りを集めて参りましたから、中へまぎれ込みましたと見える。是れはおはづかしいものを、お目に掛けました。」眼七「モシこれには受賃なしかネ。」アバ「へいこれはチト受賃を出す程の事もござりませんがエ、儘よ、たしかメは三百五六十でござりましたが。」ト、をさめ太「一本あけるから、すつぱり拂つておくんせえ。」左次「ハ、ハ、ハ、奇妙々々。サア是れはなんだ、わらぬ筆と、ハ、アまの字が破れたやつだ。ム、廻らぬふでゆゑ、よしなに御よみわけだ。」アバ「オット廻らぬ筆なら、此のぶん廻しへおはめなさい。自由に廻ります。そこでもうなしかね。」眼七「イヤまだ爰に一切ありやす。くれぐれ御違へなう御いで程、ひとへに。」アバ「くれぐれ相違なく御出でなれば。」ト、手あそびの「先づこいらでござりませう。併したまさか書中に、出ます事もござりますが、それは灸の用事でござります。」眼七「イヨ受賃の御趣向、請けましたわえ。サア出目助様、おまへの番だ、早く御趣向うけたまはりたいネ。」出目「どう致して御ぞんじの愚案の私、とても趣向も五かうもござりませぬ。寔に一ツこなもので、唯人さまのを二こくと致して、見るばかりでござります。宿を出ますは、ふいと出ましたから殻手でござります。しかし途中で此の繪を見當りましたが、餘りるせいのよい畫のゑ、うつかり買つてさんじました。是れ御らうじまし、四天王が腹を退治致す所でござります。是

れでもお土産に獻じませう。」左次「それははや思召しは有り難うござりますが、私はち物で腹は決してたべませんテ。そこでその跡がどういふ御趣向だネ。」出目「へい唯今申すとほり外に趣向がましい事は決してござりません。」眼七「ソレでも繪を出した許りでは、疱瘡見舞のやうで、餘り手の無事でござりますネ。」出目「さやうなら正直に申しませうが、此の腹を持つて参つたのは、なんにもせず天窓から呑まうといふ心いきでござります。」眼七「ヤレモく無造作な事だぞ。」左次「腹だから大方そんな事だらうと思ひましたテ。イヤ皆様御趣向かんしんく。」アバ「扱わたくしども此様に、少々づ、も土産を持参致しましたからは、こなたからも何ぞ御馳走がありさうなものでござりますナ。」呑七「いかさま、しかしそれは定めて御承知でござりませうナ。眼七殿。」眼七「へい、かしこまりました。ア、しかし今日はあやにく仕込がござりませんで。」出目「イヤそのお仕込のない所で、何ぞ一二種ちよつぴりとナ。」左次「さやうおつしやる事なら是非がない。勿論料理番もをり合はせませぬ故、わたくしが抓み料理をさし上げませう。」野呂「これはいちだんの事でござりませう。」左次「へい、さつそくながら向島の名物をさし上げませう。」ト、アバ太郎が文「あなたもないうそトは申しながら、アバ太郎殿がアノ顔で、戀が出来たト云はれた時は、寔に腹の皮がいたい程をかしうござりました。あなた方はいかゞでござります。」卒「イヤはやをかしいだんか、此の顔色でいろ事三昧、イ

ヤ大笑ひでござります。」左次「へいそれが則ち笑ひ戀でござります。」野呂「ヤレ／＼御庖丁のこじ付け
 あんばい、かんしん致しました。」左次「扱また重平かなんぞ吸ふ物を一ツ上げませう。」ト、また文がら
 「へい、是れは諷屑でござります。オイ眼公ちよと立つて貰ひてえ。」眼七「ハイ／＼イヤどつこい。
 ハイたちました。」左次「帯を解かつし。」眼七「へいなぜでござります。」左次「ハテサ、なぜでもないか
 ら、きり／＼解かつせえ。皆様へ御馳走するのだから。」眼七「へエ、をかきな御馳走だゾ。」ト、眼七は
 帯をと「ハイ解きました。」左次「といたら單物をぬいで爰へ出さッし。」眼七「ヤレモ／＼漸う昨日買つ
 た單物を、モウぬぐのか、なさけねえ事だ。」左次「それだから入用だわ。」眼七「ハイ／＼サアそれへあ
 けます。どうぞ命ばかりはお助け下さりまし。」左次「扱此の眼七が單物は、昨日富澤町で買つてさん
 じました故、是れが三つものでござります。又跡でお茶漬でもお上りなさる手當には。」ト、眼七が輝へ
 「これに煮染がござります。」圖武「是れは／＼跡のお茶漬までお手厚な事、成程此のお煮染はよく鹽が
 しみたやうで、見たばかりでのどがピリ／＼かわきます。」呑しかし鬼べなら虎の皮で致しさうなも
 のでござりますナ。」左次「是れはごもつともでござりますが、何分急案ゆる行届きませぬこともござ
 りますが、そこが兄弟同様の仲ゆるゑ、あなたがたはじめ同じ様な事をいく度かくどう致します所が、
 矢張お肴一種でござります。」アバ「へエ、それは又どういふお肴になります。」左次「へい兄弟の集まり

ました所へ、越向が工藤出ますれば、これが則ち鯛麵でござります。扱おのぞみなら、まだいか程も
 お肴は出来ますが、如何致しませう。」野呂「イヤ／＼もう澤山でござります。」アバ「さやう／＼、此
 のうへまだどのやうなこじ付け料理が出来ますもしれません、おそろしい事でござります。」左次「イヤ
 御遠慮なさりますな。」卒八「イエ／＼どう致して決しておじぎはいたしません。もう／＼眞平御免な
 さりまし。」出目「併しながら眼七殿の御趣向を、なんぞお願ひ申したいナ。」眼七「へいわたくしはは
 や、ごぞんじの通り居候の身分ゆるゑ、何も御馳走のいたしやうもござりませんが、唯今主人がたひめ
 んをこじ付けました尻について、貧乏人相應に、曾我の役割を、一兩人御覽にいれませう。」圖武「こ
 れは又氣が變つて面白うござりませう。」眼七「さて先づ私が鬼王貧左衛門でござります、所が此の
 節二役勤めするやうになりました。其の譯は一向御酒が呑めなくなりまして、此の頃は猪口に四ツ
 五ツもたべますと、足もとも定まらぬやうになります。是れを名つけて弱い酒のひよろ／＼と申しま
 す。」出目「ヤレ／＼主に劣らぬこじつけ人でござりますナ。」卒八「さやうでござります。前置の枕はか
 り長くて、へんてつもない事許り申します。」眼七「へい左様なら枕なしに、圖武さん一寸お目にかゝ
 りたい。」圖武「へい／＼何御用でござりますナ。」眼七「へい此の人の顔がち、むの髻たゞで、小鬘先に
 は元清もござります。」圖武「チョツいめえましい、また面の店おろしだ。」眼七「そこでどなたでも、お

鼻紙を一枚いたゞきたいネ。」アバ「ハイ、是れでよしかな。」眼七「これは有り難うござります。ハイこれがすぐに景物でござります。」卒八「御趣向はナ。」眼七「へい無錢の算段、小半紙の安いのでござります。」出目「イヤハヤたまく、景物が出たと思へば、人の鼻紙をつかひ、餘り無體なけんやくでござりますな。」眼七「それが則ち、曾我の發端でござりますテ。」アバ「とは又どういふ譯で。」眼七「へい景物は買はずでござります。」卒八「ヤレモ、苦しいこじつけでござりますな。」左次「モウ、いいかげんに切り上げた。拍子に掛つて、こじつけるはをかくもねえ。サア、酒にしよう酒にしよう、そのマア宮戸川をぶちあげよう。」眼七「オットメめたり、サア此方の世の中だぞ。オイ出目公此の片口へ出してくん。其のうちこつちは肴を出すのだ。」ト、是れより例のと、左次「サアあんまり酔はねえうち、相談をきめて置かう。廻状にも一寸書いては出したが、今夜の寄合は、春の花見茶番のことだが、おれがだまつて居ると、だれもかまはねえが、先づ第一番におれがいたゞいて、其の次に野呂まがしくじつたもんだから、さすがのこじつけ連中も、その次の羅漢はと、すゝみ人がなかつたから、するゝベツたりとつぶれて居たが、なんとれつきとし、へんあんまりれつきともしねえけれどサ、八人男が齒を合はせた事を、反古にはされめえではねえか。それともしくじるまでも、趣向がつかねえのか。」卒八「へん仰せにや、候サ、いふにやおよぶサ。趣向も案じも、山々だけれどみん

ながひるんで居る様子だから、おれ一人すゝんでもはじまらねえから。」アバ「何の、ひるむの夜むのといふけちな事があるものか。案じはその時つけて置いたが、誰もなんともいはず、殊に毎晩のやうに茶番は引續くし。」出目「そりやア、おれも同じ事だけれど、それにおらア女の方だけ、格別用が多いからツイ。」左次「エ、引又びち、始めるよ。マア相談の極るまでは、尻へかゝとでも押つけて置かつし。そこでマズ斯うしようといふ註文だ。」眼七「そいつア妙だ。」呑七「まだ何ともいへねえわ。」眼七「だうりできこえなんだ。」左次「ム、引古風な豆藏だ。」アバ「是れサマズ、まぜつかへさずに荒増の相談を聞かつしな。どうも悪いくせだゾ。フンそこで。」左次「マズこの趣向の初一念といふものは、毎日々々八日續けるつもり所が、隙行く駒のあし早く、光陰に關守なく、木梢の花も青葉と變じ、昨日まで片言をいひし鶯も、今は繼子をさへ育て上げ。」眼七「なむあみ。」卒八「イヤハヤ奇妙な相談のしやうだぞ。まぜつけへせといはねえ許りないひ様をするものだから、こたへては居られねえ筈だ。」左次「それだといつて、おいらがする相談に、只の人らしく、扱様々々な儀で、左様致しませれば、此様相成りますなぞと、不風雅にもいはれめえぢやねえか。」卒八「イヤ、やつぱり不風流がいい。おめへは常の人でねえつもりでも、あんまり錢の出た人とも見えさ。なんでも相談事はどこまでも野暮にいく方がいい。そして何だかむだないひぐさが、馬鹿長イに、をかアしく、節付を

して云ふもんだから、ツイ南無阿彌といふへんじをするも無理はねえ。マアくつまんでいへば、春の花見茶番の残りを、六人で一狂言つゝやらうといふ事だらう。」左次「さうよ、さうだけれど、八人の内春二人濟んで、跡が夏までのびたから、いつその事今年中の樂しみとしてサ、夏二日、秋二日、冬二日と割り付けようといふ註文だかどうだえ。」香七「ム、それも能からう。」左次「先陣の争ひが面倒だから、すいと八日目までの名題をこせへて書いて置いたから、是れを圖にして順を究めて置かうぢやアねえか。」眼七「オット圖も名題もちやんと出来てゐやす。」ト、眼七ふくろ戸よりたけ長く書いた名題野呂「イヨく、是れはりつばく。ゲツト是れで頭取めてきた。序に狂言名題を、御披口々々々。」圖武「勻線香、清明香。」アバ「また交せるよ。漸うすこし舞臺がしまり掛つた所だ。東西々々。」左次「イヤ披口は圖を引いて、皆役割を書き入れてから読みやせう。」卒八「ム、それがいいく。飛鳥山の花の雲、相勤めまする役人かへ名をひつくじきか。」出目「エ、やかましいわえ。サアく圖を出しな、引かうく。」ト六人われもく引くくじの名前、くはしく書きそへたるはりだしの役割左の通り。

初編之目次

遊行日之通認め

飛鳥山	左次郎
隅田川	野呂松
兩國	卒八
高田	眼七
花屋敷	アバ太郎
海晏寺	圖武六
吉原	香七
浅草市	出目介

三編 下冊

催涼蓮池之會合 其の二

扱も八人の役割を圖にて定め、鴨居へ立派にはりつけて置き、左次郎「サアまづ斯う外題は付けて置
くけれど、是れはたゞ順番を定めた許り、場所はてんぐの好み通り、案じのついた事がいいぜ。早
い事が兩國の涼みの題でも、モシ腹にあはずば隅田川へもつていくとも、利根川へ飛び込むとも、勝
手のいい所がいいぜ。」アバ「そりやアちけへねえ、内輪の茶番こそ、すこし意地悪をしてまごつかせ
るなんぞも、をかしくつていいけれど、他人の中へ押しだす事だから、てんぐに磨き合つて、岡目
八目の助言をくはへて、そんでもしくじらねえやうに、すつぱりやツつけべエ。コレ卒公、しつかり
と禪をめぐめてか、らッしヨ。」卒八「へん何是れしきに、禪どころか。」ト、卒八がすましてゐる顔。眼「今
じやうツはりの手なみにかけて、拙作かい作か、至極ごくらの世界ツ。」のろ「ナンダ、まだ
こじつけたらねえのか、いいかけんに愚癡もいふもんだ。」呑七「イヤじやうだんではねえぞ、春のや
うにしくじつてはおされる。こんどはしつかりまうけてえもんだ。ほんにヨ、卒公しつかりさつし。」
アバ「春中のも随分出來はいいけれど、かんじんの所、爰でひつかつがうといふと、しくじるからどう

もならねえ。」圖武「かんでも糞桶の荷繩ぢやアねえが、大丈夫にしておかねえと、始末のわりいこと
が出来るテ。」のろ「ちけへねえ、卒公マア案事はついでるるか。」卒八「へんなくつてサ。」左次「コ
レサさう糞落ちつきがあぶねえの親玉ヨ。」眼七「サレバサ雪隠の上水を見るやうに、氣ざにすまして
居て、大變な事を仕でかすめえぜ。」卒「こようおめへたちは何のこつたナ。ヤ糞桶だの、くそ落ちつき
だの、ヤレ雪隠の上水だの、ぢ、むせえたとへ許りいふ手えへだ。それがほんのしやらつくさいとい
ふのだ。ほんのこつたが、おらがたつた筋へ點の打ち人があるものか。」左次「いいサ、其の廣言は
跡へ廻してマア早く筋を聞きてえ。」アバ「さうよ今日のやうにてんぐ、懐でやつては居られねえ。
なんでも總座中大承知の入道へ、木賊とむくの葉をかけて磨き上げた所でおし出すがいい。」卒「さう
すさうす。何ほおれが番だとつて、大丈夫といふ譯にはいかねえ。丁度三津五郎壹枚では、狂言が出
來ねえやうなもので、外が何分若い衆大勢といふもんだから、萬一又、仕損ふめえもんでもねえが、
どうでもかうでも八日目までは、叩かねえではならねえぜ。卒八さへあの通りだから、とてもおらア
なんぞとひるんでたちぎえはならねえぜ。」のろ「アレ、もういたゞく枕をならべるぜ、こいつア
險難な狂言方だ。」左次「サア、跡の事より今度はどうするのだ。早くいはつせえナ。」卒「コウびつク
りしなさんナ、よつほどいいぜ。先づ斯うだ。」圖武「ム、こいつアよからう。」アバ「なにがいいのだ。」

つて能くさへあれば、ちつと面不足だけれど、おやまにしめえものでもねえ。」卒「あんまりけなしなさんナ。これでも合引で、ぐつと目をつりあけて、かづらをかけて見せたら、びっくりするだらう。」
のろ「こりやア、びっくりするには違へねえ、氣の弱いものは、ぶちけへるだらう。」出目「さうよ。其の目はやつぱり、つり下つた形で置くがよからう。とてもつり上げたくなるナ事では、女の顔とは見えまい。」眼七「へんな顔にはなるだらうけれど。」左次「イイサ。」そ「こそ南傳馬町の、仙女香の十袋も買つて、二三日か、つて地を塗りつぶしてもしたら、ちつとは顔らしくもなりもしようが、さうしてまアどうするのだ。」卒「かづらはさら毛にして、ぐる／＼むすび髪にいつて、止ざつと、みだれにならうといふ誂へだ。」左次「よよし、それも呑込んだ、そして。」卒「そこでおら方には後見がひとり、それは雇ひッ人でもいいから、舟に居るものになりたけ多いがいい。トいふわけは、先づ本舞臺三間のあひだ、兩國橋の景色、下の方よき所に、屋根舟一艘。」出目「ハア又屋根舟か。」卒「其の内に連中残らず相圖をまつて居やす。そこでおれはその美しいなりで、橋のうへをしを／＼と、物あんじ姿で、あちこちうろ／＼して居やす。」圖武「フンア首尾よく姿と見ればいいが。」のろ「さうよ太おもてで、ふつとりとした、色の浅白い女だから。」左次「イイサ、まづ物あんじ姿で、それから。」卒「な

きで、まつばだか、緋禪一ツに成つて、其の時後見が、著物の始末さへしてくればいいのだ。さらりと髪を亂してボンと川へ飛び込むのだが、ソリヤ身投だといつて、橋も川も大騒ぎになるだらう。」
圖武「ちけへねえ、是れはおどろくだらう。」卒「そこでしばらくして、すいとうき出て、およぎ始めるとたんに、船の中からは、連中かねて用意の、いろ／＼の魚盡しを張子でこせへたやつをかぶつて、ボン／＼／＼飛び込み／＼おつかける。都て龍宮、玉取のまねびとなる、トいふはどうだ。」左次「ヤこれはよからう妙だ／＼、皆々はどうだ。」アバ「いい／＼、こりやアやつて見てえ。」出目「それだからどうも人は見くびられねえもんだ。卒公是れ許りは一生の出来だぜ。」卒「へん是れが氣にいらすは、まだいくらも案じはあるぜ。」のろ「またほめると、ちき登るからどうもならねえ。」左次「サアそれにするには入用は何だ。たいてえは今夜の中そろへて置くやうにしてえもんだ。」卒「まづ今いつた、さら毛のかづらに女の衣裳、これはおだるさんのを借りても間に合ふが、緋禪は一すぢ奢らすばなるめえ。濡らすから。」のろ「さう／＼、それに稻荷新道の仙女香が十袋、ア、しかし十袋で足りようか。」
香七「へん十袋では五百だが、もうちつと出すくらるなら、此様な首はすけ替へる方が、安くあがるだらうぜ。」圖武「何下塗は胡粉のつけたてにせずば、凸凹が直るめえから、上塗ばかりは十袋もあつたらよからう。」卒「エ、つらの事は手めへツちの知つた事ではねえからかまふなえ。それよりきつかけ

へば出来る事だから、かうしやせう。柳橋の住吉屋の船をかりて、亭主の次郎兵衛に吞込ませて、近所の若え衆を頼んで、飛び込んでもらふ工面にしよう。」卒「ム、それがいい。何こんな不器用なあひてをとつては、狂言がしにくい。相手がしつかりだと、ぐつと乗つか、つてするから、大きに仕いい。」出目「なんだ、ごたいそいな、橋の上から川へ飛び込むとつて、狂言も大わらひだ。相手がいいとつて悪いとつて、どこに仕打があるものか。」卒「それでも手前たちには勤まらねえではねえか。」出目「しれた事ヨ。川へ飛び込むなんぞといふやうな事は、やつし方の本役ではねえわ。」野呂「へんこんなやつしかた許りあるから、芝居が六ヶしいのだ。」左次「さう言はッしやんな。春の隅田川の狂亂は大やつしだつけ。」眼七「所が、ぢ、むせえ氣狂のうちは、かなりだッけが、引拔でグツトきれい事にならうとすると、たちまち川のなかへすほんとおつこちてヂヤンノヨ。是れ則ち身に應ぜぬ事を天の然らしむる所だ。」左次「イヤサ、川へおつこちたから、濡事師だといふ事よ。さもなくつて濡れさうな所はちつともねえわサ。」野呂「イイヨ、うつちやつて置いてくれヨ。」左次「うつちやつておかねえとつて、今更その面がどうなるものか。」春七「ちけへねえ、野呂松が面もつかひ道のねえ不自由なつらだよナウ。敵にも眼が細くつり下ッて、色は白と青と黄を交せて、何だかいやみツたらしいとほけ面で、なんでも本役は、半道やつしといふのだらう。」卒「へん半道やつし、九のヤぢや、十ウが聞

いてあきれらア。冤に角婦人方へ向く器量は、殿達の氣にはいらねえもんだ。」アバ「器量もすさまじい、飛龍に似た面だア。」卒「飛龍でも五兩でも、女中方のお眼が曇らぬ鏡だア。今度はおらが面も、さして入用でもねえ様子だから、マツ犬の尿のねえ所へ、そつと置いて下ッし。それより、おし出さんだんを、よくきめるがいい。」左次「ム、是ればつかりはちけへねえ。しかし今度は衣裳がおだるさんのですむから、かづらを一ツ借りればいい。禪は松坂屋で中巾を六尺、オイ眼今一夜一寸買つて来て、裏のおつかアにたのんで置かッし。」眼七「オットそれは承知の濱だが、魚つくしの冠物はどうしよう。」左次「それは翌日の朝、中見世へいつて買ひ集めればいいが、船宿へいつて、人足を憑まずばなるめえ。」左次「イヤ、これも次郎兵衛が所へいつて憑めば、さしか、つても、間に合ふにちけへねえ。」卒「そんなれば、外に稽古もいらす、たゞ橋の上に後見がひとりあればいい。」左次「成程さうださうだ。一人といふ事はねえ、ある人だから、三四人もつれて行くがいい。」卒「何サ、不器用な手合が、生中大勢では足手まとひじやまだ、エ、ト呑公ひとりで澤山だ、やつて下ッし。」春七「へんそんな病人役なら、外のものにさつし、おれが自身に手をおろす程の事もあるめえ。」卒「何サ役不足をいふ事はねえ。とてもお下に勤める役ではねえから、足下にたのむのダ。いはば所作楯の相手といふやうなもんで、よつほど骨の有る役だせ。」春七「ハア橋の上で楯でもするのさ。」卒「いんにや楯なら

仕^しいが、仕^し打^{うち}でいくやつだからむづかしい。」番七「ハアそれではと思^{おも}人^{ひと}といふ所^{ところ}があるのか。」卒「あ
る所^{ところ}か大思^{おほ}入^{いれ}だ。なぜといつて見^みな、序^じ題^{だい}が身^み投^{なげ}に出^でた女^{おんな}だらう、それだからおれは始^し終^{しゅう}内^{ない}心^{しん}にうれ
へをもつて、だんまりで往^{わう}來^{らい}の人^{ひと}にもあやしめられる程^{ほど}に、面^{つら}と仕^し打^{うち}で熱^{ねつ}歎^{たん}だから、其^{その}の相^あ手^ては甘^{あま}口^{くち}
ぢやアつとまらねえ。」番七「イヤ／＼其^{その}の面^{つら}で熱^{ねつ}歎^{たん}をされて、どうしてそばに居^ゐられるものか、恐^{おそ}
しい事^{こと}だ、マヅ／＼餘^よ人^{じん}へお見^みせなせえ。わたくしはお断^{ことわ}りだ。」卒「さういつてくれることはねえ、
チヨツいいわ。そんなら眼^{がん}公^{こう}やつてくだッし、今^{いま}いふ通^{とお}りのすぢだ。」眼七「なんにしろわりい筋^{すぢ}だ、
辻^{つじ}焼^{やき}にしかなるめえ。」卒「いやサ交^ませてはいかねえ、マア聞^きかッし。そこでうつくしい娘^{むすめ}が欄^{らん}干^{かん}へ寄^よ
りか、つて、うれへにしづんでる様子^{やうす}だから、足^そ下^こがいふには、モシ姉^{あね}さん、なんだかお前^{めへ}はあや
しいそぶりだが、若^わ氣^けの至^{いた}りで何かいちづにさし詰^つめた心^{こころ}から、不^ふ料^{りょう}簡^{けん}でも出^だしはしねえかといふを
きつかけに、おれは帶^{おび}をゆるめてボイとぬける許^{まか}りに、身^みづくろひをしながら、ハイ／＼御^ご深^{しん}切^{せつ}はお
嬉^{うれ}しうござりますが、どうあつても死^しなねばならね身^みの上^{うへ}、必^{かな}ずおとめなさつて下さりますななんぞ
と、それからは人の集^あまるまで、出^でたらめにおしやつて居^ゐるのだから、よつほとむづかしい役^{やく}だぜ。」
眼七「ム、なんのことはねえ、太^{たい}神^{しん}樂^{がく}の神^{かみ}主^{ぬし}さんでしてゐるのだナ。」卒「とん屋^や事をいひねえ大^{おほ}ちけへ
だ。おやまが本^{ほん}性^{じやう}でしつかりして居^ゐるのだから、道^{みち}外^{がわ}ではいかねえ。」眼七「それだけ聞^きくるしい。大^{おほ}

方^{かた}其^{その}のつらで、はなして殺^{ころ}しくださんせなんぞと、いふ氣^きだらうおそろしい。」卒「へんその面^{つら}／＼と
安^{やす}ッほくいふけれど、是^{こゝ}れでも合^あ引^ひをかけて、拵^{こしら}へて見^みせてえほんにヨ。よつほどこせへばえのする
顔^{かほ}だぜ。」野「拵^{こしら}へばえだとして、ばえねえとして、其^{その}の面^{つら}が何^{なに}程^{ほど}のばえ樣^{やう}がするものか。」圖「武^ぶ」しか
し出^で來^きばえはしめえが、鳥^と羽^う畫^えのやうにはならうヨ。」卒「チヨツいめえましい。ヨシ／＼今^{こん}夜^や、一寸^{ちよつと}
拵^{こしら}へて見^みせべえ。おだるさんの所^{ところ}で白^{おしろ}粉^いをもらつて來^きて。」ア「イヤ／＼、そりやアごめんだ。晝^{ひる}間^ま
ならがまんもしようが、夜^{よる}よなかそんな事をされるト、おらアたちまち驚^{きやう}風^{ふう}の蟲^{むし}が出^でらア。其^{その}のひま
にもうちつと、蚊^かいぶしでもしかけさつし。おそろしく出^でてきたぜ。」左「次^{つぎ}」さう／＼。そしてつらの
もんちやくも、てえけえにおつつけて置くがいい、なにも卒^{そつ}公^{こう}にかぎつた事^{こと}でもねえ。おれをのけて
見^みると、跡^{あと}に首^{くび}らしいものは一^{いっ}つもねえわサ。さうして見^みるとみけんじやくの花^{はな}火^びのやうに、首^{くび}の共^{とも}
喰^ぐひだわ。」卒「へん何もお前^{めへ}の首^{くび}を一^{いっ}つのけるわけもねえ。おなじ陣^{ちん}笠^{がさ}首^{くび}のことだから、一^{いっ}所^{ところ}にじつ
けんさせるがいい。」出「且^{かつ}」それにしてはもうちつと大^{おほ}きいもので、二^に三^{さん}杯^{はい}やらかして二^に階^{かい}へいつて御^お
寢^ねならう。眼「公^{こう}勝^{しょう}手^てをしつたやうに、ちよつと蚊^か屋^やをひつばつて置いてくだッし。」眼七「蚊^か屋^やは毎年^{まいねん}
四^し月^{げつ}上^{じやう}旬^{じゆん}より八^{はち}月^{げつ}下^げ旬^{じゆん}まで、たいら一^{いっ}めん晝^{ちゆう}夜^やつりばなしでおふるまひ申^{まを}す。」出「且^{かつ}」ヤレ／＼それ
では、サヅ蚊^かがはへつて居^ゐるだらう。」眼七「ア、もうよつほど追^おひ込^こんだらう。あすの晚^{ばん}あたりから

は、モウ外へ寐る方が樂だらう。」左次「是れさ寐るなら、みんながはやく寐て、あしたは早く起きねえと、買物が間に合はねえぜ。そこで相手はいよく眼公か。」眼七「どうも仕方がねえ。見こまれたが不運だ、やらかすべえ。しかし獨りでは何分たちきれさうもねえ、呑公もがまんしてやつてくだッし。」呑七「チョツ、とんだ目に合ふもんだ。きように生まれるト、何事によらず一鼻がけに、憑まれるからおそれるテ。そんならマツ太神樂のお龜が濟んでから止、禪一ツになつて飛び込む跡の、著物のしまつをしてやればいいのだナ。眼公呑込みだらうノ。よし、サア其のつもりにして寐よう寐よう。」眼七「禪も翌日の朝の事ヨ。その替りよつほど早く起きねえではならねえ。今夜は呑み散らしとして置かう。」ア「サアみんな二階へ來さつし。」左次「コウ、さう皆天昇されてはおれが寂しい。二三人下の蚊屋へも寐てくだッし。そして翌日の朝は酒法度として、朝食は廣小路へ申し付けよう。サア、下住居の人足手合、蚊屋を引張つてくだッし。オヤ卒公はどこへ行つた。」眼七「小便にでもいつたらう。」左次「べらほうナ内に小便所の有るのに、サアお牀をのべよう。」ト、打ち寄り蚊屋も出、左次「卒八はどうしたらう。なけえ小便だ、牛のやうだぜ。」眼七「小便は牛だが。」左次「オット馬だトいふのか。おれが種を蒔いて、そつちに洒落られてたまるものか。」ト、いふ所へ、卒八「のどけへいつたのダ。」卒「小便に出たらあんまりいい風が來るから涼んでるたのよ。」左次「ナゼまた外へたれる

のだ。地犬といふものは仕方のねえ物だ。」卒「小便は外へたれねえと長くなるから。」左次「オヤナゼ。」卒「内の小便十八町といふから。」左次「チョツいめえましい不意を打れた。サア、寐るぞ。」二階ではモウいきついたト見えて、でえぶしづかになつた。」のろム、二階がしづかになつたから、下では酒をはじめて、モウ肴がねえから、たゞ呑むとしようか。」左次「ヤレ、大骨を折つて、たゞ飲むまでこじつけたナ。モウそれからすれば狐拳だ。」卒「イヤ、是れから又呑んだら、あした天窓が病めて鼓がする。ア、初音エ、ト、いふだらうぜ。」左次「エ、いけひつ、こい。どこまでこじつけるのだ。俺アモウ寐る、イヤどつこいな。」ト、蚊帳へ「ヤレ、裾も廣げねえである、いけぞんざいな釣りさまだ。サア皆かはひらねえか。蚊を入れられては恐れるから、おれが木戸番をしてやらう。」のろ「うつちやつて置きねえ、はじめて蚊屋へ這入りはしめえし。」左次「さういふけれど、おらが内のは萌葱の窓ではねえ、無垢の萌葱だぜ。」のろ「へんもえぎの窓といふがあるものか、紙帳馬鹿にした。」左次「サア、笑談ではねえ、キリ、這入らねえか、じれつてえ。」のろ「オイ、サア眼公、一所に來さつし。モウ三度目の知らせが鳴つたから、小便なら樂屋口へ早く出さつし。」左次「エ、むだッ口より、蚊屋が帯へひつ掛つて居るわ、いくちのねえ。卒八はどうした、天昇したかの。」眼七「ナアニ今方二疊へ這入つたツケ。」左次「何小座敷に居る、そりやア又何か捜しッ事をしてるだらう。いめ

えましいべらほうだ、眼公がんこう見て來さつし。」眼七がんしち「オイ卒公そつこう來て寐ねえか、オイ〱卒公そつこう々々。オヤ今小便せうべんして來て、あすこへはひつた筈だが、蚊かの喰くふのに寐ねてもるめえ。」左次さじ「何寐なにるものか、又何なにかいたづらをして居ゐやアがるだらう。あすこを取りとちられされてはおそれる。眼公がんこういつて引きずりだして來さつし。」眼七がんしち「ア、引世話せわのやけた、寐ねるにも直すすなほには寐ねやアがらねえ。ト、小言こごをいひながあける、とたんに内よ、卒そつ「ワア。」眼がん「キヤア。」ト、うしろへたふれる音、何なにごとにと、左次さじ「野郎やろう野呂松のりまつ蚊帳のりまつの内り眞白まじろなくびを出し、卒そつ「ワア。」より飛び出し、かけくるふたりが鼻はなのさきへ障子しょうじのかけより、卒そつ「ワア。」二人も同じく、兩人にん「エ、引誰だれだ〱。」卒そつ「ア、うらめしや、トロ〱〱〱。」野呂のり「卒八そつはちだ卒八そつはちだ、エ、びつくりさせた。何なんだマア其その面つらア。」眼七がんしちはやうや、眼七がんしち「コウわりい洒落しやれだ、おらア實じつに氣きがとほくなつた。ばか〱しい。」左次さじ「さうよ。おいらもまじめで驚おどろいた。わりい洒落しやれだ。そして智慧ちゑのねえ、ワアとは何なんの事ことだ、ふけいきな。」卒そつ「何サなにおどす氣きではけてねえが、實じつは俺おれもチト安心あんしんならねえから、さつきおだるさんの所ところへいつて、化粧けしやう道具どうぐをかりて來て、ちよつとやつて見た所ところだが、随分ずいぶんうつくしからう。」左次さじ「大きなべらほうだぞ。駄菓子屋だがしやの牛皮ぎゅうひのやうな面つらが、どこへ持もち出だされるものか。翌日あすはおれが塗ぬつてやるから、うつちやつて置おかッせえ。」眼七がんしち「成程なるほど面つらを拵こへたらびつくりするだらう〱ト言いつたがちげねえ。がうせえびつくりしたぜ、まじめに目を廻ましそこなつたア。いま〱しい。」ト、眼七がんしちが小言こごをいふもをかしく、はては皆々みな大笑おどろひ、

はや夏の夜の明けやすく、早朝さうちゆうより支度しだをと、のへ、今夜こんやは一番いちばん卒八そつはちが思おもふ笑壺わづらひに入相いりあつ頃ころ、ふねと岡おかとの兩國川りやうごくがは、人の山ひとなす滑稽こつげい笑話せうわ、草稿さうかうのこらす出來できあれど、丁數ちやうすう延のび〱故三編こさんぺんの追加つらぎ一冊いっさつひき續つづき賣うり出だし申まうし候さふか。

三編追加序

稚女の唄に曰く、兩國橋長いく御馬でやるか、お駕籠の中より一寸覗きのからくりの傍に、紙代板木價と呼ぶ者あり。是れなん柱に張り置く花曆追加の三編聞あつて十三月の御重寶、年徳明の方に向ひて涼みの舟の乗初よしと、たひらにはしる舳の舟足も、水面滔々として、瀧亭鯉丈ぬしの滑稽爰に百艘のふなばたをつらねたるも、誠に大江都の繁榮、其の名高雄丸の屋形のはとりには、花火の光もみぢを照らし、吉野屋が屋根舟には、櫻の紋付きたる藝妓に花あり、拳酒の一調子高くはりあけたる淺間ヶ嶽の投節にて、イヨ柳橋々々の聲諸共に、船宿の妻舟かくと呼びかくる川端歩き野割間に岡釣は、うろく舟の火かけより、客を見つけて飛乗の二人船頭、脇櫓もおして、するさんの立賣と古き地口も折にふれては、一ツめづらし、二ツ目に棹豎川のもやひ綱、解いて流して涼風を、橋間に繋ぐ首尾の松、陰芝居の聲色は、三座も爰に浮ぶかと、當りは舟の拍子幕、しばらく時をうつしたる、水鏡のめりやすにて、八笑人もせうらんあれと、ホ、敬白

ト扇をかざして橋上にと、すみて

ふじつくばかざす扇もふた國の橋にと、める風の涼しさ

琴通舍英賀

花曆八笑人三編追加上

古き漢書にも、書は言葉を盡さず、言葉は意を盡さずとやらん。況んや空氣の八笑人、心の足らぬ趣向を設け、月花雪の苦世界を、そけたつもりで諸人を、一番はめて樂しまんと、人をのろはば穴二つ、兩國川の涼みのもよほし、彼の頭取の左次郎が、池の端の隠宅にて、宵に仕組みし手筈の通り、衣裳かづらも借り集め、其のほか調度揃ひしかば、左次「サアたいがい是れでよからうが。」アバ太郎「むづかしいのは首ばかりだ。なんと白上りの浴衣に、黒緇子の帯へ、此のくびをすけてもうつらうか。」左次「さればサ、そこはちつとおほつかねえもんだテ。」卒八「何サするぶんおほつくよ。何にしら一ツやつて見てくんねえ、つひぞねえこと、夕は白粉が乗りかねたやうだツケ。」香七「しれた事よ。つひぞ有つた事もなくツて、ヘン賽の河原四三ほさつではおそれるぜ。」卒八「オヤさういふけれど春中香公が所の茶番に、おかるをした時は、すつぱり仙女香がのつたぜ。」野呂松「ム、そりやアちけへねえ、白粉が乗つたに、齒が反つてゐるから、見物がのつたりそつたりして笑つたツケ。」卒八「ヘンそねめそねめ。今にすつかりこしらへて見せたら、ほんのことだが。」眼七「モウびつくりは御免だ、夕でこ

りこりした。」左次「サア、／＼爰へ面をもつて来さつし、やつて見よう。」卒八「オイちつとお待ち、鏡をひとつ。」左次「なんの人に塗らせながら鏡がいるものか、早く来さつし。」卒八「オイ、／＼、サアやつておくれ。」ト、向ひ合ひてゐる顔。左次「ア成程ハヤつまらねえ面だゾ。これでまた女形を思ひつくといふはふかくだ、ばか／＼しい。」卒八「何の事だナ、今更そんな氣のひけた事をいつてくれる事はねえワナ。そして斯うそばでし／＼見れば、路考だとして些との荒は見えるだらう。」出目「其のサ、路考のあらぐらなる所が、せめて一ヶ所あれば安心だけれど、如何にしてもあんまり取得のねえ顔だゾ。」卒八「ヘン顔に鳥居の有るのは辨天様許りだア。マア、／＼たいがいけなして置いて、先づ早く塗つて見てくんねえ。これでも帽子の下でぐつとめると美しくなるよ。」左次「イヤサ手前ばかりしつた様に、むしやうに下々々といふけれど、下でめれる日には、紫帽子をかけにやアならねえ。さうすると、ヘイ歌右衛門のお笑ひ草とは見えるが、唯の女とは見えねえぜ。」卒八「ほんにさうだツケ、それでは舞臺の作りになるノ。」野呂「なんの舞臺の作りも大笑ひだ。むてえな面をして居ながら、いけツ小しやくな事をいはねえで、どうでもいい様に拵へて貰はツし。とても目がつり上つたとしてつり下つたとつて、何ツばちの面が出来るものか。」鬮武「やつぱり卒八の面にしかなるめえノ。」卒八「アアもう、／＼、面の事はいいかげんに料簡してくだツし。どうも是れまでにしてやめられもせず、首

をすけかへるもおつくふ、どうも仕方がねえ。そばからさう口やかましくいはれると、氣が引けて舞臺がつとめにくい。」鬮武「ちけへねえ、／＼。是れから少とづ、いい所を見出して、ほめてやるべエ。」鬮武「イヨ、／＼、ヤンヤ、／＼のお聲がたよりぢやア、是れはカンカラ太鼓をかりて行かうか。」卒八「いんにやヨ、笑談ではねえ。たとひ濱の太夫だとして、切幕を出るとはま、／＼、大明神、さま／＼さまと譽められるから、ぐつと氣がひつたつて、狂言も格別よく出来るわ。さういはずにそこへ出ると、オヤ、／＼妙な面だ、ヤレ大層な反齒だのといはれて見ねえ、サアひるんで狂言がすつぱり出来る事ではねえ。」出目「それでも路考は妙な面でも、反齒でもねえから、誰も云ひ人はねえのだ。」卒八「それは知れたことだが、マヅ道理が、サ。」左次「イヤサ道理も、下駄もいらねえから、マアちつとだまらつし。口の端へ泡がはみだすから、塗りにくくつてならねえ。エ、氣味の悪い、なぜ人の手をなめるのだ。」卒八「口の端へ泡が出たといふから、取りこまうと思つて、ア、引、顔がくたびれきた、ひと息つかせてくれねえか。」左次「ム、そんならマア一服のまつし、大てい此のくらるにして置かう。是れで目尻の上へちよいと紅をいれると、ちつとは目尻が上るけれど、さうすると又、只の女のやうでねえからわりい。しかし目の廻りはうツすらとボカさうか。」鬮武「イヤ、／＼左様したら、やつぱり狂言の作りになるだらう。」卒八「それでも路考なんぞは。」左次「エ、此の男も、なんぞといふと路考路

考といふが、さういふ根性だから氣が折れねえのだ。路考のひきべつすれば、第一こんな首は澤庵の押しにしかならねえわ。どうして首の通川がするものか。」卒八「へん出る杭うたれるとは、よくいつたものだ。陰で聞くとおれ獨り妙な面で、外の者は相應な面の様に思はれるわ、いまくしい。」ト、所へ表を明け「ハイ御めんなさいまし。あなたに私どもの卒八は居りませんか。」ト、いふ聲 卒八「ヤアヤアお袋が来た、大變々々。左次さんおめへいいやうにいつて歸してくんねえ。はやくく。」左次「此の男もいい様にといつて、どうして己にしろるものか。自分の親の事だア、勝手をした様に挨拶さつせえナ。」卒八「それだつて、此の面はどうしてあはれるものかナ。」母「ハイお留守かネ。」野呂「ハイハイ留守ではござりません今。」母「左様なら卒八が居りますならどうぞちよつと。」卒八「眼公々々後生だ、ちよつと出てなんとでもいつて歸してくんねえ。」眼七「そんならば晦日までともいつて置かうか。」卒八「是れサ、洒落所ではねえ一生懸命だ、をがむく。」ト、卒八がしきりにあせり氣をもむと、皆眼七「ム、それでは居ねえとでもいはう。まんざら居りますが、遇はれませんかとも言へめえ。」卒八「ちけへねえちけへねえ、早く言つて下つし。」眼七「それとも諱あつて、一七日が間物忌の内は、縦ひ親類たりとも對面は相叶はぬとでもいはうか。」卒八「是れサく、無駄ツ口をきかずと、早くあそこへ行つてくだつし。」眼七「ハ、ハ、ハ、そんなら物忌の方にしよう、どうも立派でいいやうだ。」ト、さんざん卒八に氣

をもませ、おも 眼七「ハイおばさんお出でなさいまし、だいぶお暑い事でござります。」母「ハイく、イテの方へ出て 眼七「ハイおばさんお出でなさいまし、だいぶお暑い事でござります。」ト、奥の方「オイ卒エわたくしどもの野郎殿がをりますなら、どうぞ。」眼七「エ、引、卒八さんかえ。」ト、むいて 卒八さん、おつかさんが何か御川が有るさうだ、一寸爰へ。」卒八「エ、むね氣なやらうだ、サア大變だ。どうしよう。」ア「どうしようつて、あ、いつて仕舞つてはモウ仕方がねえ、出てあはつせえナ。」卒八「それだつて此の面が見せられるものかナ。」 香七「なんの美しくなつた所を、見せてみさつし、大體よろこぶ事ではねえ。」ト、押し合つてゐる 眼七「オイ卒八さん、おつかさんが待遠だ。モシこちらへお上んなさいまし。」卒八「エ、く、大變な事許りぬかすわ、成程どいつもくむね氣なやつらだ。チヨツどうするものか仕方がねえ。」ト、眼七をにらみ付け 卒八「ハイか、さん何の用だエ。」母「ハイ何もさしたる川事でもござりませぬが、夕で三四晩かへりませぬから、親父殿がやかましく申しますゆゑ、ちよつと内證で尋ねに出ましたが、あれは何をいたして居ります。」 眼七「何サおばさん、それが卒八さんだヨ。」母「エ、おやツかな、ほんにくイヤあきれるわ。其の面はなんのさまだ、エ、引、小いやらしい。みたくでもねえ野郎だ。是れ親父殿は昨日から、眞黒になつて小言をいつて居るわ。ほんにほんに手前の事では、おれが幾ら叱られるかしれねえぞ。」 眼七「それ見なせえ、おとつさんが、眞黒になつて居なざるのに、おめへが其の通り眞白になつて居てはすまねえ理窟だ。」 卒八「又口を出

しやアがる。うつちやつて置けエ。」母「何うつちやつて置けるものか、サアく一所にあゆべ。」卒「あゆべといつて、こんな面をして行かれるものか。マア先へ行きなせえ。」母「イヤくなんでも一所にあゆべ。其の面でも大事ねえ、親は人並に産み付けて置いたのに、我がすきで外へも出られぬやうな顔にしたのだわ。おれが知つた事か。」卒「イヤサ、そんなつまらねえ事をいつたとつてはじまらねえワナ。」母「何つまらねえ事があるものか。おれはちつとも曲つた事はいはぬ。」眼「ちけへねえ、おばさんのいひなさる事は理窟だ。それだによつて、夕もはやく歸んなせえといつたのに。」母「イエサ、もうく人様のおつしやる事も親のいふ事も、ちつとでもきく奴ではござりませぬ。此の間もマアお聞きなすつて下さりまし。わたくしの申しますには。」卒「エ、もういいわな。」母「親父殿もだんくんとる年だによつて。」卒「ア、引、ひつツこい。マア先へ行きなせえといふのに。」母「イヤ、只嘸だわ。」卒「ハアテ、ようござえさア。」母「あれ御覽じまし、わたくしにはちつとも口はあかせません。」卒「ハアテ、ようござえすといふのに。」母「へんあの通り何を申しても風の耳へ、む。」卒「オツト間違つた。風の耳なら、徳利に口とこねえでは對句にならねえ。」母「もうく口から先へ産まれたさうで。」卒「おめへ産む時氣がつかなんだか。」母「エ、やかましいわえ。いい年をしたものを、小馬鹿廻しにして、ほんにくもうくく。」ト、何かわけもなきおし合ひはてしなく、殊にいひつものり、卒八を連れ行かれては折角仕組みし茶番も、今日の間に合はずと思ひ、左次郎はまじめな顔にて奥より出で

「オヤおつかアよくお出でなすつた。時に卒公此の頃またするけかえ、困つたもんだ。さうとは知らず、今日はわたしが餘所へ茶番があつて行きやす所が、相手に女形が入用だゆゑ、だれを頼まうかと考へて見るに、おめへも知つての通り、わたしが内へ来る男に女形を勤めようといふ首が一ツもねえから、こまりきつて居たとこへ、ひさしぶりで夕ちよいとこつちへ卒公が見えたから、取りあへずたのみやしたが、さしたる用事でもなくば、親父さんにいいやうに言つて置いて、わたしに今日一日かしてくんさらねえかえ。」母「エ、左様で御座りますかえ。實はこんな奴でござりますから、親父もあてには致しませんけれど、あんまり毎日々々夜泊り日泊りに、宿へも寄り付きませんと、年寄は思ひ過しをいたして案じますから、ツイ尋ね歩きもいたしますが、さういふ譯でお役に立ちます事があるなら、お心置きなくおつかひなさりまし。殊にあなたにさへ居りますれば、案じもいたしません。」左次「左様かえ、それはマヅありがたえ。マアこつちへお上んなせえナ。」母「ハイく、何サおかまひなさりますな。フウ、それでは其の狂言は今日でござりますかネ。」左次「左様サ。」母「へいどこでござりますえ。」左次「兩國邊サ。」母「へエ、書間なら、どうぞサ久しぶりで、わたくしもサ、見物いたしたいものだが、御一所にまるつてサ、お座敷の隅にでも、おじやまにならぬ所で。」卒「エ、か、さんなんだナ、年寄のくせに、どうして一所にいかれるものか。」母「茶番に馳け付けるのではあるまいし、

年寄だとして、一所にいかれぬといふがあるものか。」卒「イヤサさうだけれど、若いものななかへ婆アさまが獨りまじつて見つとむねえからヨ。」母「なんだ見つとむねえ。其の若いものには誰がして呉れたのだ、エ、引、きいた風ナ。うぬひとりで育つたやうに。」左次「何サ、御鼻ア、さう思つてはわりい。何もおめへを邪魔にする譯でもあるめえが、マア考へて見なせえ。成程おめへが向うに見て居るとおもつたら、狂言も仕にくからうヨ。ことに女方といふもんだから、何か氣はづかしい様でわりのサ。」ト、小聲「斯うしなせえ、二三日の内に、わたしが所に月並の茶番が有るから、其の時そつと知らせてあけるから、卒公の氣のつかねえやうに、来て見物しなせえ。そりやアほんによ、おめへに見せてえぞ。」母「ハ、ハ、ハ、成程それもさうでござりますネ。左様ならば私はもう参りませう。」左次「マアアお茶でも入れやせう。」母「イエ、どういたしまして、モウ、おかまひなされますな。是れは大きにおやかましう御座りました。」眼七「マアお婆さんいいではねえかえ。」母「ハイ、どなたも是れにおいでなさいまし。へい左様なら。」ト母はやうやう、卒「ヤレ、近年にねえ、苦しいめに逢つた。」ト、眼七「此の野郎覺えてるろ。」眼七「ナゼ、ナゼ。」卒「エ、とほけやアがるナ。此の面でお袋に逢はせてくるしませやアがつた、むね氣な野郎だ。」眼七「何おれが此の面をこらうじましと、いひはしめえし。」卒「さ

うこそいはねえが、こ、へ呼び出してくれる事はねえわ。」眼七「それだとして、奥に居ますが逢はれませんといはれるものか。」卒「それだから留守だと言つてくれろと、頼んだではねえか。」眼七「さういつたノサ。今日は留守でござりますと言つたら、おふくろのいふには、留守でござりますから、尋ねに歩きますツ。こりやア理窟だから仕方がねえわサ。」卒「エ、居ねえといつてくれと頼んだのだわ。」眼七「さうもいつたノサ。さういつたら、居ねえから尋ねて歩きますといふから。」卒「エ、爰には居ねえといふ事だわ、こじれツてえ。」左次「ハ、ハ、ハ、もういいい。いつまでわからねえ事をいつてるのだ。おれが折角丹精して拵へた顔で、其の様に理窟をいふと、容顔がくづれて愛敬がおちてわりい。マア、奥へ歩行ばつし。」ト、三人は奥へ引込みながら、眼七「へん容顔にしてはまづいな。此の容顔の崩れるよりは、冬瓜の葛煮の方が氣がきいてゐらア。」卒「いいヨ、うつちやつて置かッし。」野郎「イヤさすが厚皮鐵面皮と呼ばれたる卒八も、今日は左次さんが、まじめで美味く受けてくれたからたすかつたぜ。」のにはかなはねえ。それでも、今日は左次さんが、まじめで美味く受けてくれたからたすかつたぜ。」左次「へん親といふものは、べらぼうなものだナ。この面が菊之丞に見えるといつたら、眞受けにしてこくして嬉しがつたぜ。夫れはよかつたが、お袋もふしぎとは思つたと見えて、見届けたくなつたかして、御一所にめゑりたいには、ちとおそれたテ。」卒「イヤモウ今日はおめへのまじめでたすか

つた。南無俗名左次郎大明神さまくく。圖武「コウくそりやアいいが、お袋は美味くはかつても、親父が承知しねえとでもいつて、又迎へでも來るといけねえから、ちつとも早く發足する工面にしようではねえか。」ア「ちけへねえく、こんな南瓜でも今日ばかりは立お山といふもんだから、今ぬけられては芝居が出来ねえ。」野旦「ほんにさうだく。サアくちつとも早く出かけようく。」卒「ム、出かけようはいいが、此の面で出かけようか。」吾「知れた事だ、ナゼ。」卒「先へいつてはいいが、爰から兩國までの道中が難澀だテ。」吾「何のそんな怯んだ事でいけるものか。そして左次さんが大骨を折つて塗り上げたものを、お袋に見せた許りで落す事はねえ。サアく著物を著替へて早く出さつし。」卒「何サひるみはしねえけれど、何だか近所が。チヨツ、どうするものか、乗り掛つた船だ、出かけようく。オイ野呂公、衣裳を爰へ下ツし。イヤまづ牀山が先だ。オエアバ公、ちよつと下地に結び直してくんねえ。」ア「なんの仰山な、下地もなにもいるものか。鬚をおつつぶして、かづらをかけさつし、合引きへしつかりめればいいわ。どうせぐるくと結んで置くから、ちよいと米屋冠でもするだらう。サアく天窓をくへもつて來さつし、おツばめてやらう。」卒「へん牀山の方へ呼び付けられる立お山もねえもんだ。あんまり下直に取りあつかやアがる、いまくしい。」皆々總掛りにて、衣裳か 左次「サアく出來たく。そこで後見をつれて、さきへ出かけさつし。みんな一所に

ぞろく出てはわりい。そして船宿で待ち合はせるがいい。」卒「オット承知々々。サア眼公香公、出かけよう出かけよう。」吾「ム、併し俺ア先へいつての後見は勤めようが、途中を一所に行く事はまづびらだ。眼公獨りで澤山だらう。」眼七「澤山でもあらうが、俺も一所に歩行く事はなんぎだ。」卒「おまはんがた、なんほ私等が様なもんだとつて、其の様にいやがつて呉れさつしやる事ア、あらツしやりさうもなからツしやりさうもんだ。エ、引モウ、いつそ腹が立つ、ヨウすかねえ。」眼七「エ、桑原々々、萬歳樂々々々。己アモウく、身がちむほど不好くなつてならねえのに、おまけにこんなわる身や何かされて、たちきれるものか。」吾「ちけへねえく、途中でどんな難儀をしようもしれねえ。どうぞひとり先へいつてくだせえ。」卒「コレまうし香七さん、こゝからひとり參れとは、淨りそれエガアをとオオオのオ。」圖武六「猿之助に花やるとおほしめし、番附一枚づゝお土産におめし下されまし。跡はすぐさま二本綱、一本竹の輕業ぢやア。」ア「ハ、、、齒のむき出し鹽梅といひ、何一つ不足のねえ猿芝居だ。」出目「此の氣ちけへを連れて歩行くのは、たれもいやがる筈だ。」左次「さうよ。すこし内端にでもすればいいが、あんまり外端過ぎるからこまりきるぞ。寔にはや世話のやけた事だ。どうも仕方がねえ、二度手間だけれど、船宿でまた塗り直さうから、マア面をひつづいて仕舞はツし。それとも獨り先へ行くか。」卒「どうしてマア、私は、イヤ、つひぞ供を連れず他所へ。」

左次「エ、胸がわるくならア、いめえましい。オイ眼公おだるさん所へでも行つて、すき油をちつと貰つて来て、此の面をひつぷいてやつて下ツし。そしてモウ片日陰がついたから、早く出かけようぜ。おらア一三人で先へいつて、船宿で遊び人足を拵へて置くから、みんながするけなしに早く来さつしヨ。」アバ、野呂、圖武、出目「おいらも船手の人足だから、左次さんといつしよに出かけよう。」左次「それがいいいい。」ト、そこへに支度と、のへ、左「眼公跡のしまりをしつかりして出さつしヨ。」眼「のみこんだ、こゝかまはずと。」アバ「がつてんだと尻をはしよれば。」香「トンチキチン〜〜〜〜〜。」ト、引、トンチキ、チン〜〜〜〜〜、トンチキ〜〜〜〜〜、ドジ〜〜〜〜〜。」ト、三味線の三重に、うかれて五人は出でて行く。あと三人もそれ〜〜に支度と、のへ、眼七は勝手おぼえし入口へ戸をひきたて締りをし、かねて約せし神田川の、舟宿さして出でて行く。これより兩國までのくさ〜は、相もかはらぬごたつき故、御見物のあくびを恐れ、軸をみじかく切りあげて、まはらぬ筆をブン廻しへはめてきり〜とひんまはし、すぐに兩國廣小路の景色、辻打にて道具とまる。

三編追加下

何人の口すさみにや、

兩國へ夏の夕暮来て見れば入相の鐘に花ぞ咲きけり

とは、こじつけながらもむべなるや。晝夜をわかたぬ種々の見物茶見世諸商人、あけつらふにいとまはあらねど、お振舞ひ申す枇杷葉湯は、陰徳者の婦人耳をいたため、七味唐辛子の匕は五齡湯の調合に替り、わづか四文の白玉水も、ギヤマンの鉢にいでて、生酔客のよろめくに、一しほひやつこく、涼しく見せる水からくりは、上晒しの心太、突出し茶屋に、翻る大花火のビラは、娘とともに客をまねき、吹けよ川風上れよ簾、中の小唄や聲色淨瑠璃、今を盛りの涼みどき、折こそよけれと八笑人、船宿にて手筈をさだめ、彼の卒八はおしつよくも、女の形にさまをかへ、姿にあらぬ柳橋を、虚無僧下駄に踏みならし、左褌のちよこ〜歩行み。さすがの香七眼七も、見るにしのびずおのづから、跡へ跡へと引き下れば、卒八は立ち戻り香七が手を取り、卒八「香七さん、お前様寔におそい足だヨ。さア一所においでと申すに。」香七はちいみあ、香七「コレサ卒公、爰へ来てまで、さうふざけてはいけねえ、もうまじめでやらツしナ。」卒「オヤ〜、又香さんがおしかりだヨ。そんなら眼さん、おまはんと。」

眼七「ア、く後生だくをがむく。おらアすぐに爰から出奔だ。」
 香「ちけへねえく。おいらも跡で連中をはぶかれても仕方がねえ。ソレ見さつし、ちらく人立がするわ。」
 卒「そんなら私ばかり。」
 香「エ、わたいも何もいらねえ。はやく先へ行かッしといふのに。」
 立、兩人はまじめになつてやうく追ひ
 香七「なんと眼公、今度の大役といふは足下とおれだぜ。この氣狂の守を、誰が仕人があるものか、馬鹿馬鹿しい。」
 眼七「ちけへねえ。おいらア今、住吉屋で呑んだのは、からりと醒めてしまつたが、卒八めはだんく酔ひが出ると見えて、悪くふざけやアがる。」
 香七「イヤ酔ひもしさうな物だ。今日は取りわけ食らつたよ。左次さんにとめられてから、又内證で茶碗でグイくひつかけたヨ。」
 眼七「併ししらふで、アノざまをして兩國までくれば座敷牢ものだハ、。」
 香七「アレくあのさまを見さつし。ぐにやくとよつほど氣取つて歩きやアがる、いまくしいべらほうだ。」
 ト、二人は手に汗をにり付いてゆく。卒八はやがて橋へさしかり、中頃まで渡りしが、爰ぞよきほどなるらんと立ちどまり、跡を振り返り二人が来るを待ち合はす。眼七呑七は卒八がわが身を見るがくるしき故、あとへくと引き下り、いまだ橋の袂までも来らず、影だに見えねばしほし欄干へもた「コレナゼ立つて居るのだ、左次郎さんや皆はどうした。手れ、川中を詠め居る。うしろより袖を引いて、」
 卒八「かゝさんおめへどこへ行めへ又酔ひ過ぎて、はぐれはしねえか。」
 ト、いふに後をふりかへり、たれ
 卒八「かゝさんおめへどこへ行くのだ。」
 母はここ
 母「うんにやよ。おれも今日はお天氣はよし、お開帳へも参りたし、又跡でやうすを聞けば、今日の茶番は外でするのださうだから、何も人さまの家へ行くではなし、しらぬ顔で見物

しようと思つて、さつきから橋の袂にまつて居たのよ。」
 卒八「エ、お前もつまらねえもんだ、なんの見ずともいい事だ。こんな事に親が付いて歩行いては、友達の前へ外聞がわりいな。お開帳へめゑつて、早く歸んなせえ。」
 母「エ、引、よゆく親を邪魔にする。宜いわ、見て居ても。」
 卒八「イヤサよくねえよ。」
 母「己ばちの當つた野郎だ。とかくおれをば目の敵に。」
 卒八「エ、引じれつてえ。どうでもいいから歸んなせえよ。」
 母「うんにや歸るめえ。われが見せねば、左次郎さんに言ひ込んで見せて貰ふわ。それもならぬと言はつしやれば、われを引きすつて歸る。おれが子をおれが連れて歸るに、誰がなんといふものか。サア左次郎さんはどこにござる、一所にあゆべ。」
 ト、卒八が手をおさへてひつばれ
 何かあやしき女と婆々と争ひ居るゆゑ、さまんくに評して、立ちどまりて見物する。香七、たいさへ物見高き往來の人
 眼七の兩人もさいぜんより見物にまじり、卒八がくるしむを見てをかしさをこらへゐる。卒八「コウか、さん、おめへもはや、むく犬の尻尾、宿なしの髪の毛、菅絲のこぐらかりとも何とも、名の付けやうのねえ、わからねえもんだ。早い事をいつて聞かせようが、年寄は邪魔になるから歸んなせえよ。」
 母「なんだ年寄は邪魔になると、ヘン是れ此の廣い兩國でナ。」
 卒八「住む所さへ長橋のが、聞いてあきれらア。」
 母「おれが五人や十人居たとつて、どこに邪魔になるものか。夫れとも兩國中の年寄を狩つて仕舞ふか。」
 卒八「エ、引どいへばかういふと、マアどうでもいいから爰をはなしなせえヨ。」
 母「イ、ヤはなさねえ。何でも左次郎さんの胸を聞いて料簡が有る。」
 ト、金剛力に卒八が腕首をおさへて放さねば、さすが

いぜんよりかくれ居たりし兩人も、見物黒山の如く集まりしかば、もはや化の皮の露はれぬうち、時分はよしと顔を出せば、
 て、どうぞしておくれよ。」 呑七「オヤおツかア、おめへどけへ行きなかつたのだ。そしてまアどういふ譯か知らねえが、この子もわかい身そらで、此の様に人立のする中に居るもつらからうから、まづ私にあづけて、手を放しなせえ。第一外間がわりいな。」 母「イ、エサ、まア聞いておくんせえ。さつき左次郎さんがお頼みなさるから、親父どんにもいいやうに取りなしをいつて置いてネ、親は親と思つて、どうぞいい上へもよくさせてえから、此の暑いのにえつちらおつちら、ちつとも手助けにならうと思つて、出て来ましたのに、ほんに／＼つやもなく歸れと申しますのサ。それもマアよう御座いやすけれど、ほんに／＼三千みろく、わたしに苦勞ばかりさせておいて、兎角わたしを邪魔にいたしやす。よくまア考へてごらうじやし。としをとつて邪魔にされようとつて、艱難苦勞して育つてはおきません。ほんに／＼餘りといへばほんに／＼、腹がたつてほんに／＼。」 眼七「尤もだよ／＼。それだが、おつかア。今呑七もいふとほり、人立がするので外間がわりいから、まア／＼わたし等にあづけなせえ。」 母「ト、やう／＼引き分け、母をおさへて卒八に目くばせすれば、卒八も心得、とても母をはぶきて卒八「コウか、さんお前のやうに、やかましくいはれては、わたしも此の世に生きて居るかひがねえから、私やアもうかくごを極めた。おめへは随分達者で、たんと小言をいつて居なさい、モウおさらば

だよ。無南あみだぶつ／＼。」 母「ト、いひさままづばだかになり欄干へのぼれば、母はう。」 母「ヤアコレ、卒八よ気がちがつたか、あんまり短氣だ。これさ危えわヨウ。ヤア呑七さん衣物はまア、うつちやつて置いて、是れサはやく、エ、眼七さんや。エ、おめへ方アナゼ見てゐるのだ。ヤアイ、人ごろ。エ、たすけぶ。エ、何でもいいから、早く来てとめてくれねえのか。」 母「ト、泣聲を出してあせるゆゑ、人だちのうちへ行。」 眼七「コレおつかア、まアおれがのみこんで居るから、手をはなしなせえ。」 母「エ、おめへがいくら呑込んで、此奴が飛び込んでしやうがねえ。なんでもまア引き下してくんなせえよ。」 眼七「イヤサ、おれが飛び込んでゐるから大丈夫。」 母「おめへは飛び込むともどうともかつてにしなせえ。」 母「ト、氣のごとく泣きわめく。酒狂とはいひながら母のなげきに氣もたゆまず、卒八は欄干へ抱き付き、足をふりはなさんと互にあらそひはてしなく、他人の手出しありては邪魔と、眼七呑七兩人にて母の手をむたいに引き離せば、しめたワツと一聲泣き出し、物ぐるはしく眼七をこぎ廻しにじりすゑ、物いはんにも聲いせず。」 母「ナ、なぜおれがて、手を、ウ、うぬが敵だ／＼。」 眼七「はもてあまし、呑七をたづぬれども、呑七は卒八が飛び込むを見ると爰に舟宿までかへりける。」 眼七「オイドん公／＼、どこに居る。まア来てくれねえか、こまりきるわ。」 母「口の耳へそれとは知らず。」 母「これ母さん、案じなさんな。ほんたうに身を投げはしねえヨ。是れが今日の茶番だよ。」 母「エ、小井口な子供をだますやうな事、現在今爰から飛びこんだは、うぬがおかけでか、りッ子をしなねえ死をさせたゾ。なんでもうぬが解死人だ。ホオイ／＼／＼。サア卒八をいかして返せ。」 眼七「ム、ヨ

いかして返すから、まア柳橋まであゆびなせえ。ちつとも早く引き上げて、水でもはかせよう。」此の言葉にもと思ひし様子にて、母「ム、そんなら早く舟をかりて尋ねよう。まだ間に合はうかね。」眼七「合ふとも、人水中に死して二十四時が内は蘇生すと、論語に出てゐるわサ。」ト、眼七は苦しき儘の出たために行く。又最前卒八が橋より飛び込みし時は、ぞりや身投といふよりも、我もくくと川中を覗きみてどつといちど大わらひ、混雑のうちにも眼七は、卒八が趣向すつぱりいつたと心でわらひ、はやく母をこかけへ引き廻し、くはしく話し聞かせんとのおもひ居て、母に川中を見せ、龍宮玉取のまなびを見せなば、母も安堵すべきに、ひたすら見せてはあしきやうにおもひしは、ふつてわいたる母の邪魔もの出で来しゆゑ、うるたへてのみ居たと見えたり。見物の人川を「ワアイほくねんじんヤアイ。」「のろまヤアイ。」「まぬけヤアイハ、ハ、ハ、ハ。」それはさておき舟手の人は、かねて用意の家根舟に、たのみし遊びの人々へ魚盡しをかむらせて、橋間に近く舟こぎ寄せ、橋の上を見上ぐれば、何かはしらす人集まり、混雑をする其の中より、手摺へのほる人物は、まがふかたなき卒八が丈なる髪をふりみだし、今ぞ川へ飛び入る氣色。そりやくそ相圖と身がまへして、待てどもく卒八が、飛び入りもせず手間どれば、期にのぞみ氣おくれせしにや、合點ゆかずと、左次「コウなぜあんな真似をして居るだらう。」アバ「さうさ手間どつて居るうち、化があらはれちやアつまらねえもんだ。」出且「左次さんおめへまた、手足やからだも塗つてやればよかつた。アレ見ねえ、首ばかり真白で、總身は栗色だせ。ヘン爰から見ると松の木へ冬瓜がなつて居るやうだ。」左次「ちげへねえおれも裸になる事にツイ氣がつかなんだ。」野且「しかし塗らねえはうが綺麗だらうヨ。」

塗つた所が難船物のころ柿か、駄菓子屋の牛皮だらう。」圖武「汗をかいた二の腕は、丸揚のお薩とも見えよう。」アバ「はぎの白きを見ると、仙人が落ちるから、はぎの黒きを見たら、川童が天昇でもしねえければいいが。」およぎ人の若イ衆「モシむだつ口アいいが、あゝしてゐたら、橋番から出てつかめられるだらう。早く飛び込めばいいネエ。」左次「左様サバかくしい、何をして。」ト、言葉もいまだ終摺ををどりこえ、ポンと飛びこむ橋杭の、間かずも多き其の中に、いつもかはらぬ間のわるさ。うるく、舟が大開より、何心なく乗り出す。途端にどうと胴の間に、積みかさねたる瓜西瓜の上へどつさり異形の人物落ちて、そのまゝ倒れる。商人みなく仰天し、おなじく尻居にどつさり顔見合はせてゐたりしが、あたりの舟にもたちさわぎ、そりや身投ぢやといふよりも、われもくくと漕ぎ寄せる。橋の上には口々に「のろまヤアイ」「とんちきヤアイ」トどつと一度にわらふ聲、又踏みちらしたる水菓子 商「ヤレ船助ソレ西瓜を早くかきよせろ。」ト、かねて心得あるももやひ棹を水下へなげられる。今一人は卒八が大の字なりに倒れる顔へ、さそくに川水を吹きかけ、商「オ、うち、大半集めひろひとる。今一人は卒八が大の字なりに倒れる顔へ、さそくに川水を吹きかけ、商「オ、イ女ち、ヤアく此の女アきんた、オ、く毛だらけなからだ。コリヤア何だらう。コレ瓜吉や、オイ船助もはやく来て見てくれ。」ト、うるたへる。また近邊にもやひし舟もみな集まりて見物する。最前より左次のみし所の人々、彼のあらしたる商人舟に、わ若助「おめへさん方のおたのみだがネ、私等アさういつちやアをかしいけれど、いれんな馬鹿もして歩行いて、人の世話厄介にもなつたり、又およばずながら人のことも、ナア金本たうにヨ、そつ首が半分かけて、半死半生になつたもんでも、たのまれて引きとりにいつた事も、いくらも有りやすけれど、此の一件はどうもナア八、あんまり人は集まつてやす

もので、此のおばさんに一口上げてくんなせえな。」母「イエ／＼どういたしまして、酒どころか、ひとりの俸が死んだか生きたかといふ所で、なんならわたしも御一所にめゑりませう。」呑七「なるほどそれもよからう、ナウ左次さん。」左次「ウ、するぶんいい事はいいが、あのなりを見たら又。」母「ハ、アそれではモウ、水ぶくれになつて。」左次「何サ／＼、さうではねえが。」次郎「モシやつぱり乗せ申しておいでなせえ、かまふ事アねえ。」アバ「そんならさうよ、サア一所に。」母「ハイ。」ト、返事はしながら腰たたずあせり廻るを、呑七眼七右の腕をもちそへて、扱最前の商人舟には身投と見えて、異形の人物船中にたふれ居るゆゑ、大きに驚きうろたへさわぎ、うち寄りさま／＼介抱すれば、やう／＼息を吹きかへす。されどもあまり見物の舟おひ／＼に集まりしかば、先づ片陰へよけんとて、本柳橋の横堀へ舟を入れ、爰にて薬など買ひ寄せ、猶々介抱するゆゑ、いよ／＼生氣になりたるを見て、商人「是れおめへはまア女の禪をめて、天窗へはかづらをかけて、まづ茶番狂言でもして居たといふ様子だが、マアどういふすまねえ事があつて身を投けたのだ。」ト、聞かれてさすがの卒八も、船中のやうすを見れば、かば、さながらおもひ付きの茶番ともいひかね。卒八「イヤモウ何といはれても、一言の申し譯もござりやせん。どうぞまア料簡しておくんせえ。」商人「何サ料簡するもなにもいらねえが、まづおめへの身分の事だが、どういふすまねえ事があつて、死なうとまで思ひ詰めなかつた。なんにしる悪い料簡だ。殊に狂言でも仕よう

といふくらゐだから、何も深くもよほしたこともあるめえ。定めて何かふつとした出来心で、死ぬ氣になつたもんだらう、なんにしる不料簡なことだ。そしてまアお前のうちはどこだエ。」卒「エ、何サ連のものもありますし、そして龍宮のやつらでも、來さうなもんだ。おれが飛び込んだのを見てるたらうに。」商「なんだ龍宮の奴等とは、そりやアおめへ心安いのか。」卒「さやうサわたしが飛び込むのを見ると、すぐに出る筈にしておきやしたが、大方此の舟へ落ちたもんだから、そこで皆はづしやしたらう、ばか／＼しい。あんまりたのもしくねえ奴等だ。」ト、何かわからぬくりごとをいひつ。商「是れおめへはでえぶ取りのほせて居る様子だが、まア／＼落付きなせえ。おれが呑込んでゐるから、龍宮へでも極樂へでも、すきな所へやつてやるから。マアお前のうちはどこだエ。これサ其のやうに手をついて居すと、まア顔をあげなせエ。」ト、打寄りてだましすかして尋ねられ、さすがの卒八もせんかた盡きれば、さいはひ知る人なれば。次郎「オイ菓兵衛さん、おめへの船か、イヤとんだ目にあつたナウ。しかし其のお人はおらがうちのお客だが、エ、引、チト間違への事があつて、マアコレとんでもねえ、是れまアなんにしるお前が氣の毒だが、それもマア、眞によ。狐にナウソレ、エ、引、マア是れ間違へされたと思つて、何にしるおれにあづけてくんねえ。」商「ハア次郎さん、おめへん所のお客かえ。やれ／＼それはマアいい。どうもソレ、さつきから此の方にも色々所を聞きやすけれど、ヤレ龍宮から迎へがくるの、な

んのと、わからねえ事ばかりいつて居さつしやるから、今も船助や瓜吉と相談して、橋番へでも連れて行かうかと思つた所ヨ。」ト、殊の外もあましたるくちぶり 左次「イヤモウひよんな事でおほきにお世話になりやした。お氣の毒ナ。」商「お前さんがたのお連れかえ。どうやらチト、まちがつて居なさるやうだが、危えことをしやした。まア、おまへがたにわたせば安堵だ。次郎兵衛さん、そんなら御世話ながらつれ申して行つておくんせえ。」ト、却つて先よりのまれば 左次「サア次郎さん、そんなら斯うしてゐては御商賣のおじやまだから、ちつとも早くこつちの舟へ引きとりやせう。」商「左様サ、どうぞ早くさうしておくんなせえ。また飛び込まれようかと思つて、此の通り禪の三ツを押へづめだア。サアもしおめへの心安い衆が來なすつたから、あつちの舟へ乗りかへなせえ。そして必ず馬鹿な料簡を出しなさらねえがいい。眞によ、死んで何がおもしろいものか。サア、立ちなせえ立ちなせえ。」ト、引き立つれど、腰を強くうちし故、急に立つ事かなはず、さすがの卒八もしをれきつて洒落も出でず。さりながら始終亂心のあつかひ故、まだしもそれにまぎらして、様々のたはことをならべたて皆々にたすけられ、やう／＼舟を乗りかふる。又母はさいせんより船中にて茶番の始終くはしく聞いて安心はし 次郎「そんならたれども、腰の立たぬに何れも當惑しけれど、まづ商人舟へはそれ／＼に禮をのべて立ち別れる。」次郎「そんなら菓兵衛さん、いづれわたしが禮に行きやす。ア、是れ、大きにとんでもねえ。ハ、アイ、そんなら。」ト、みな／＼も相應の挨拶にて引き分け、やう／＼舟宿まで立ち戻り 左次「次郎様とてもの世話ついでに、おめへの心安い醫者さまを頼んでくんせえ。先づ爰で見てもらひてえもんだ。」次郎「アイするぶん

醫者も有りやすが、こんな怪我には、彌次兵衛さまがようございやせう。」出且「違へねえ、千住なら大丈夫だ。ア、しかし道法が大變だナ。」圖武「いや／＼近くていいのが有るわ、駒形の榮順さんに頼むがいい。あれは河童相傳で、打身の療治は名人だ。」吾「ほんにさうだッけ。駒形なら舟で行けばさうさはねえ、それがいい／＼。」次郎「それとも彌次兵衛さまになさりたくば、お玉が池の若旦那の出張へいけば近いネ。」卒「おらア駒形の方にしよう、おたまがいけエばかりではねえ、尻が痛えから河童相傳がよささうだ。ア、是れ天窓が痛えといふ地口だが、おめへ達にやア聞けめえ。」左次「エ、べらほうめエ、しやれが出るやうか。俺には大きにうたせさせ、いま／＼しい。」卒「そして榮順さんが容體を聞いたら、駒がた船中落ちやしたといふ氣だが。」左次「ア、うるせえぞ。氣儘にしておけば、あんまり不景氣な洒落ばかりならべたてる。モウ／＼しかし此の洒落が出るやうでは、案じる事はねえ。」卒「此のしやれがよかア魚でんにするがいい。」アバ「エ、うつたうしく、下物ばかりならべたてるぞ。いいサ此の節のことだから、こはだ好しなことを何とでも鯛ッしく。」ト、例のぢやれの數ものはては大笑ひとなり、卒八も思ひのほかすこやかになり、さしてうろたへ療治するほどにもあらざれば、一まづ住吉にて大酒となり、それよりも涼みながらのかへりがけ、かの齋藤が名術にて一療治にてさらりと全快、歸るとすぐにしやうこりもなく、夏の趣向の跡がまをかけてそばから焚きつけられ、たちぎえなきはかねての議定と、遊戯に倦まぬ能樂人、なほ池の端の參會に、今度はいちばん氣をかへた趣向をついでる八笑人、第四編目に奉入御覽候。